（表紙）

義久公
義弘公
家久公

慶長二年 自九月 至十二月

後編 舊記雜錄 巻四十

302

『嶋津氏文書』「正文在文庫」「義弘公御譜中ニ在リ」

「自伏見台章」

八月十六日注進狀、被加御披見候、赤國之内南原城、大明人楯籠付而、去十三日取巻、同十五日夜令落居、其方手前首數四百廿一討捕、即鼻到來、粉骨至候、最前番舟切捕、度々手柄無比類候、弥先々動之儀各申談、丈夫可申付事肝要候、猶増田右衞門尉（長盛）・長束大藏大輔（正家）・石田治部少輔（三成）・徳善院（玄以）可申候也、

「朱カキ」「慶長二年」九月十三日 ◯「大閤御朱印」

羽柴兵庫頭（義弘）とのへ

303

「又七郎豊久譜中」

「正文在島津安藝守久雄」

八月十六日之注進狀加披見候、赤國内南原城、大明人楯籠付而、去十三日ニ取巻仕寄仕、十五日夜責崩、其方手前首數十三討捕由候、則鼻到來候、粉骨至候、最前番舟切捕、度々手柄無比類候、弥先々動之儀各申談、丈夫可申付事肝要候、猶増田右衞門尉・長束大藏大輔・徳善院・石田治部少輔可申候也、

「朱カキ」「慶長二年」九月十三日 ◯「御朱印」

嶋津（豊久）又七郎とのへ

島津又八郎（家久）とのへ

304

「義弘公御譜中」

「正文有之」

八月十六日之御注進狀、披露申候處、今度赤國之内南原之城、即時被責崩、悉被討果、鼻如目錄到來、御感不斜候、各御粉骨無比類御動、神妙ニ思召由、被成 御朱印候、誠以御手柄共候、全州表へ御動之由候、猶追々御吉左右奉待候、恐惶謹言、

305

「朱カキ」
「慶長二年」九月十三日　　長束大藏正家（花押）
　　増田右衛門尉長盛（花押）

羽柴兵庫頭殿
嶋津又八郎殿　御報

「御文庫四拾八番箱中」「義弘公御譜中ニ在リ」
「ロ裏ニ」
羽柴兵庫頭殿
嶋津又八郎殿　參　　竜伯

態飛脚差渡候、

一於其表度々御勝利、殊更各手柄之通承、大慶此事ニ候、御軍勞之段爲可申入、用一翰候事、

一及兩度雖被成手柄候、直ニ不被成言上候事、其元之油断之様ニ取沙汰候、已來者石治少老迄、直ニ書狀にて可被申入事尤ニ候、態其元より使可差渡事難成候者、傳書成共右之分別肝要ニ存候事、

一御成之儀、急ニ被仰候、先進上之銀子參千枚、是を慥ニ用意可仕由候、就其帖佐・鹿兒嶋留守居衆へ、稠敷其元より可被仰付候、大方ニ候てハ相調ましく候、結句當年ハ國元不作之由申候、彼是ニ付、能々念を入可被仰渡候、爰元よりハ節々無油断申下候、爲御心得候事、

一佐多宮内少輔事、　義弘前者無別儀相濟候通、幸侃書狀を以安宅殿迄申上候、其辻として承候間、召出候、其上知行等之儀も、達而被仰候間、難黙止候て、相應ニ可遣由申候事、

一御上米此比相濟候、遅々咲止ニ存候處、澤田五兵衛尉殿上洛延引故ニ、當年者相拘候之欤と存候、來年なとハ能々稠敷念を入、三月中ニハ何としても進上可有様ニ、堅可被仰付事專一候、

一小西殿當手ニ付、御懇之由承及候間、爲可遂一礼用書狀候、然々音信等無之候へ共、急便之飛脚故、銀子五枚令進入候、御取成賴入候事、

一借銀返弁之儀ニ付、旅庵不參候てハ爰元相濟ましき由、安宅殿より頻ニ被仰候間、上洛可仕由申下候、是又爲御心得候事、

一當手人數付之事、慥可被相究事尤ニ候、　上使御糺明之人數付ニ相洩候衆ハ、徒事候間、自然引兵粮等之時者、御用捨有へく候、猶期後音候、恐々謹言、

「朱カキ」「慶長二年歟」九月十三日　　（義久）竜伯（花押）

又八郎殿

羽兵庫頭殿　参

306

「家久公御譜中」

「正文在之」

遙久不得好便、不能書札背本意候、扨々今度無比類御動、殊更高麗人數百人被討補（ママ）并番船已下被切取候事、無其隠候、尤珎重々々、御高名無申計候、弥被任御存分、早々御歸陳待入候、將亦以前ハ御懇之事、殊ニ其元御在陳之中、爰元迄之御音信無是非本望之至候、猶委申度候へ共、急便之由候条、先一筆令申候、猶々去事、追々可申承候、已上、

「朱かき」「慶長二年か」九月十三日　　（前久）（花押）

又八郎殿　　竜山

307

「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」

其元御辛労察存候、殊度々御勝利目出候、

一高麗大鷹預候よし承候、頃國元より之到來ニ、無恙濱之市へ届候由相聞、令祝着候、

一相州國廣之刀之事承候、田代甚介罷上候間、可至持參之由申くたし候、然共于今無上着候、其表於長陳者、かならす從是さしこし可申候、

一ゑのゝ鹿毛御所望にて候、大山所よりも右之旨申上せ候、早々さし渡候様ニと申下候、是又爲御存知候、恐々謹言、

「朱かき」「慶長二年か」九月十五日　　龍伯（花押）

又八郎殿

308

「義弘公御譜中」

慶長二年九月、秀元・長政等到全義館、全義館去王城不遠、時副總兵解生恐日本兵直入王城、分其兵于稷山・水源兩處、以欲防之、黒田長政勤先鋒而進、朝鮮兵恐日本人之勇、守城而不敢出焉、故秀元等所向無敵、而長政忽與解生相逢、長政家臣栗山備後守・後藤又兵衛率五十騎急擊解生、時參將楊登山・遊擊牛伯英來救圍之、栗山・後藤不敢恐之、與解生・登山・伯英三將相接、東擊西突、

左施右轉潰圍而出、長政見之自督二千兵而進擊、秀元先陣亦継進、解生等辟易而逃、李益喬・劉遇節進兵來援、解生得力復戰、長政奮擊破之、秀元及諸將整列自後而進、解生卽速退兵、此時日將落矣、故長政等亦不追之、

309

「征韓錄抄」

南原全州ノ兩城落居シ、慶尚・全羅ノ兩道平均ニ屬スル故、諸將僉儀有テ、先ツ榜文ヲ立テラル、然ルニ慶尚道ハ兵庫頭義弘主是ニ宰タリ、全羅道ハ小西行長其封疆ニ宰タリ、其榜文ニ曰、「以下榜文、義弘公御譜中ニ在リ」

310

慶尚道昆陽定榜文之叀

一郡縣、自今以後、於土民百姓者、還住鄕邑而、專可務農耕事、

一於爲上官者、所〻尋探、可令誅戮叀、附於上官妻子從類、可誅死叀、附於官人之家宅、可令放火叀、

一郡縣之内不限土民百姓、官人伏隱處於告來者、可褒賞叀、

一自今被免死罪郡縣之人民等、於不還住者、如奥郡悉令放火、可誅死事、

一背此榜文、倭卒等殺害人民、致凶悪者、件〻到義弘、以書可告報叀、

右条〻、不可有僞者也、

慶長二年
九月　日

島津兵庫頭義弘(花押)
蜂須賀阿波守家政(花押)
生駒讃岐守一正(花押)
小西攝津守行長(花押)
毛利(吉成)壹岐守
鍋嶋加賀守直茂(花押)
池田伊豫守秀雄(花押)
中川修理太夫秀成(花押)
熊谷内藏允直盛(花押)
垣見和泉守一直(花押)
早川主馬頭長政(花押)
吉川藏人廣家(花押)
長曽我部土佐守盛親(花押)

「此正文、御文庫二番箱義弘公二巻中ニ在リ」

「此次ニ慶尚道丹城定榜文之事、ケ条ノ文面・名前等同文ナリ、略ス」

「正文有」「義弘公御譜中ニアリ」

全羅道海南定榜文之叉

一郡縣、自今以後、於土民百姓者、還住鄕邑而、專可務農耕叉、

一於爲上官者、所々尋探、可令誅戮事、附於上官妻子從類、可誅死叉、附於官人之家宅、可令放火事、

一郡縣之內不限土民百姓、官人伏隱處於告來者、可褒賞叉、

一自今被免死罪郡縣之人民等、於不還住者、如與郡悉令放火、可誅死叉、

一背此榜文、倭卒等殺害人民、致凶悪者、件々到行長、以書可告報事、

右條々、毫髮不可有僞者也、

慶長二年
九月　日

島津兵庫頭義弘(花押)
蜂須賀阿波守家政(花押)
生駒讃岐守一正(花押)
小西攝津守行長(花押)
毛利壹(吉茂)岐守
鍋島加賀守直茂(花押)
池田伊豫守秀雄(花押)
中川修理太夫秀成(花押)
熊谷內藏允直盛(花押)
垣見和泉守一直(花押)
早川主馬頭長政(花押)
吉川藏人廣家(花押)
長曽我部土佐守盛親(花押)

「此前ニ、全羅道海南定榜文事、外ケ条同文ニシテ、年月日ノ末ニ、日本備前中納言秀家一名アリ、略ス」

「義弘公御譜中ニ在リ」

「案文」

謹而奉致言上候、　一先度自全州御使衆ニ如申上候、青國へ相働、國中過半發向仕、それより赤國うち相殘こほり〳〵、各致割府、發向仕半ニ御座候、隙明申次第、御仕置城々、御普請ニ取掛り可申分候事、

一今度青國・赤國致發向、こほり〳〵之事、委細繪圖ニ書付致進上候事、

一御仕置城々、各致惣談相定申候、就其小西攝津守城之儀、最前ハしろ國之內と被成　御諚候得共、赤國順天

郡内所柄見合候て、取出可申候事、
一釜山浦之儀、最前ハ羽柴左近(立花親成)可致在城之旨、雖被仰出候、日本より之渡り口ニ御座候へハ、御注進等をも被申上、又御下知をも先手へさしはからひ、被申觸候ためニ、毛利壱岐守在城被仕可然と申儀ニ御座候事、
一羽柴左近事、慥なる仁にて御座候、併其身わかく候間、嶋津・鍋嶋城之間ニ一城取拵、被致在番候へと申儀ニ候、此等之旨宜預御披露候、恐々謹言、

「年号朱カキ」「慶長二年」九月十六日

備前中納言秀家　　熊谷内藏允直盛
蜂須賀阿波守家政　　早川主馬首(長政)
小西攝津守行長　　垣見和泉守一直
薩广侍従義弘
土佐侍従元親(長曾我部)
吉川侍従廣家
生駒讃岐守(一正)
鍋嶋加賀守(直茂)
嶋津又八郎忠恒
長曽我部右衞門太郎(盛親)
池田伊予守(秀雄)
中川修理大夫(秀成)
徳善院(玄以)
増田右衞門尉(長盛)殿
石田治部少輔(三成)殿
長束大藏大輔(正家)殿

313

「御文庫廿三番箱十六巻中」「家久公御譜中」

貴殿への書狀、鍋嶋信濃守・嶋津又八郎御兩人のかたへ、被遣可給候、郡の取納心持のためニ候間、扨者申入候、以上、
御使札本望至極ニ候、其郡百姓等少々被召直由、可然儀ニ候、弥被入御念尤ニ候、
一當納之儀、五の物を一ッ可致納所欤、又四分一可運上欤、百姓請相候様ニ、かろ〳〵と不可過御分別事、
一百姓前御定事澄候上ニて、重而可被仰聞様子者、從日本被仰出分者、百姓等命をたすけ、屋宅無放火、かれら望様還住被仰付候、此段忝と百姓等口上ニ述候處者、無證據候、底根日本之御百姓ニ於可成所存者、郡之上

官侍分之有家をつけしらせよ、さなくハ搦ても來れ、褒美者上官の上下ニよりて、或者其身之名田を令扶助欤、或者其身之古郷を宛行欤、此否僞有間敷候、かく事分而被仰聞候ニ、上官を不搦來、隠家をも於不告知者、先方を重くし、日本を輕るの子細ニ候間、如奥郡撫切ニあるへきと下知あらは、大略上官侍之有家をも致案内者、又搦來事もあるへきと存候、左様ニ候へハ、京都方之者共と百姓等とハ、永代遺恨之もといたるへき事、

一此上ニ、郡中百姓長のもの、人質をも被召置、年貢之請相狀をも被取置、人しちと請狀とおさの者共、五人十人ほと被差添、小攝所へ御渡可然候事、

一右之通ニ被入御念候てこそ、御爲にも可成欤、各連判之榜文も立へけれ、餘人之麁相ニ在之とて、若〳〵にせさせられ候へハ、公私の御ためニ不成儀ニ候哉之事、

一郡中肝煎之名、別紙ニ書付進之候、猶様子御使者へ申渡候間、可被得貴意候、恐惶謹言、

「朱かき」
「慶長二年か」九月廿三日　　熊谷内藏允直盛
　　垣見和泉守一直

早川主馬首長政

生駒讃岐守殿　御報

314

『雜抄』

任幸便用一翰候、隨遙久敷不能面談候、遠境之故無音所存之外候、仍今程御在京之由其聞候、苦労之至察存候、然者我等事、當國御番之儀被仰付、聢堪忍候、何様爰元御番相閉目、來春者必歸朝可申候条、其節貴僧も可有御下向候、万於栗野可申承候、恐惶謹言、

「慶長二年欤」九月廿三日　　義弘御判

運譽上人
玉床下

315

（本文書ハ三三六号文書ト同文ニツキ省略ス）

316

「正文在新納喜右衛門家」

今月中ニ參陳可仕之旨、申聞候へ共、此表御働、此砌ハ相延之由到來候間、先令延引、内〻出陳用意仕候て時分可相待候、自其可注進候条、其節無油断可渡海候、謹言、

三月八日　　義弘御判

新納狩野介殿

317 「正文在新納喜右衛門久盛」

連〻別而奉公可仕之旨申上候、其首尾于今無相違之由聞得候、誠以神妙之至、萬〻頼母敷存候、諸神八幡向後不可有忘失候也、

十一月十九日　　義弘御判

新納十郎殿

318 『嶋津氏文書』
（本文書ハ三〇五号文書ト同文ニツキ省略ス）

319 「正文在文庫」
（本文書ハ三〇六号文書ト同文ニツキ省略ス）

320 （本文書ハ「旧記雑録後編一」八五七号文書ト同文ニツキ省略ス）

321 （本文書ハ三〇五号文書ト同文ニツキ省略ス）

322 『嶋津氏文書』
（本文書ハ三一二号文書ト同文ニノキ省略ス）

323 「御文庫二番箱家久公七巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

態申入候、其元何程被仰付候哉、無御心元存候、當月中ニ被明御隙、來朔日ゟハ御普請場へ御越尤ニ存候、此由何へも申觸儀ニ候、中納言様御人數、當月中ニ明隙候様にと被仰付候、申様和順ニ御座候故、兩三人儀も御近邊ニ有之事候、然者道筋之儀、おくニ御座候衆をとおく、口郡之衆ハ其跡ニつかれ次第、くりの様ニ無之候てハ、なをり候百姓可致迷惑間、可有御通と思召候郡へ、いつ〳〵可有陣替候条、道筋之衆ハ御陣替被差延候へと被相届、尤ニ候、奥衆も不出ニ、口之衆陣替不可然儀ニ候、御手前之郡者、小攝請取之郡と近所候間、可然様ニ可被仰渡候、猶使者可得御意候条、不能多筆候、恐惶謹言、

九月廿六日　　熊内藏允　直盛（花押）

垣和泉守　一直（花押）

早主馬頭　長政（花押）

嶋又八郎様
御陣所

324

「御文庫二番箱家久公七巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

態申入候、

一御手前當月中ニ被明御隙、普請所へ從來朔日御越尤ニ存候事、

一百姓等雖被引直候、おく郡ニ被居候衆とをりかけニ、對百姓妄之儀有之而者、貴殿御精之入候処も、無專可罷成候、然間奥郡被仰談、被出候てより、貴殿之御陣替尤ニ存候、右左へ如此可有御心付候事、

一郡之館中事をさはき候役人、六人相定而有之由ニ候、又一村ニ三人ッ、肝煎有之事候、別紙ニ書付遣之候、なをり候内被相尋、彼者共ニ事究被仰聞、其者則小攝所へ御引合肝要存候事、

一郡内之上官并侍分有家を、從百姓中致案内者候へ、又者搦ても來り候へ、さもなくてハ、口上ニ百姓等忝と申分迄者、非證據候条、有家をもしらせ、搦ても來り候へ、其上者、對朝鮮國百姓永代不通之題目ニ候間、對日本忠信之子細たるへき由、可被仰聞候、不致同心者、不忠之百姓召直無專候間、如奥郡撫切ニなさるへき由、又可被仰聞候、其上にても不致同心候ハ、、不及是非候、先御引直候て、御歸尤ニ候事、

一當月中者備中様、和順郡欤、綾城郡欤、兩所之間ニ可爲御在陳候、御近邊ニ我等も致在陳候、來朔日ニハ、天氣次第到順天中様、可致御供所存候、期拜謁節不能多筆候、恐惶謹言、

「朱かき」
「慶長二年欤」九月廿六日　（熊谷）直盛（花押）「熊内蔵允判也」

嶋又八様
御陣所

直盛

325

「義弘公御譜中」

慶長二年十月、麻貴使李如梅入星州谷城而襲之、星州者筑紫上野介・久留目秀包守焉、南部無右衞門等出星州而退軍、忽與李如梅相遇、如梅前擊、筑紫・久留目等拒卻之、日本兵以寒氣既甚故、先皆納兵、

南原城既陷後一日在于此地、如元分別左右兩道、赴向全州欲攻彼城、然而陳愚衷聞南原已陷之聲、則委城引兵退

散矣、左右軍衆悉到于全州、五个日在此地、破卻當城、而後諸將向諸城、義弘父子去此歴數十里入海南城、在此地者數日之際、懐黎民聚米穀藏置之於倉廩、而後諸將分別軍列赴忠清道(チウシヤク)又云青國、義弘父子發於海南、數日行程漸過、到于全羅・忠清兩道封疆、爰有大河之不得徒渡者、欲疾渡而渡船不多、且復未知敵兵多少有無、則先不得渡寡兵、於茲使北鄕作左衞門尉三久渡先陣矣、後陣伊集院源次郎忠眞也、是亦前後慮敵兵之犯到也、皆以渡得忠清道之地、則先宿關山而後入舒川(セイテン)城、諸將發向諸城、後又經全羅道退慶尚道泗川古城者也、

邢玠聞南原全州之陷、而奏陳愚衷罪于明帝、又責李昭曰、日本攻伐朝鮮者是大明之耻也、故天兵數十万暴露既久矣、然李昭及群臣無戰心、既背主辱臣死之語、是度南原全州之敗者皆是李昭之過也、因是李昭驚懼、促八道之兵以從邢玠之命、

326 「家久公御譜中」

陳愚衷在全州、聞義弘・嘉明之遮通路、而不得救南原、時有告者、南原已拔矣、全州土民驚迷、愚衷制之、土民等大起急攻全州燒倉粟、而逃散于四方、愚衷大驚、聞日本兵既到任實、遽騷棄城而逋逃(ニゲテテ)、日本兵南原既陷後一日留于此地、如前分別左右兩道赴向全州、欲攻彼城、然而已棄城無一人之有敵兵、左右之十万兵五个日留全州破卻當城畢、而後別諸將向諸城、義弘父子去此歴數十里入海(ハイ)南(ナン)城、在此地者數日之際、懐黎民聚米穀藏置之於倉廩、而後諸將分別軍列、赴忠清道、又云青國、義弘・忠恒發於海南、數日行程漸過、到于全羅・忠清兩道封疆、爰有大河之不得徒渡者、雖欲疾渡、而渡舟不甚多、且復未知敵兵多少有無、則先不得渡寡兵、於茲使北鄕作左衞門尉三久渡先陣、後陣伊集院源次郎忠眞也、是亦前後慮敵兵之犯到也、悉以渡得忠清道之地、先宿關山而後入舒(セイテン)川城矣、諸將發向諸城畢、後又經全羅道、十月廿八日、退入慶尚道泗川古城者也、

327 「北鄕三久譜中」

慶長二年十月、　義弘公從全羅道海南城發向于忠清道、途中有大河、其廣可(ハカリ)六七町、時潮滿來輙難渡、衆兵暫在全羅之地而猶豫、三久進而先衆渡、諸軍見之、皆渡入忠清之地、

328

「征韓偉略」

一十月

十日、義弘父子入海南城、點檢賦税經略忠清道、朝鮮人據城者皆望風遁去、無迎戰者、遂轉還全羅道屯泗川營、泗川明人稱之新寨、（征韓錄）時我軍沿海爲營、朝鮮里程千有餘里、首尾連環相救、且以便漕運、南端泗川島津義弘・忠恒守焉、（懲毖錄、此条義弘作沈安頓吾、秉燭談曰、藁山棟齋雲老禪通西土音、因問之、老禪曰、明音清、故呼島津國訓爲石曼子、韓音濁、故呼爲沈安頓吾、）

329

『雜書』

其後者御左右不承候、如何國本無何事候哉承度候、仍奥入食濟候而、唐島ゟ五日崎そてんと申所へ、御在番ニ相定候、就夫銀子すり切めいわく仕候間、難成候共、貴所様御才覚を以、少成共御見次頼たてまつり候、手火矢未出來申候者、まつ〳〵めし置候て、銀子頼入候、將亦拙者長刀餘長、御供なとにあまり候間、貴所様助さた上ヶめし候て、御遣頼御油断有ましく候、ふちつはの事入ましく候間、早ゝ肝煎候て可被下候、委細ハ重而申入へく事候、恐惶謹言、

尚ゝ申入候、うは上さま、拙者はゝ、ちよ上、うふ上、亀上留主人源助殿内ゝ、のそいとの内ゝ、上床殿宿本、の村与早右殿宿本、皆〳〵御無事候哉、御心得頼たてまつり候、又ゝ申入候、市允・七郎・五吉・五左衞門、いつれも御留主中拙者親奉公頼入候、年之明暮ニハ歸朝申へく候間、左様の時分彼是可申通かたり申へく、めしつれ候者共、皆ゝ無何事候、以上、

拾月弐日　　孫九　幸孝判

白尾五兵衞尉殿　参

330

『雜書抄』

覺

一手習紙一そくノ事

一つかい上墨五丁ノ事

一脇本筆一對之事

但おやまた紙

一遣紙二そくの事

一もめんぬのこの事

一おわおひの事

但ぬのにて候
一下のおひの事
一かたひらの事
一かミけつるくしの事
一きり大こんの事
一いものくきの事
一銀子の事
右之分、便〻の時一ッ二ッ調候而、御遣賴入候、又ほしいなともひき候て、御遣賴入候、てるま・かくせいなと御坐候へ共、船ちん難成間、此度遣不申候、爲御心得候、

白孫九

白五入道殿

331

『雜抄』

其元無何事候哉、承度候、此地皆〻無何事候、御心遣入ましく候、就夫貴所様長刀食立候て、便次第御遣賴入候、鉄炮未相調候ハヽ、先〻食置候て、銀子少成共御見次賴存候、爰元摺切候間、迷惑仕候間、申事ニ候、尚重而可申入候、恐惶謹言、

尚〻申入候、一紙こそく　一ぬのこ一ッ　一銀子ノ事　一やさいノ事　一かつおの事　一筆ノ事　一もめんあハせ一ッ　一おひノ事　一かたひらの事　一てのこいノ事　脇た刀の事

拾月六日　幸孝(白尾)判

332

『雜抄』

猶〻貴所堪忍躰、左こそ乏候ハんと、從是思やる計候、併世上なミの儀候間、被思延候て堪忍可然候、全羅道之事、輙被成御成敗、各御開陣候、然者慶尚道之内泗川与申郡、赤國之堺にて候、從御奉行衆我等番所ニ被相定候間、此地ニ致堪忍候、近日御人數被相揃、城之可爲普請御催にて候、兼又莊内御料人懐胎之由候、別而可被抽丹誠事憑存候、猶期後喜候、恐〻謹言、

拾月六日　義弘(花押)

堯運坊

333

「御系圖」

諸將胥議、築城于慶尚道泗川海辺、号之新塞、使義弘父子爲守將、因是慶長二年冬、移新塞云〻、

334

「義久公御譜中」

「正文在山川衆大迫諸兵衛」

山川屋敷公役之事、御船頭被申ニ付、於高麗御免之由相
濟候、此等之旨、山川到役人も、拙子前ゟ可申理候、其
心得肝要候、恐々謹言、

「朱カキ」「慶長二年欠」十月十六日　伊右入
幸侃（花押）

大迫新左衛門入道殿　まいる

335

「正文在文庫」「義弘公御譜中ニ在リ」

急度被仰出候、從最前五ヶ城ニ被殘置候兵粮事、何茂手
前請取候分、當米ニ入替候而、其城へ可詰置候、來年者
御人數可被差渡候、依様躰、不計可被成御動座儀茂可有
之候条、不可有由断候、猶寺澤志ノ守可申候也、

「朱カキ」「慶長二年欠」十月廿八日　◯「御朱印」

嶋津兵庫頭とのへ

336

「御文庫二番箱義久公一巻中」「義久公御譜中正文有之トアリ」

八木千石、はら田喜右衛門ニくたされ候、薩ノ其方代官
之内迄もつて、海はたにて慥はかり可渡候也、

慶長弐年十月廿六日　◯「朱印」

いしたちふの少

337

「御文庫二番箱家久公八巻中」「家久公御譜中」

内々無御心元存候処ニ、預御使札本望候、去月十日ニ海
南被成御出、於途中兵粮御調候ニ付、廿八日ニ泗川へ御
歸着之由、致安堵候、鍋信州事も、南原まて御同道之由
尤候、爰許少明隙を候者、罷越御見廻可申入候、其節以
面上、万々可得貴意之条、御報不具候、恐々謹言、

「朱カキ」「慶長二年」十一月三日　福右馬
長堯（花押）

嶋又八様　御報

338

「義弘公御譜中」

慶長二年十一月、邢玠督軍渡鴨綠江、遂到朝鮮王城與楊
鎬・麻貴胥議軍事、日本諸將聞明兵之大至、而遣偵卒覘
其動靜、此時行長在松島、清正爲築城于蔚山、暫監經修
之事、其後清正欲構水路之諸城、故往西生浦而在機張、
加藤清兵衛留于蔚山、秀元兵加焉、故明人皆謂、清正在
蔚山也、秀秋在釜山、凡日本兵士在朝鮮者十三万餘人也、

諸將築新城於泗川海邊、自井樓櫓門壁至家屋兵器以下、無一之不備焉、總軍將曰、使義弘父子爲新寨警衛將帥、由茲不得固辭、而慶長二年冬日、移新塞定行伍、警衛不敢怠慢也、

尓來近隣要害之地修補之營作之、各俾我之士卒守焉、晋州城者遠新塞者路程五里、使三原諸右衛門尉重種・蓑輪治右衛門尉等領寡兵爲土民還住之宰、隔大河守彼地、永春壘者遣川上久右衛門尉久智守焉、望津營者使寺山四郎左衛門尉久兼守焉、舊館泗川古壘、者俾島津守右衛門尉彰久之臣川上六郎兵衛尉忠實爲警衛將、且代入諸士於其壘、共三百餘兵也、

十一月、邢玠分其兵爲三協、左協者副總兵李如梅馬步一万三千六十人、盧得功・董正誼・茅國器・陳寅・陳大綱屬焉、中協者副總兵高策馬步一万一千六百九十人、祖承訓・頗貴・李寧・李化・龍柴・登科・苑進忠・呉惟忠屬焉、右協者副總兵李芳春・解生馬步一万一千六百二十人、牛伯英・方時新・鄭印・王戡・盧繼忠・楊万金・陳愚聞屬焉、彭友徳・楊登山・擺賽・張維城等者爲救三協、故別爲遊兵、監軍者監察御史陳效也、朝鮮軍士亦屬三協矣、鐵炮一千二百四十四位、火箭十一万八千支、鐵炮火藥六万九千七百四十五斤、大小鉛玉百七十九万六千九百六十七斤者、遼陽分守張登雲運之、其餘三眼銃・鐵鬚筒・銃悶根・火砲・火筒・團牌・佛郎機等兵器皆収聚之、軍法尤嚴、

339

『雑抄』

御おんミつ申入候、なんもんしろくつしにて、拙子銀子のぶくろとり候間、藤介ニ持せ候へと者我〻ミせすニかけ候てあけ、一圓無御坐候由申候、此間にてせんさく申候間、若又はしり候て國本へ參候共、當年之ふちかた、明年之ふちかた、其外懸錢・懸籾無油断御方へめし置可被成候、拙子歸朝申候て皆〻請取可、藤介親きうたいヶ様成算用者共、一ッも渡有ましく候、右之様子、貴所様家内之者共ニ御かへし可有候、就中七郎五うちかたニ聞せ、ちうしたるへく候、貴所ふたりニ計、先〻書狀にて申入候事候、恐〻謹言、

猶〻申入候、ヶ様なる銀なとの風聞候へハ、人〻承候而、なにのかのと申候間、涯分御たしなミ尤候、

此方ニて藤介ニせんさく申候へ共、一圓無くのよし申へく候間、國本ニてさん用申、ふちかた候ヲ請取

申へく候、

又〻申入候、うは上さまさかしく候て、拙者歸朝御まち可有候、ミな〳〵ニ御心得賴入候、

十一月十九日　白孫九郎　幸孝判

白尾五兵衞尉殿

340

「義弘公御譜中」

慶長二年十二月、邢玠登壇祭天地犒諸將、而放數万鐵炮、其儀嚴肅、既而楊鎬・麻貴帥三協兵赴慶州、將攻蔚山、蔚山南有島山、清正兵亦守之、麻貴遣高策・吳惟忠於彥陽梁山、爲遮蔚山・釜山往來之路也、時宍戸備前守・淺野左京大夫幸長・大田飛驒守爲入蔚山、故陣于彥陽、先遣斥堠密見敵體、高策・吳惟忠兵見之、大進悉殺斥堠、幸長聞而怒曰、今既雖入蔚山、見斥堠之多死不逢敵兵而歸、則恐有後嘲也、卽欲進馬、宍戸・大田同止之曰、幸長之言固武夫之素志也、然明兵可多矣、今以我小兵往擊之、則何有利乎、唯速入蔚山而可也、幸長時年二十二、勇氣甚盛、故不用宍戸・大田之諫曰、我不見敵則其不歸矣、卽自操旄而進、宍戸・大田亦共發、忽與明兵相値、明兵察幸長等之寡兵、重圍而斬翦、幸長・宍戸・大田奮戰馳出、明兵追之、幸長等且戰且退、其間三里、幸長被創數矣、於蔚山近邊既欲戰死、此時亀田大隅守幸長家臣、擊殺敵將、敵軍亂散、時加藤清兵衞開城門迎之、依是幸長・大田飛驒守得入蔚山、宍戸備前守者被明兵隔、而不得入城轉自間路而入、加藤清兵衞馳驅于城中而監諸事、幸長守城面、毛利秀元分兵使守島山、太田飛驒守爲遊兵焉、城中糧粟不多、且近鄕之商人民黎驚明兵之大至、攜其妻子皆入城中、故穀粟尤乏、

李如梅・楊登山率兵攻蔚山、遊擊擺賽帥五百騎來到城壁下、相共競進、城兵見之鳥銃亂發鬨聲喧闐、而後一万人同出城門齊刃突戰、擺賽逃走、城兵追之、明兵多聚而圍之、城兵大戰擊走之速歸城、是時城兵死者四百人、明兵死者三千餘人也、蔚山・島山之間有一河、李方春・解生浮舟於此河、放火於近里乘煙欲攻入城、城兵察之急放鐵炮、方春・解生之舟蕩溺者四五艘、死亡者多矣、方春・解生僅免而歸、

加藤清兵衞欲遣使于機張召清正、因擇其价、時幸長臣木村賴母曰、我請往焉、卽馳騁逾日到機張見清正而語之、清正卽下令曰、速可促輕船、我出日本之時、與淺野彈正

相約幸長宜相救之事、而今幸長若死、則我何含耻再歸日本而逢彈正乎、我亦必死耳、我未到蔚山之前、幸長若既死、則我與明兵相戰強死、可報彈正生來之約于泉下而已、即率五百餘騎而赴焉、麻貴・茅國器合兵進攻破壁柵而欲入城、城兵大防之、銃發矢下無不中者、麻貴・茅國器力竭而退、

麻貴率大兵攻島山、島山崛曲而難登、島山守兵投鐵炮如雨、明兵顚沛退走、麻貴怒勵衆復進、城兵轉大木巨石以亂投之、明兵擾(ミダレ)散、城兵又飛鳥銃百發百中、由是明兵死者不知其數、麻貴恐全師皆没而空還兵、

清正率五百騎乘船十艘將入蔚山、明兵皆恐清正之勇敢、而不欲防留之、時清正被銀帽子兜鍪(トウホウ)、挾長刀立舟頭指麾兵士、遂入蔚山城、城中大喜勇氣十倍、明兵自二方相進而急攻、城兵以清正入城故膽氣愈壯、待明兵之蟻附于壁下、而投木石放矢炮、明兵中觸者、或摧兜鍪、或斷頭顱(ヒタイ)、明兵屢攻屢敗、故頗倦焉、明兵到楊鎬前議曰、以力攻此城、則損我兵而已、功其不成矣、想夫城中水利不便、且粒米不多、諸軍若圍而遠攻之、則城自陷矣、楊鎬同之、於是明兵共圍城而列營焉、然後城中水乏、故夜中密汲池水、池中多死屍、其水混血、城兵飲之以助渴、既而糧又盡、初呑紙煮壁土以充食、又殺牛馬養口腹、其後城兵潛出城搜撿明兵死者之腰、僅得燒米牛炙(アブリモノ)、而歸以爲食飢困甚矣、清正見之爲誘(アサムカンカ)明兵、故遣使于楊鎬曰、日本大將加藤清正與大明大將楊鎬相戰有日矣、我憐群兵無罪而死者、是故我親對楊鎬而後罷兵、楊鎬大歡曰、清正勢尽乞降、然我不赦之、面縛之獻明帝耳、聞者皆開眉、既臨其期楊鎬先往某地而待焉、頻招清正、清正蒙銀冑刷其軍糗將往會、時幸長來固止之曰、公其勿出焉、楊鎬之心不可料察、則會面之時彼使力士急捕之、則諸軍縱雖健勇而無益矣、若又公與彼堅約而不得不出、則彼何能知公之形狀乎、不可互認也、我代公而往耳、清正謝之、清正家臣・毛利家諸將亦皆曰、幸長之所言信然矣、因是清正心服而不出、即遣人于楊鎬而言之、楊鎬大怒、驅聚士卒欲急攻拔城、而寒氣甚重、故軍兵不敢從旨、

341

「御文庫四拾八番箱公義久巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

其後無音、遠方之故候、寔ゝ御軍労無申計候、

一定而年越候者、父子ニ一人可爲歸朝与存候へ共、左様之取沙汰無之候間、早打を以一書進候事、

一人數付之事、早ゝ可承よし度ゝ申候、是者爰元出合ニ、

子細可入見及候ニ付申候ヰ、于今延引候事無心元候、
其上方〻より御注進、節〻御坐有よし傳承候処ニ、武
庫陳所より、とかく御注進無御申候、御無沙汰事足な
き様ニ下〻申由聞及候、上儀ニ者あらす候事、
一其元番所之事、そてんと聞え候、其國之口から清濁文
字なと、くハしく書付候而可給候、并所からの躰景氣
をもくハしく承度候事、
一此方無何事候、京都へ御城かまへさせられ候而、九月
廿五日御わたまし候て、同廿八日　秀頼様御同前ニ御
参内ニ而、十五日ほと京都之御城へ御逗留にて、それ
より伏見へしかと御坐候事、
一毎年三奉行より引付を取候而持参候、新暦之うつし進
之候事、
一來年之吉凶占せ候て、書付進之候、猶期後喜候、恐〻
謹言、
「朱カキ」
「慶長二年」十二月二日　　龍伯（花押）
又八郎殿

342
「家久公御譜中」
「正文在鹿兒島町仲馬　七郎兵衛」

薩摩船五枚帆　船頭隼人佑
加子四人　てるま・かくせい三十人
合三拾五人　令歸朝候間、無吳儀可有御通者也、
慶長二年雪月九日　　嶋津又八郎（花押）
船改御奉行中
参

343
「又七郎豊久譜中」
「正文在伊作衆樺山藏人入道一鈞」
各事、從最前毛利壱岐守申談、一手ニ可相動之由被仰付
候、今以同前候条、手成能様ニ、諸事壱岐守申次第、可
隨其候、來春三月必被成御渡海、一揆悉被加御成敗、御
仕置可被仰付候条、其中聊尓之動有之間敷候、兵粮董田
城に堅固相拘、御渡海可相待候、猶長束大藏大輔・木下
半介可申候也、
「朱カキ」
「慶長二年」十二月十六日　◯「御朱印」
嶋津又七郎とのへ

344
「義久公御譜中」
「正文有之」

立願文

清水千手觀音可奉讀誦普門品一万巻叉、右意趣者、奉爲國家安全、武運長久、子孫繁榮、息災安穩、諸人快樂故也、仍大願如件、

慶長二年十二月廿六日　　龍伯(花押)

345

「又七郎豊久譜中」

「正文在島津安藝守久雄」

爲歳暮之祝儀、呉服一重、并北政所へ呉服一重到來、悦思食候、猶長束大藏太輔可申候也、

「朱カキ」「慶長二年欠」十二月廿七日　◯「御朱印」

嶋津又七郎とのへ

346

覚　　於唐島迫渡書始

慶長二年七月廿八日

一固川之内から島之瀬戸を御渡候て、固川之地へ御陣取候、同諸軍勢　殿様御供ニて、可爲罷渡候、御打立酉の刻ニて候、朝の程小雨ニ而候、

一武庫様於御陣、御食御寄合ニて候、御出巳の刻、

一雨も未の刻より晴申候、風ハはへ、

七月廿九日

一瀬戸口の御陳より四里御越ニて、野陣ニて候、

一風ハ北ごち、酉の刻より俄雨ニ罷成候、大風大雨也、洪水出候、

七月卅日

一大雨ニ付、右の御陣所へ御逗留候、風ハこち、洪水也、

慶長二八月一日

一右の野陣より四里程御越候へハ、固川へ御着候、其より四里御通候て、野陣被成候、但西向前へ大川あり、

一武庫様より西市佑と申御道具衆、御使ニ被參候、

一雨も曉より晴申候、風ハにし、一武庫様へ爲御使、河村七郎右衞門・小島勝介被遣候、

八月二日

一右之御陣所より泗川迄三里、御陳替候、御陣ハ西向、御打立巳の刻ニて候、御陳取未の刻、　殿様計さきへ御越候て、跡より圖書頭殿御主取被成候て、御越候也、

八月三日

一混陽固城より六里御越被成候て、野陳にて候、御打立巳の刻、御着陣酉之刻、御陣前へ小河あり、ひかし向、一風ハにし、

一小西攝州之御手へ御付候、備前之中納言殿も同日ニ被打立候、泗川ニて喧嘩備前衆有之、右古城より一里程御越候而の事也、

八月四日

一右の御陣より一里御越候而、小陽与申城へ、其より五里御越候て御陳取候、御打立辰之刻、酉の刻より雨ニ罷成候、風ハはへ、

八月五日

一河東右の御陣より御打立巳の刻、雨も曉より晴申候、風ハにし、御陳は南向、光陽より七里御越候て、川東へ御着候、同　武庫様御寄合候、　大殿様ハ船より御廻被成候、

八月六日

一川東へ御滞留候、一風ハにし、その外何たる儀無之、

八月七日

一川東へ御滞留候、一諸組へ鉄炮いたつらニ打事法度之儀被仰渡候、何たる儀なし、一風はにし、

八月八日

一川東へ御滞留候、一黒田官兵入道殿より走者之儀候、使者進上候、則齋藤源介・葛西勝右衞門御使ニ被參候、走者被歸候、一御陣屋出來候て御移候、一風ハにし、一大田飛驒守殿へ御使ニ、三原諸右衞門被參候、御狀參候、一鷹一ツ、本田吉右衞門進上候、

八月九日

一川東へ御滞留候、一小攝より瀧七右衞門殿御使ニ被參候、南原へ御陳替之儀にて候、一毛利壱之助より御礼ニ使者御進上候、一風ハにし、酉之刻より雨ニ罷成候、一圖書頭殿陣所へ　殿様御出被成候而、御振舞御上候、

八月十一日

一求礼雨も曉より晴申候、風ハにし、一川東より五里御越候て、御陳取候、御陣ハひかし向、一小攝へ新納小兵衞殿御使ニ被參候、御狀被遣候、一小攝より南原と申城へ、江南人多ゝ在之由、使者を以被仰越候、使小西又右衞門どの、一殿様御打立卯之刻、御陣取酉の刻、勿論諸國の衆も悉被打立候、

八月十二日

一右之御陣より九里御越罷成候て、南原へ御陣取候、御打立丑の刻、御陳取酉の刻、但御陣所南原ゟ東の山ニて候、

一南原の城見ニ　殿様御出候、一於南原城詰の闔取候、

然処搦手ニ相定候、一御陣ハにし向、南原ゟ東の方、
一風はにし、晴天、一南原へ御逗留候、

八月十三日

一右之御陣所より、南原の城近く御陳替候、但半道有之所都也、弱手ニ陣取候、日本の諸勢詰陳にて候、
一風ハはへ、亥の刻より雨ニ罷成候、南原へ被成御逗留候、

八月十四日

一雨も夜明候て晴申候、かせはにし、其外何たる儀無之、南原へ御滞留候、諸陣も無事ニ候、よもすから大雨ニて候、

八月十五日

一奥より唐人共、若も可罷出かと候て、右之御陣よりうへの山ニ御陳替候、さやうニ候て、奥よりの爲手當、薩摩衆・加藤衆一ッ當りニ御陣取候、但全州之方、
一夜入候て、戌の刻ニ諸陣の人衆被押寄候て、南原の城の當ニ仕寄にて候、ことの外鉄炮取合候、然処ニ如何候哉、城の内の江南衆、悉城を明除落行候を、此方之御陣より御續候て、唐人數佰人被討捕候、勿論城の内外ニ、諸陣の人衆被討果唐人數千人ニて候、數不知候、
一風はにし、晴天、一南原へ御滞留候、

八月十六日

一備前中納言殿へ、御見廻ニ　殿様御出被成候、勝軍の祝ニて候、
一又七殿御見廻ニ御出候、右同、
一かせはにし、　殿様南原へ御逗留候、一小攝より瀧七右衞門どの御使者御越候、勝軍之儀ニ付如此候、

八月十七日

一南原へ御滞留候、終日何たる儀無之、風ハにし、

八月十八日

一南原より五里御越候て、御陣替候、御打立巳の刻、御陣取ひかし向、廻越ニ備前衆も陣とられ候、但大勢にて候、
一かせは北、

八月十九日

一右之御陣所より六里御越被成候て、全州へ御陳取候、勿論日本の諸勢皆〻陣取候、御打立刁之刻、御陣取酉之刻、
一又七どの御見廻ニ御越候、一かせハにし、

八月廿日

一全州へ御滞留候、一備前之中納言殿ニ、御礼ニ御越候、
一上使御着ニ付、御礼ニ御出候、一酉の刻より雨ニ罷成候、風ハこち、

八月廿一日

一全州へ御滞留候、一雨も巳之刻より晴申候、風ハにし、
一上使ニ御見廻ニ御越候、一小西攝津守殿へ御見廻ニ御出候、
一鷹一ッ三原諸右衞門進上候、一黒田如誰齋より刀一腰御進上候、使ハ伊民殿、

八月廿二日

一全州へ御滞留候、一備前之中納言殿へ鷹一ッ御遣候、御使肥後勝兵衞殿、御狀參候、一風ハにし、晴天、

八月廿三日

一全州へ御滞留候、一風ハにし、晴天、一諸陣へ御礼ニ御越駕候、
一馬壱疋但鞄毛、野村清介進上候、

八月廿四日

一曉雨ニて候へ共、晴申候、風ハ北、一全州へ御滞留候、
一北郷作左衞門殿ゟ鷹一ッ御進上候、一全州へ城わりニて候、日本の諸勢被相揃候而の儀候、

八月廿五日

一全州へ御滞留候、晴天、一御朱印下候、御袷十ヲ同様候、
一鷹一ッ圖書殿御進上候、但半眼にて候、一又七殿御礼ニ御出候、御振舞候、一京衆へ人切參れ候て、さるミ弐人きられ候、右の人へ銀二枚給候、一風ハにし、晴ニて候、

八月廿六日

一全州へ御滞留候、晴天、一上使ニ御見廻ニ御出候、
一上使へ金二枚御遣候、一風ハにし、一加藤主計頭殿より、鎌鎧一本御進上候、一又七殿御越ニて候、御寄合候、

八月廿七日

一晴、風は北、一黒田甲斐守殿・伊東民部太輔殿御見廻ニ御出候、一御陣替之儀ニ付、小攝州へ本治兵御使ニ被參候、
一馬一ッ黒田甲州へ但ぶち、御進上候、早馬也、一加藤主計頭殿へ鎌田守右衞門御使ニ被參候、右の鎧の御礼にて候、
一全州へ御陣所より、夜入候て壱里御越而、御陣取候、御陣南向、子の刻雨ニて候へ共、曉晴申候間、その日

は益山へ御通ニ定候、一御奉行衆へ本新介御使ニ被参候、

八月廿八日

一益山右之御陣所より一里程御越候折節、蓮菅阿波守(ハナスガナルベシ)どの衆と喧嘩出來候て、村尾与五郎手負れ候、さやうニて四里御越候て、御陳取候、御打立午の刻、御陳取酉の刻、御陣ハひかし向、但田の中ニて候、

八月廿九日

一右の御陣所より五里御越被成候て、竜安へ御陳取候、城の外へ御陣ハひかし向の在郷ニて候、御打立巳の刻、竜安へ酉の刻ニ御着候、五里程の間田の中迄也、

一小攝州へ、御使ニ本治兵被参候、一鴈一ッ平田式部少輔殿進上候、一中途之小攝ゟ、瀧七右衞門殿御使ニ被参候、一武庫様より南郷覚右衞門御使ニ被参候、

一夜入候て、龍安の城内へ有之家御焼せ候て、終夜放火ニて候、一かせは北、晴、

慶長二年九月一日

一竜安(石城)之城より七里御越候て、石城と申所へ御陳取候、御打立巳の刻、御陣取戌の刻、御陣ハ西向の迫ニ候、道ハ田の中續、一鴈ねらひニ御出候へ共、あそはす候、天川越ニ五十間程の石橋有、塩入也、

一風はにし、

九月二日

一扶餘石城より三里御越ニて、扶餘と申所へ御陣取候、御打立辰の刻、御陣取未の刻、御陣ハひかし向、

一御鷹野へ御のほせ候、鳥一ッとまり申候、

一武庫様・右馬頭御食御寄合候、一舟取ニ、本治兵衞殿主取にて、人數餘多差遣られ候、一鴈一ッ川上助七進上候、

一風ハこち、

九月三日

一鳥ねらひニ御出被成候、從　殿様別方角へ、吉利李右衞門・桂兵吉・川上助七御遣候、一扶餘より半道御越ニて、川はたへ御陣替候、御打立ハ未の刻、御陳は北向、火事出來候、一小西攝津介殿へ御見廻ニ御出候、

一北郷作左衞門殿ハ川を御越候て、御陣取候、

一瀧七右衞門殿・渡邊小兵衞殿御見廻ニ被参候、然処其刻御馬煩候て罷居を、渡小兵衞へ養生之儀御頼にて候、

一小西主殿助殿へ、川上左近將監御使ニ被参候、北郷どのへも被参候、一風ハ北、鴈一ッ相良玄蕃殿進上候、

九月四日

一御鷹へ、御陳所へ前にて雉子一ッ御とらせ候、まるはせ也、

一御鷹野へ鷹師迄御遣候而、雉子二ッとまり申候、

一さるゝ鼻之儀ニ付、奉行衆へ肥後加兵衛殿御使ニ被參候、一備前中納言殿へ、御使者ニ川上左近將監被參候、一武庫様へ小西攝津介殿・熊谷内藏允殿御出候間、殿様中途御出被成候而、御案内者被成候、一鴈一ッ伊勢三四郎進上候、

一同一ッ白坂惣兵衛殿進上候、一河原へ晩付御遊山ニ御出候、一風はにし、晴天、一小西攝津介殿へ御使伊地知与兵衛殿被參候、一江南人之儀ニ付、小攝より瀧七右衛門どの御使者ニて候、

一扶餘の川はたより三里御越被成候て、林川へ御陳取候、御打立辰之刻、御陣取酉の刻、川は瀬渡にて候、

一扶餘の川はたへ、薩广衆まて大川ニ付候て、奥へ御通有へきよし相定候のゆへ、奥へ御入候、但青國之内、

一馬一疋但ぶち、北郷作左衛門殿御進上候、　殿様御祝被成候、一風ハ北、晴天、

一晩ニ御食御寄合候、但武庫様より、

九月六日

一林川を辰之刻ニ御打立ニて、未の刻ニかむさんへ御陳取候、道ハ三里、御陣南向、

一熊谷内藏允殿御見廻ニ御出候、一御鷹野へ御のほせ候、

一晩ニ付、熊谷内藏允殿へ御食御寄合候、一風ハ北、朝大霜ニて候、

九月七日

一寒山かむさんより三里御越候て、舒川へ御陣取候、御打立辰之刻、舒川へ未の刻ニ御着候、城はにし向、種ゝ見事成城也、一かせはにし、晴天、

一鷹一ッ薗牟田弥吉進上被申候、一船取ニ肥後少兵衛殿・本田新介御つかわし候也、

一鴈一ッ川村七郎左衛門進上候、一又五郎殿・又六どの・喜入殿・源二郎殿・抱節・比志嶋紀伊守、此御衆へ寄合候、一於舒川之城小西攝津介殿手之人數へ御取相候、左様ニ御座候て、八日よりの御陣引相定候、

一舒川之城被燒払候間、一宇不殘候、

九月八日

一舒川より御引陣にて、かんざんより一里御越にて、四里程ニ御陣取候、御打立辰之刻、御陣取未の刻、御陣

南向、小攝其外諸軍衆不殘御引陳候、
一かせはにし、晴天、一鷹一ッ從　武庫様御進上候、
一鴈一ッ本田兵右衞門進上候、
一ひしくい一ッ肥後少兵衞殿進上候、一熊谷内藏殿へ御見廻ニ御出候、一從熊谷殿さるミの儀ニ付、捻御進上候、即さるミ十人岩切雅樂助御使ニて被遣候、さるミ鼻も參候、但はな數二百五十、
一大川渡口見ニ御出候、川の渡半道あり、

九月九日

一右の御陣より一里半道御越被成候て、川はたへ西向ニ御陣取候、右馬頭殿衆より次第ニ川御渡候、船數五艘ニて候、一小西殿・熊谷殿御渡候ニ付、如何被渡候哉と候て、壱岐孫四郎見せニ御遣候、渡舟往返苦労の由被申候、一武庫様へ御出被成候、御振舞候、
一鴈一ッ池上市右衞門進上候、一風ハはへ、晴天、其日御逗留候、

九月十日

一夜中より雨にて候へ共、晴申候、風ハはへ、
一如竜安馬中人衆御まかし候、一御鷹野へ御のほせ候、
鳥一ッとまり申候、一武庫様へ御出被成候、

九月十一日

一小攝州より御注進ニ付、備前中納言殿人引陳候、御談合ニ、大河を御渡候て、右之御陣半道程御越候て、御陣取候、御打立午の刻、御陣ハ西向、
一中納言殿へ御出候而、酉の刻御歸鞍候、從龍安方ゝ江諸勢被分候、一鴈一ッ指二鮨(ママ)四郎次郎進上候、
一風ハはへ、雨ニ酉の刻より罷成候、一赤國の道筋さるミ召寄候て、通しにて御尋候、
さるミ鼻之儀ニ付、御奉行衆へ伊集院源介御使ニ被參候、數六十一人夜渡之儀ニ付、本田右衞門佐船奉行ニ御使ニ被參候、一小攝州より渡船四艘參候、被請返候、
一熊谷殿・小西殿へ御使者川上左近將監被參候、御狀參候、
一右馬頭殿へ御出候、御振舞候、

九月十二日

一雨も曉より晴申候、風ハ北、一熊谷殿ゟ御陣替之儀ニ付、御使者進上候、小攝よりも瀧七右衞門殿被參候、
一御鷹一ッ取れ申候、一熊谷殿へ魯馬一疋進上候、彼御礼ニ使者被參候、一敷忠兵通しのてる夫壱人進上被申候、一御陣替ニ相定候へ共、相延候て御逗留候、

九月十三日

一右之御陣所より三里ほと御越候へハ、備前衆の陣ニて候、於彼所小攝州へ御行合被成候て、陣替之儀共御物語候、御打立辰の刻、右之所より又四里ほと御越候て、酉の刻ニ、南向ニ御陳取候、前ニ小川あり、さるミ在郷也、

一城わりニ付、惣軍衆ハ曲既之御主取ニて、かんねつ・益山のことく御通候、益山へ陣取候由、使者にて御申候、一かせは北、

九月十四日

一川はたの御陳より五里ほと御越候て、こんくうと申城の前ニ、南向ニ御陣取候御陣所也、御打立巳之刻、右之御陣より一里半道ほと御越候処、塩入之川御座候て、人數ハ皆御まハし候、一風ハにし、晴、

九月十五日

一金溝より御陣替ニて候、御打立辰之刻、三里御越候へハ、泰仁と申所へ、それより三里御越候て、井邑と申所へ、古在郷へ西向ニ御陳取候、一風はにし、朝大霜、

一於中途熊谷殿へ御行逢被成候、一御打立前ニ、熊谷殿へ御使ニ五代勝右衛門被參候、

九月十六日

一井邑へ御停留候、一朝大霜ニて候、かせハ北、

一蜂須賀阿波守殿ニて、諸大名御談合ニ付、　殿様御出被成候、御打立午の刻、御歸鞍酉の刻にて候、

一上衆とし濫妨ニ付而、二与右衛門・敷忠兵衛殿・本右衛門佐なと續被申候、一鶴一ッ本田右衛門進上候、

一武庫様御申候て御食御寄合候、比志嶋紀伊守御座へ被參候、御寄合果候間、下湯候て候、

一右馬頭殿へ鋪忠兵衛殿御使ニ被參候、一備前中納言殿へ御出候砌、伊弥九郎・肥少兵衛殿兩使ニ進上被成候、

一小攝州へ伊勢弥二郎御使ニ被參候、

九月十七日

一武庫様如川東御越候、　若殿様別方角へ可有御通由候て、跡よりの諸軍衆御觸候、

一井邑へ御滞留候、一敷忠兵衛殿歸參候而、海邊へ山城在之由御申候ニ付、熊谷殿へ伊弥九、武庫様へ野帯長刀(ヤマ)御使ニ被參候、一城わりの人衆悉會陳候、就其　武庫様へ御道具衆御使ニ被差遣候、御書參候、一御鷹野へ御出被成候、一風ハにし、

九月十八日

一井邑より三里御越候而、御陣取候、但南向、御打立巳の刻、御陣取未の刻、一從井邑武庫様爲御供、右馬頭殿・又六殿・抱節主取ニて候、如川東御通候軍衆も各被參候、一御前へ城見せニ酉之刻ゟ久保与九郎・簗瀬弥介御遣候、一風ハ北ニて候、

九月十九日

一晴、風ハ北、一御鷹野へ午の刻ゟ御のほせ候、

一御滞留候、

九月廿日

一右の御陣(長城)を卯の刻ニ御打立ニて、御陣替候、御陣を弐里御越候へハ、長城と申候古城御座候、其より四里ほと御越候、南向ニ御陣取候、右の長城ニて候、又七殿へ御行合被成候て、引陣之儀共御談合候、一又七殿ゟ三原九兵衛殿御使ニハ、中途人被參候、

一御鷹野へ御のほせ候、御打立酉の刻、一又五郎殿・又六殿・比志嶋紀伊守・本田助右衛門御食御寄合候、

一風ハにし、朝大霜、

九月廿一日

一晴、風ハにし、一右之御陣を卯の刻ニ御打立候て、三里御越被成、西向の在郷へ御陣取候、前ニ大川あり、

九月廿二日

一御滞留候右御陣所へ、一晴、かせは北、

一種子島左太・伊源二此衆へ御寄合候、

一橋見せニ小島小介被遣候、

九月廿三日

一晴、風ハにし、一右(羅州)之御陣所を辰の刻ニ御打立候て、三里ほと御越候へハ、唐人之羅州古城へ、夫ゟ三里程御越ニて候、西向の在郷へ御陣取候、御着酉の刻、

一右の城より半道ほとニ大河有、橋あり、

九月廿四日

一晴、風ハ北、一右の在郷を辰の刻ニ御打立被成候而、三里ほと御越候へハ、唐仁の古城あり、靈岩其ゟ二里御越候て、南向の松山の中へ、在郷へ御陣取候、御着酉の刻、右之城より前ニ、塩入ニ橋有、

一諸組へほゝ仕度候由、被仰出候、

九月廿五日

一晴、風ハ北、一右(海南)の御陣所を御打立被成、一里御越候へハ大坂有、御越候て、三里ほとニ御越候へハ、海南の城へ御着候、御打立辰の刻、御着酉刻、

一山々よりさるミ餘多、御札之ことく罷出候、但人數九

十人、次第ニさるミ可罷出由申候、
一山へ上官在之由、右のさるミ共申候間、尋ニ山へ罷登へき由御意候、一海南の城ハ南向、左右へ大在郷あり、田廣所ニて候、

九月廿六日

一晴、風ハにし、一鍋嶋信濃守殿ゟ石孫太郎殿御使者ニ御遣候、御狀參候、勿論御返礼あり、御振舞候、賞飯ハ五少左、
一武庫様、小攝州へ敷祢忠兵衛殿御使ニ被遣候、同御狀參候、一鍋嶋信州へ平田新右衛門御使ニ被參候、
一山ゟさるミ數百人候て、
一御鷹野へ未の刻より御のほせ候、雉二ッとれ申候、御歸鞍戌の刻ニて候、一海南へ御滞留候、

九月廿七日

一晴、風ハ北、一鍋嶋信濃守殿ゟ納富弥兵衛殿御使ニ被參候、御狀も參候、御振舞あり、
一御鷹野へ御出被成候、御打立未の刻、御歸鞍酉之刻、
一海南へ御滞留候、一山よりさるミ數百人候て、
一於大日寺御日待あり、

九月廿八日

一晴、風ハにし、一諸侍出仕候、御見參候、
一海南へ御滞留候、一山よりさるミ數百人下り申候、
一さるミ鷹犬一疋進上申候、一諸在郷打廻ニ、肥少兵衛殿・本弥兵衛殿・菱伴右衛門主取ニて被參候、
一練馬(ママ)一ッ本右衛進上候、有次右も進上候、何も返馬あり、

九月廿九日

一晴、かせは北、海南へ御逗留候、一御鷹野へ御のほせ候、雉一ッ・梟一ッとれ申候、
一諸在郷ニてハ、平田新右衛門被參候、一熊谷内藏殿所へ爲御使者、伊勢弥九郎被參候、御書も參候、
一敷忠兵中途より歸參候、

九月卅日

一晴、風ハにし、一鍋島信濃守殿ゟ引陣之儀ニ付、使者進上候、御狀參候、御振舞有、被成村田藤五郎、
一右の御使ニ御急用之儀ニて、五代少左衛門中途迄御使ニ被參候、一白鷺一ッ日置六右衛門進上候、
一山よりさるミ數百人候て、一上官狩之儀ニ付、諸組ゟ人數山へ被參候、一武庫様へ爲御使者、敷祢忠兵被差越候、御書參候、

一晩ニ付、鳥ねらひニ御出候、一海南へ御滞留候、

拾月一日

一晴、風ハはへ、一北郷作左衞門殿へ、御遊山へ殿様御出被成候、一小西作右衞門殿・同名主殿助殿・松浦鉄次郎殿ゟ、大島村へ使者被差通候ニ付、使者三人被參候、小攝州より書狀相添候、御振舞候、

一鷸一ッ川上拾郎進上候、一鵠一ッ伊地知民部少輔進上候、一海南へ御滞留候、

拾月二日

一晴、風ハ北、一海南へ御滞留候、一山へ上官狩ニ被參候人衆、皆被罷歸候、同上官壱人討取、壱人ハ生取、軈て　御前へ被召出候、於　御前侍書仕候、其外討捕の鼻數餘多參候、

一生鷸二ッ吉利李右衞門進上候、

十月三日

一晴、風ハ北、一海南へ御滞留候、一うつら野へ御のほせ候、御打立午の刻、歸館酉の刻、

一鍋島殿ゟ御引陣之儀ニ付、使書進上候、

一比志嶋紀伊守へ御申被成候而、御振舞にて候、

一御兵具衆山より上官壱人生取にて被參候を、被懸御目候、鼻も數多候、一御奉行衆へ御越候使者伊勢弥九郎歸參候、

十月四日

一曉小雨ニて候へ共、晴申候、風ハ北、一小西殿より使者進上候、一鍋嶋殿ゟ少屋勘八殿使者ニ進上候、御狀參候、御振舞候、一北郷殿練馬一ッ進上候、返馬同毛之馬御遣候、くらつく一疋御遣候、使ハ本田治兵衞殿、一鷸一ッ白惣兵衞殿進上候、

一夜入候て、若衆中召寄せ候て、御咄ニて候、

一海南へ御逗留候、

十月五日

一晴、風ハにし、一弥壱郎殿・伊集院源二郎殿御食御寄合候、一御馬乘候、馬場へ御出被成候、

一海南へ御逗留被成候、

十月六日

一北郷作左衞門殿・吉利李右衞門殿・伊集院源二郎殿・入來院又六殿・喜入攝津守殿・種子島左近大輔殿・比志島紀伊守殿、此衆へ御寄合ニて候、

一晴、風ハはへ、未の刻より雨ニて候、一海南へ御逗留被成候、

一鍋島殿へ齋藤源介御使ニ被遣候、御書參候、
一御鷹野へ御のほせ候、御打立午の刻、御歸鞍酉の刻、
一御船御出船ニ付、羽島喜兵衞殿如湊之被參候、

十月七日

一晴、風ハにし、一海南へ御逗留候、一鍋島殿より御使書御進上候、一御鷹野へ巳の刻ゟ御のほせ候、御歸鞍酉の刻ニて候、

十月八日

一晴、風ハにし、一海南へ御滞留被成候、
一鍋島殿より引陣之儀ニ付、甲斐総右衞門殿御使ニ被參候、御狀參候、一又五郎殿・北郷作左衞門殿へ御食御寄合候、
一島へ罷居候上官も一行、海南へ見切ニさるゝ差越下候、とらへ候て、御前へ被懸御目候、

十月九日

一曉雨ニて候へ共、明候て晴申候、風ハきた、海南へ御逗留候、
一山へ上官狩ニ、　殿様巳の刻御打立候、上官さるゝ數十人討申候、御歸館酉の刻候、一さるゝ共山ゟ上官搦取候て、餘多召れ參候、
一伊集院源二郎殿・北郷作左衞門殿御寄合候、

十月十日

一晴、風ハ北、一海南より六里ほと御越候て、鍋島殿の陣虚津と申所迄、御陣替候、御打立午の刻、御着陣戌の刻、勿論海南の城まハり上官の家餘多放欠（火カ）ニて候、

十月十一日

一虚津御陣替へきニ相定候へ共、曉より雨ニ罷成候間、虚津へ御滞留ニて候、一鍋嶋殿へ御陣替の儀ニ付、伊地知民部少輔御使ニ被參候、同御書參候、一鍋島殿より飛脚參候、

十月十二日

一曉より雨も晴申候、風ハ北、一右の御陣所ゟ六里御越候て、最前海南へ御通候時、御陣取候、西向の在郷へ又御留候、御打立午の刻、御着酉の刻、一鍋島殿ゟ兩度、中途迄御使者進上候、一上官狩へ山ニ御のほせ候、一陣取之儀ニ付、龍造寺与兵殿迄使者御遣候、然処靈岩へ陳取候由、御返事候、一今日ゟ鍋嶋殿と御同道ニて候、如南原御打立候由候て、連長被遣候、

十月十三日

一晴（羅州）、風ハ北、一右之御陣所を御打立候へハ、羅州の城

迄三里程ニて候、羅州より一里半道御越候て、東向の在郷へ御陣取候、御打立巳之刻、御着陣酉の刻、鍋嶋殿も御同道ニて候、　殿様ハ軍衆より御通候、

十月十四日

一可爲御陣替ニ相定候へ共、夜半時分より大雨ニ罷成候間、御逗留候、風ハ北こち、晩ニ雨も晴申候、又かせも西ニ成申候、

十月十五日

一晴（昌平）、風ハにし、一右之御陣所より五里ほと御越候て、唐人城（昌平）の近邊ニ、野陣ニて候、御打立巳の刻、御着陳酉の刻、

一鍋島殿へ肥少兵御使者ニ被參候、一御鷹野へ御のほせ候、

十月十六日

一晴、風ハ北、一右の御陣所より四里程御越被成候て、南向の在郷へ御陣取候、前ニ川あり、名ハ潭シ「ケツ字」

一鍋島殿へ本助左衞門御使者ニ被參候、

十月十七日

一晴（潭陽）、風ハ北、一諸軍衆兵粮取ニ付、御逗留被成候、

一御鷹野へ御のほせ候処、はい鷹一ッ取れ申候、

一搦物之儀ニ付、鍋嶋殿ゟ御使進上候、一潭陽へ御逗留候、

十月十八日

一晴、風ハ北、一御鷹野へ御のほせ候、御打立午の刻、御歸館酉の刻、一鍋嶋殿へ御使者御遣候、同御書參候、

一鍋嶋殿ゟ引陣之儀ニ付、御使進上候、一潭陽（淳昌）へ御逗留被成候、

十月十九日

一潭陽と淳昌路三里ニて候、一晴、風ハ北ニて候、

一淳昌（淳昌）へ潭陽より御陣替ニて候、御打立巳の刻、御着酉の刻、一山城有之由候て、有次右衞門・鮫筑右衞門見せニ御遣候、

十月廿日

一夜中より明中迄雪にて候、「キレテ分ラス」山〳〵雪積申候、風ハ北、巳の刻より晴申候、一鍋島殿へ相玄蕃ニて御使者被參候、一山城へ上官人在之由ニ付、寺山四郎左衞門・本田助右衞門・有馬次右衞門見せニ御遣候、

一菱刈半右衞門馬被召寄候て、御覧候、一淳昌へ御逗留候、一鍋嶋殿より陣替之儀ニ付、兩使御遣被成候、一鳥ねらいニ付、御出被成候、

十月廿一日

一晴、風ハ北、一鍋島殿へ陣替之儀ニ付、蓮長御遣候、

一白鳥一ッ伊集院源次郎殿御遣候、一鍋嶋殿より御陣替候て、可致御供由ニて使者進上候、同御狀參候、

一淳昌へ御滞留候、一ひやうらうこしらへニ、北之方の在郷へ人數餘多罷出候処ニ、江南仁卅騎はかりにてかけ申候、此方之衆十人はかり打取申候、夫付、殿様を始候て、陣中馬乘皆〳〵被打出候、然処ニさるミ・あへせい・てるま數十人打申候、肥前衆もあら〳〵馬乘衆も被續候、但五十騎はかり也、

十月廿二日

一淳昌より四里程御越候て、南向の在郷へ御陣取候、御打立午の刻、御着酉の刻、一南原ゟ江南仁之馬乘、此方の御陣の近邊迄參候ニ付、此方ゟ馬乘衆餘多被續候、何事も無之候、

十月廿三日

一晴(南原)、風ハ北、一朝鷹狩ニ御出候、大小共ニかも二ッ取申候、

一右の在郷非御陣替候、南原の坂の下迄二里程御越候、御打立午の刻、御着未の刻、一全州より江南衆、南原へ少〳〵罷出候ニ付、御續候、本田治兵大明人一人被打候、

一白鳥を伊源・北作左へ御寄合候、

十月廿四日

一朝雪ニて候、かせは北、終日大雪ふり申候、一南原の坂の下より求礼迄、三里御陣替候、御打立巳の刻、御着酉の刻、夜ニ入雪もつもり申候、

十月廿五日

一晴(求礼)、風ハにし、雪も晴申候、一求礼より川東の本陣迄御陣替候、御打立巳之刻、御着戌の刻、諸勢遠道故、行かけニ野陣候、一殿様御打立卯の刻、

十月廿六日

一晴、風ハにし、大霜、一夫丸遲參候ニ付、川口ゟ御打立、午の刻はかりニて候、三里程御越候て、ひかし向御陳取候、後ニ大川あり、御着酉の刻、一從武庫様爲御使、樺山太郎三郎川東の川口へ御參候、御迎ニ相良吉兵・関帖右衞門も被參候、

十月廿七日

一晴、風ハ北、一右之御陣より七里御越候て、混陽(混陽)へ陣□刻、御着酉の刻、一泗川より御迎ニ暦〻御參

候、其數を不知候、

十月廿八日

一晴、風ハ北、一混陽を巳の刻御打立被成候て、泗川へ酉の刻ニ御着候、中途迄暦〻衆餘多御迎ニ被參候、

一武庫様も唐人城之外迄御出候、直ニ御本陣の様ニ　若殿さま御參候、勿論諸侍衆の事も御供にて、鎧着ながら百二三十人程、　武庫様御陣屋へ被參、庭上ニ祗候候、又かり立の御人衆不殘被參候、又大將衆右馬頭殿・伊源二郎殿・種子左太殿・加治木三郎五郎殿・北郷作左衞門殿・圖書頭殿・又五郎殿・喜入攝津守殿・入來院殿・伊抱節・比伊州、此人衆も被成參上候、以の外上上之慶、無此上候、無事ニ上下赤國奥入之儀者調、悦之儀ハ千秋万歳候、往還の日數九十余日也、

慶長二年之事也〳〵、

十月廿九日

一晴天、風ハ北、一泗川古城へ被成御座候、一同新城御普請也、諸大將垣見和泉守殿・長宗我部土佐守殿・毛利豊前守殿・伊東民部太輔殿・中河伊與守殿・高橋九郎殿・秋月三郎殿・又七殿、右の御人衆昨日無事ニ赤國より御歸陣、御祝として追〻ニ御出候、

347

覚　　泗川古城

慶二　十二月一日

一晴、風ハ北、一圖書殿御出仕候、其外諸大將衆御參候、諸侍衆出仕候、一御城見廻ニ御越候、御打立午の刻、垣見和泉守殿御安内者にて、城之内へ屋敷割之御談合候、左様ニ候て、御歸鞍酉の刻、御打立以前ニ御厩へ御出候、御馬御覧候、一夜入候て、御風呂へ御出候、一鴨一ッ帖佐衆貴島進上候、一大慈寺御參候て御咄候、

但御学文、

十二月二日

一晴、風ハ北、侍衆出仕候、一御鷹野へ御のほせ候、一毛利豊前守殿へ火事在之ニ付、爲御使伊勢三四郎・五代少右衞門被差越候、一京都へ竹之内兵部少輔御使ニ可被上ニ相定候、

十二月三日より五日迄ハ、圖書頭殿御使ニ拙在郷へ

一種子嶋左近太輔殿ゟ鴈一ッ進上、一右馬頭殿よりのろ一丸進上候、

一又七殿よりうつら七ッ進上候、御使三原小藤太殿、御捻も參候、一陣中諸侍衆出仕候、

參候間、付不申候、

十二月六日

一晴、風ハにし、諸侍衆出仕候、一伊東民部太輔殿ゟ御礼ニ、川崎又二郎殿被參候由、伊東源四郎被申候条付申候、

一御鷹野へ御のほせ候、うつら六ツ留申候、一秋月三郎殿爲御見廻御出被成候、一大竹五本毛利豊前守殿へ被遣候、御使伊勢弥二郎、一御城の普請奉行伊勢弥九郎・本田助左衞門へ被仰付候、

十二月七日

一晴、風ハ北、諸士出仕候、一御祈念ニ僧塩中御參候、

一小西攝津守殿より爲御使、瀧七右衞門殿御越候、御狀參候、

一森豊前守殿ゟ竹の御礼ニ御使被參候、御狀參候、使ハ松田善太郎殿、一圖書頭殿弥一郎殿へ御寄合候、

一御鷹野へ御のほせ候、一晩ニ殿様北郷作左衞門どのへ御申被成候而、御振舞候、一夜入候て、城へ火事出來候、

十二月八日

一晴、風ハにし、士衆出仕候、一江南衆へ乗馬七疋召寄候て、御覧被成候、一武庫様へ御出被成候、

一茶わん路筋之儀ニ付、肥後少兵衞殿へ御尋被成候、無存知由被申上候、一御馬乗ニ馬場へ御出候、武庫様御覧被成候、

一小善又右衞門殿御見廻ニ御出候、御酒御寄合候、一夜入候て、比志島紀伊守・山田弥九郎・五代少右衞門殿御酒御寄合候、

一半弓一張桑波田勘介進上候、

十二月九日

一晴、風ハにし、一御鷹野へ御出被成候、其外何たる儀無之、

十二月十日

一竹内兵京へ被打立候、歳暮之爲御礼、竜伯様御書一ツ參候、平田太郎家へも御書一ツ被遣候、

一晴、風ハ北、一相良玄蕃歸朝候、一武庫様へ御陳屋へ御出候、一從普州本田与右衞門其外暦ゝ、餘多御參候、

一從垣見和泉守殿より山田六右衞門殿今一人相添候て、兩使進上候、同江南衆の道具使へ御ミせ候、一白麻三束河田助七郎進上候、一御鷹野へ御出被成候、但未の刻、一又六殿・比志嶋紀伊守へ御食御寄合候、

十二月十一日

一晴、風ハにし、諸士出仕候、一中川修理亮殿御使者甲斐五兵衛尉殿被参候、但此中無音之由候ての儀ニて候、

一垣見和泉守殿御使ニ山田六右衛門被参候、御捻参候、

一御鷹野へ御のほせ候、鶉五ッ留申候、一垣見殿へ本田新介御使者被参候、

十二月十二日

一晴、風ハにし、士衆出仕候、一垣見殿　武庫様・圖書頭、此衆へ御食御寄合候、垣見殿御内衆へ不殘御振舞候、

一御馬乗ニ御出被成候、一北郷作左衛門殿へ御寄合ニて候、

十二月十三日

一晴、風ハにし、諸侍衆出仕候、一垣見和泉守殿より安弥九郎殿御使被遣候、御捻参候、一又七殿へ御見廻ニ御越候、それより前ニ先御城へ御出候、

十二月十四日

一晴、風ハ北、一垣見和泉守殿へ御礼ニ御越候処、中途より御歸鞍候、一武庫様へ御出被成候、一又七殿より御礼ニ使者進上候、取次新納小兵衛尉、使ハ三原小藤太殿、

一夜入候て、若衆中召寄、更迄唄なと候て、御遊山候、

十二月十五日

一晴、風ハ北、士衆出仕候、一武庫様又五郎殿・伊源二殿へ御寄合ニて候、一垣見和泉守殿ゟ安弥九郎殿御使ニ被参候、一垣見殿へ爲御見舞御出被成候、御打立未の刻、御歸鞍戌之刻、一於順天小西殿陣焼之由にて、神戸左平次御使ニ被参候、但福原殿御陣ニて候、小夜之内二ッ、しとね壱ッ、鞍一通御遣候、同御狀相添候、攝州へも参候、

一御祈念ニ、光明院大日寺心澄御参候、

十二月十六日

一晴、風ハ北、一御鷹野へ御のほせ候、一夜入候て、北郷作左衛門殿・又六殿・伊源二郎殿御参候而、更候迄御遊ニて候、大折一ッ・御樽六ッ進上候、

十二月十七日

一朝晴、未の刻より雪ニて候、風は北、圖書頭殿諸侍出仕候、

一垣見和泉守殿・長宗我部鉄二郎殿、　武庫様御陣所へ御寄合ニ付、終日御出被成候、兩人歸鞍之刻、御鉄放

遊候て、御客へ見せ参らせられ候、但八匁・十匁・十五匁・二十目也、
一金吾様へ歳暮ニ、阿多神右衛門御使者ニ被参候、白鳥一ッ御進上候、同御状参候、一加藤主計頭殿・鍋島加賀守殿・同信濃守殿へ、右の使ニて歳暮の御礼被仰上候、同銘々ニ御書参候、一小西摂津守殿へ歳之御礼ニ、伊勢弥九郎可被参ニ相定ニ、樽四ッ、鯛六ッニ御書相添候て参候、福原殿・熊谷殿へハ銀子弐枚宛、合四ッ、銘々ニ御状参候、瀧七右衛門殿へも御状参候、但小袖一ッ被遣候、然共明十八日ニ可被参ニ相延候、一御祈念ニ光明院御参候、
一戸川肥後殿・大田飛驒殿・東道佐土殿・加藤左馬殿へ、歳暮之御礼ニ御状参候、使ハいせ弥二郎、

十二月十八日

一晴、風ハ北、諸侍出仕候、一垣見和泉守殿へ五代少左衛門御使ニ被参候、御状参候、一長宗我部土佐守殿・同右衛門太郎殿より御使者、浦戸平右衛門殿御進上候、御状参候、
一垣見殿ゟも御使ニて候、同御状参候、使中西仲九郎殿、
一中川修理亮殿ゟ弓弦ニ御状相添候て、使者進上候、山口平太、一又七殿へ野村市右衛門御使ニ被参候、御状参候、
一武庫様へ御出被成候、
一御祈念ニ、光明院御参候、

十二月十九日

一晴、風ハ北、士衆出仕候、一又七殿御同道にて、御鷹野へ御のほせ候、武庫様も御出被成候、御歸鞍之刻、於中途御振舞候、御座ニハ又七殿・北郷作左衛門殿・伊集院源二郎殿御参候、武庫様御供衆・同又七殿御供衆へ、不殘御振舞候、御打立巳の刻、御歸鞍戌の刻、
一祈念ニ光明院御参候、

十二月廿日

一晴、風ハ北、諸士出仕候、一垣見和泉守殿へ鉄炮之だい木進上候、使ハ蓮長坊、御状参候、一池田伊与守殿へ御使ニ連長御遣候、御状参候、御音信計ニて候、
一若殿様、長宗我部土佐守殿ゟ御申て、終日御振舞候、御打立午の刻、御歸鞍酉の刻、一武庫様へ御出被成候、

十二月廿一日

一晴、風ハ北、一新城へ御移物ニて候、御打立巳の刻、御歸鞍の刻、於中途御鷹野ニて候、鶉十五留申候、御

歸鞍酉の刻、一城へ御打立之砌、圖書頭殿へ兩度、敷忠兵衞尉にて被仰渡儀候、一垣見殿へ御使ニ、敷祢忠兵中途へ御遣候、古城へ御出候時、

十二月廿二日

一晴、風ハ北、圖書頭殿諸侍出仕候、一又七殿ゟ殿様御申候て、終日の御慰ニて候、御歸鞍戌の刻、一伊民太殿より使書御進上候、一熊谷内藏允殿より使者進上候、就其夜入候て、白濱次郎右衞門・大田善兵衞殿、右之使の宿迄御使ニ被參候、御狀返札有、

十二月廿三日

一晴、風ハ北、一伊東民部太輔殿・高橋三郎殿・毛利豊前守殿・秋月九郎殿・又七殿へ、新納小兵衞殿御使ニ被參候、御狀被參候、

一池田伊与守殿、又七殿へ爲御使鎌田守右衞門被參候、御狀參候、

一伊東民太殿ゟ河崎又二郎殿御使ニ被參候、御狀參候、返札有、　武庫様御本陣ニて候、一御風呂へ御出候て、御歸鞍の刻、御責被成候、一晋州よりさるミ多人數參候て踊候を、　武庫様於御本陣御覧被成候、木綿卅端給候、

十二月廿四日

一朝晴、午の刻ゟ雪ニて候、風は北、一長宗我部土佐守殿へ新納小兵衞殿御使ニ被參候、一秋月三郎殿・高橋九郎殿御食御寄合候、御供衆迄御振舞候、一垣見和泉守殿ゟ安弥九郎殿御使ニ被差出候、一爲歳暮御礼、小西攝津守殿より小袖一ッ、御狀相添候て、瀧七右衞門殿御遣被成候、

一夜入候て、喜攝津守御參候て、御咄ニて候、御唄有之、

十二月廿五日

一晴、午の刻より雪ニて候、然処申の刻ゟ雨ニ罷成候、風ハ北こち、

一垣見殿へ可有御出ニ相定候処、餘大雨ニて候間、晩ニ可有御出候由、御使者ニて候、被仰遣候使肥少兵、

一御鷹遣ニ御出候、からす一ッ留申候、御打立午の刻、御歸鞍酉の刻、終日大雪ニて候、一秋月三郎殿より前被成御出候爲御礼、三原兵七殿御使者ニ被參候、御狀參候、有返札、一武庫様ゟ金屏風一双被成御參せ候、御使野添善兵衞殿、一高橋九郎殿より爲御音信、川崎儀右衞門殿使者ニ被參候、書狀も參候、有返札、

一帖佐衆中より御樽六ッ・大折一ッ進上被仕候、依其圖

書頭殿・鎌田藏人・伊勢弥九郎・肥後少兵衞殿被召寄、終夜御遊山ニて候、一垣見和泉守殿御陣へ御茶湯ニ被成御出、御歸宅之砌御通候、於中途生牛殺申候もの弐人の内、一人ハ御手討被成候、一人ハ大山三次被切候、右ハ岩切雅樂助者萩原寺之者ニて候、

十二月廿六日

一曉より雨ニ成申候、風ハ北こち、又午の刻計より大雪ニて候、

一武庫様御陣へ御振舞ニ御出候、晩日ニ罷成候て之事ニ候、

一長宗我部右衞門太郎殿ゟ爲音問、町孫左衞門殿書狀持參候、即有御返札、使へ御振舞候、一泗川之城御普請被成候、諸大名毛利壱岐守殿・又七殿・相良宮内太輔殿・伊東民部太輔殿・秋月三郎殿・高橋九郎殿・長宗我部右衞門太郎殿・垣見和泉守殿・中川修理亮殿、此外池田伊与守殿大名衆不相殘、於新城廿八日ニ可有御振舞候由、鎌田藏人殿を以被仰渡候、皆々可有御出候通ニ候、

一菱刈半右衞門乘馬、白濱七助を以被仰聞、被召寄御覧候、

一從固川被參候使者候、垣見和泉守殿へ被參候、爲安内者弟子丸治介被差遣候、罷歸候刻道被迷候、

十二月廿七日

一曉雪も晴申候、風ハ北、一泗川新城へ、殿様奉始　武庫様・圖書頭、其外大名衆諸侍衆被成御移候、然者御城武庫様・圖書頭へ御祝言候、御寄合ニて候、

一於蔚山加藤主計頭殿居城へ、從漢南表大明人數百万騎押寄、加藤主計頭殿折角成躰ニ候よし、注進候、就其泗川表へ御座候陣衆、諸大名へ本田新介御使者ニ被遣候、一蔚山表の儀ニ付、固川へ野村市右衞門殿御使ニ被遣候、又七殿・毛利豊前守殿・伊東民部太輔殿・秋月三郎殿・高橋九郎殿へ御書參候、

一御年越之男、新納小兵衞殿・伊東喜左衞門殿へ被仰付候、

十二月廿八日

一晴、北風、一中川修理亮殿・垣見和泉守殿・相良宮内太輔殿ゟ蔚山之御積有候通、銘々ニ御使者被指越候、勿論御狀參候、返札有候、一垣見和泉守殿へ爲御音問、御使者ニ伊地知与兵衞殿被參候、御狀被遣候、一泗川於古城、　武庫様伊地知彦一郎御使ニ被參候、一御祈

念光明院大日寺被成参上、御講讀ニ有之、一武庫様ゟ
爲御使白濱助七被参候、一泗川於古城武庫様へ御使者
ニ相良神吉被遣候、一武庫様ゟ伊勢弥八御使ニ参上候、
但蔚山表之儀ニ付候ての事之由候、一蔚山へ爲御使者、
本田助左衞門被参候刻之御意趣ハ、蔚山へ漢南人數百
取出、加藤殿の居城詰陣ニ罷成候由到來候間、　殿様
軍衆被召連、可被成御積通、泗川表の御奉行横目衆迄
被成御尋候処、此境目ニも大明人罷出儀もや可有御座
候、當境御精ニ入候ハて不叶儀ニ候間、蔚山へ御續ハ
御無用之由、御奉行衆より被仰候条、依夫御積無之候、
此等の儀ニ付、御書被進候衆、

浅野左京大夫殿　　加藤主計頭殿
毛利壱岐守殿　　大田飛驒守殿

此人へハ金吾様の披狀上候、
備前之
山口玄番助殿　　中納言殿是も披露狀ニて被仰遣候、

右御使本田助左衞門事、垣見和泉守殿の御船へ被召乗
候而、蔚山へ被参候、

十二月廿九日

一晴、北風、一殿様御鷹野へ御出被成候、一垣見殿留守
居安弥九郎殿へ、歳暮の御礼として小袖二ツ、内一ツ
ハ染物、うら浅黄、一ツハ段之物、うらくちば、御書
も被遣候、御使本田新介、一晋州表へ境目傳ニ、泗川
の様子朝鮮人數多奥より見きりニ罷通候由、固川より
注進就有之、普州へ爲御使大山稲介被遣候、境目無事
の由被申來候、一歳暮爲御礼、御老中・諸大名衆被成
祝ひ候、今年も静謐ニ暮、世上豊饒ニ候、誠大慶千喜
万悦候、一段年之衆へ静ニ御座候、

348

「新納忠元勲功記」

一慶長二酉二月廿一日、　松齢様帖佐御首途、弥太右衞
門忠増被召列、同三月十一日、御夫人實窓様茂爲御質
人帖佐　御發駕ニて御上洛、同十九日、　松齢様久見
崎御乗船ニて、御船待ハ於限之城被遊、忠元茂右所迄
奉送之、此時大嶋出羽守忠泰も御供ニ付、忠元爲詠遣
由、

今こぬと別ゆくとも七そちのよハひの名殘おもひや
らなん　　爲舟

かりそめの別れなからも年月のへたてぬと思ふ名殘　　忠泰

かなしも

同廿三日、　松齢様久見崎ニ被爲下、同廿八日、御出船五拾餘艘、四月十九日、朝鮮加徳嶋ニ御着陣、此年夏、忠元清敷より飯野江地頭替被仰付、爲罷移由御座候、

349

（表紙）

義久公
義弘公　慶長三年自正月至六月
家久公

後編　舊記雜錄　巻四十一

「殉國名藪抄」

慶長三年戊戌

四月三日、町田助四郎久次 泗川にて死す、年十八、久興弟也、

六月朔日、谷山平右衛門久兼 北郷家臣、朝鮮戰死とあり、

九月廿八日、相良玄蕃助頼豊 明兵來て舊館を攻を拒き、勝奮戰して死之、下皆同し、

目兵右衛門・池田源六貞清・桑畑與五郎景次・大迫十右衛門 古館にて戰死とあり、四本仲助 同上、玉利善兵衛 島津忠長の臣にて同しく明兵と戰ひ死之、下皆同し、或十一月退陣の時ともあり、木佐貫八郎右衛門・上井主兵衛 或作十主或作四、鳥井休兵衛 休或作弓、村山藤内・永野十兵衛 或作十右衛門、日高九之助 之或作郎、小村彌四郎 或作小林、有馬源助・藥丸六右衛門 或作左兵衛、六酒勾勘右衛門 右或作左勘或作甚、兒玉左衛門四郎・足輕市右衛門・喜八・走太・權右衛門・三七 以上皆忠長の足輕也、上田六藏 島津以久の臣にて、同しく明兵と戰死之、下同し、竹下弥六左衛門・柳田源助・藤井八左衛門・小川条右衛門 此等此日の戰死、凡百五十余人といふ、

十月朔日、市來清十郎家綱 或作宗秀、清十郎祖なり、明軍朝鮮を救ひ泗川の新塞を圍むに依り、松齡公琴月公邀擊て、八萬餘級を殲されし時戰て死之、年二十四歳、瀨戸口弥七重治 或作弥七郎、帖佐衆八郎右衛門祖なり、

八日、頴娃弥三郎久音 病死、年十六、戰亡板ニあり、

十一月七日、鎌田藏人政富 朝鮮より歸舟海上に覆りて死す、年三十二、戰亡板ニあり、敷根藤左衛門頼元 亦同しく舟覆て死す、年三十三、戰亡板ニ載らる、故に此ニ載置也、

八日、竹下喜平 北郷氏臣、戰地詳かならす、

十八日、町田源左衛門久政 小西等五侯の明軍より順天の海口を遮らるを救玉ふに從ひ、力戰して死之、下皆同し、伊集院治部左衛門忠紘 九郎右衛門祖なり、桂兵吉忠次 山城守忠詮嫡子、年廿一、桂岩二郎祖、伊地知與兵衛重頼 后亡、伊地知新三郎重次 八四郎祖也、柏原將監公近 矢太右衛門祖なり、阿多源六忠次 或作忠高、子孫出水士、祁答院平次郎 鶴田士、弥九郎祖、伊地知民部少輔重堅 三年十九、小十郎祖、伊地知平次郎・二階堂與右衛門重行 與右衛門祖、蓑輪治部右衛門重長 年三十六、初伊地知氏ヲ称ス、逆瀨川彦十郎安屋 疑是彦松玄高祖、大脇七郎爲乗 疑是彌五右衛門、島津内匠家來大脇貞齋祖トアリ、久富木佐吉 后亡、奥民部左衛門忠光 次郎兵衛祖、大河平源太左衛門隆重 年三十五、井

尻八郎后亡、井尻休兵衛出水士伊東傳五左衛門祖、年二十一、竹内宮内左衛門實經或作實吉、孫蒲生士、子山口源六篤宗或源五左衛門、子孫亡、加世田新兵衛家長新或作藤、吉右衛門祖、財部甚兵衛盛清年二十六、赤塚利七重種源助子なり、盛明嫡子、甚兵衛祖、猿渡兵部左衛門子孫亡、猿渡掃部兵衛信豊越中守信光の子、年四十四、松下宗左衛門忠次・井口清藏清作傳もあり、敷根十子孫亡、郎頼清或三十郎とも、越右衛門祖、白尾孫八藤右衛門祖なり、鮫島與次郎或與五郎とも、鮫島小藏宗堯・伊地知仲右衛門島津常久子孫亡、長倉加賀右衛門右或作左、村田源左衛門經元伊兵衛祖なり、帖佐治部少輔・羽島喜兵衛友秀・秋永三郎次郎通連・鎌田少右衛門政重・米良三學坊重實或重盛とも作る、或米良千介とも、同人欤、子孫帖佐士也、入田東市正親正子孫高岡士なり、左馬助親増子、深川加賀桂兵吉臣、子孫其家來ニあり、海老原市十郎上に同し、松本角助上に同し、北郷少右衛門久兼或久經、少或作勝、北郷三久臣、竹下喜平正次北郷三久臣、子孫同家來ニ在り、澁田傳左衛門蒲生士也、鎌田弓兵衛政秀子孫吉田士ニあり、伊集院弥七左衛門忠純丸田源五祖カ、樋口飛彈守哨舟戰死とあり、桑原與助長乗見于淵邊記、子孫休右衛門、肝付弥五介・有馬安右衛門・丸目五右衛門頼利五右衛門祖、木場彦三作或種兵衛貞親、傳内祖カ、奈良原大膳廣助七祖カ、後藤十郎右衛門或作十右衛門、子孫東郷士カ、中村弓作東郷士に子孫アリ、四本釣介或作仲介、亦子孫東郷士カ、古川久次或作慈右衛門、東郷士滿右衛門祖カ、白尾孫九郎幸孝・木村平太時益平之丞祖、市來源四郎家教茂兵衛祖、壹岐孫九郎幸孝孫助祖、壹岐徳右衛門重昌盛右衛門祖、子孫加治木にあり、羽島喜兵衛友重・木脇喜平次子孫東郷士、以下朝鮮船軍戰死とあり、東郷孫作或作弥作、或作源作、東郷士平兵衛祖、草留大膳士同郷八谷山吉藏島津和泉家來、關左近或吉兵衛とも、同士甚四郎祖、肱岡仲兵祖、周右衛門祖、衛后亡、高橋與助種吉或作助兵衛、子孫島津和泉家來にあり、白石彦右衛門東郷士善太夫祖、阿多平右衛門忠倍年二十五、嶋津和泉家來、源次祖、此等九人常久臣欤、島津常久夫丸二人・堀源太・龍虎嵐山和尚・船頭彌助・仝六郎次郎・仝善五郎・夫丸源四郎・與次郎・六助・白坂源二郎島津内匠家來、與右衛祖、廣瀬六助和田源太兵衛祖欤、屋久島宮之浦五右衛門・蜑泊浦之五助從軍種子島氏、戰死とあり、伊集院九郎左衛門忠包田布施士、丸田氏祖、堀源太島津常久臣、后亡、鳥井與八郎惟貞或作與八兵衛、泰藏祖也、有村二郎武次長東十郎家來、有村金藏祖、青山孫七郎照行・北郷勝右衛門久兼北郷三久臣、子孫嶋津播磨家來、北郷佐五郎祖、肱岡仲兵衛常久臣、奥源介同上、船頭之弥介常久臣、白坂將監篤義嶋津内匠家來、與右衛門祖、白坂助七郎篤昌同家來七左衛門祖、山下十左衛門武主年三十一、子孫亡、村尾少五郎重次入來院重時家臣、以下同し、種子田喜右衛門秀次・前田次郎五郎・上野藤七兵衛以上皆入來院氏臣、此年、平田美濃守歳宗朝鮮に病死、戰亡板にあれば、此載置也、山崎理兵衛以下朝鮮戰死、年月詳かならず、此に置て竢考、河野但馬・阿多藤十郎兵部子也、河原彌助・河原新左衛門・佐多縫殿助久命紀伊守子なり、菱刈軍四郎・中條半助・酒勾源六・竪山理兵衛・巣山伴五・猿渡

兵部少輔重昌・猿渡宮内左衛門・大田八郎久治（年二十、左近將監忠富次子也）、山方半助・三原源六・富松源六・平原堅作・稲津左近小者一人・田中藤七兵衛・出水甚右衛門・西郷主水左衛門・和田喜八（或作喜介）、山口源太（源六同人歟）、川崎織部・満尾弥八右衛門・二見源左衛門家昌・山口拾助・折田彌平兵衛・有馬藏允・宅萬源太左衛門・福永源左衛門・松本源四郎・菱刈軍兵衛・土持少外記・春田金兵衛重持・遠矢二右衛門・木原與左衛門（或作與三左衛門）、築地彦右衛門・久松新兵衛・相良與一郎・春成主殿・久富木千次郎・宮内九兵衛・宮内源六・青山千九郎・山路七郎次郎・池田善左衛門・井尻弓兵衛・林但馬・四本彦兵衛・四本八兵衛・上原孫二郎・川上瀬兵衛（疑久通）、森弓吉（或休吉ニ作ル、三月廿六日戰死、年紀ナシ）、瀧聞九郎右衛門・大迫清太左衛門・河村七郎左衛門・長野少二郎・財部甚二郎・小島六左衛門・長野五右衛門・馬場源藤・瀬戸口六右衛門・松元四右衛門・白坂舎人・松元七左衛門（左或作右）、若松藏介・園田七藏・前田彦三郎・大内田采女（町田左京亮忠綱臣、赤國ニテ戰死）、佐土原九郎五郎（同上）、市來彌右衛門（同上）、榎田休助（同臣、唐島にて戰死）、田實二郎三郎・佐土原九右衛門・瀬戸口豊前・菱刈弓兵衛夫丸二人・佐藤清左衛門・上村式部少輔賴續（或作村上、十一月十八日ノ戰死トス）、野田善左衛門・八木但馬・山下弥介・瀬戸口助左衛門・橋口源藤・菊野與五郎・木原甚右衛門中間二人・新納五左入道・市來孫右衛門夫丸一人・宇田彌左衛門・中俣治部右衛門・福本次右衛門・長田勝右衛門・久松權介・鎌田吉左衛門・楠本右京・山崎兵部（或作兵衛）、飯牟禮隠岐・大塚助七・岩下休右衛門中間一人・和田郷左衛門・長藏坊・阿多藤十郎・慶田彦七・重山玄内夫丸一人・森田十介・山本銀丞・鎌田伊豫・桑波田五郎兵衛・細田七藏・長田本助（或作長山）、石塚金泉・楠本源藏（子孫加世田にあり）、大重清左衛門・梶原清左衛門・稲河弥八・崎山善左衛門・堀五兵衛・河野鳥介・柚木源左衛門・押領司南藏・竹吉助左衛門・平川二郎太郎・萩原甚四郎・中村三郎次郎・永牟田市介・野崎源二郎・福本弥七・春成助右衛門・新穂弥八郎（弥或作孫）、酒勾能登・四本肥前・山下弓八（或作弓助）、麻生軍介・上田軍四郎・村上藤内左衛門・長野城介・塚田平七（或作半七）、瀧聞四郎右衛門・長山權左衛門・二木佐介・田尻金右衛門・市來平太・本渡郷左衛門・山下早介・小田原左近兵衛・平田覺内・左近允治右衛門・井上八右衛門・立本玄蕃・末原五郎九郎・藤田作右衛門（或右作左）、圖師甚兵衛・岩下

甚五・佐藤清介・岩重孫七郎・田中藤内左衛門・佐多縫殿一族、佐多氏臣、池上源左衛門重治、朝岳源二郎同上、或作朝限、安樂主税同上、或作安藤、晋州戦死、安藤源次郎同上、西郷新八郎同上、谷山進介同上、江田賀兵衛同上、大山兵左衛門同上、赤崎番左衛門同上、普州戦死、吉永助左衛門同上、或作三郎、村岡善左衛門同上、凡二十余人死之、園田助七郎・園田宗四郎・市來弓内・山崎源十郎喜入忠政臣、野間武藏・迫田源左衛門・神河新六左衛門・隈本助十郎・久須野次兵衛・坂口金允・知覧源助・四本半九郎忠次・阿多源左衛門忠俊・樺山兵部太輔・野村吉次昌綱町田左京臣、三原兵部少輔重宗病死、鎌田源三・田中藤兵衛・入佐伴助・伊作與吉久次伊作家庶流、宮内八左衛門戦場及年月なし、四本半九郎か次にある故、姑く此に埃考、以下同し、白濱周防守豊後瀧田戦死ノ重政同人カ、白濱六郎二郎・下武式部左衛門・山崎能登守・園田肥前守・平山民部左衛門・立田善左衛門・餅原大隅・赤塚源太左衛門・赤塚源助・川上源太左衛門忠次又次郎忠武の子、勝目與左衛門・木場利兵衛・久保城助・西郷四右衛門・奈良迫讃岐・久保久八・種田喜右衛門入來院氏臣、番船戦死とあり、或作喜兵衛、此より已下の交名、朝鮮戦亡の中に雑見すれは、姑く此に置て埃考、上野藤七左衛門或作藤七兵衛、亦入來院氏臣なり、今村玄蕃加徳島戦死の場に載す、園田縫殿・中嶋源左衛門・鈴木源右衛門・木下三郎次郎・六笠三郎次郎・緒方十郎左衛門・村尾勝五郎入來院重時臣、番船戦死に載す、税所藤左衛門或作藤兵衛、瀬々幸左衛門・和田二左衛門・春田甚左衛門・岩於弥九郎・長野助左衛門・勝田宮内左衛門・坂元與左衛門・前田彦七郎・江浪六郎左衛門・中嶋源三郎・田代老名四本理介・中馬甚助・坂本金介・窪拾郎左衛門或作拾右衛門、横山二郎太・清水治左衛門・肱岡二右衛門木下勝右衛門・野崎彌左衛門・園田主水・白濱小介・嶽三右衛門・春山少介・嶽弓次・前田源允・鍛冶屋彦七・川路彦八・三園善五郎・三園與五郎・坂口金之丞祢寢重張家臣、野間武藏同上、江田嘉兵衛同上、厚地次右衛門同上、山内彌介北郷忠虎臣、黒田新介同上、神村三之允同上、松崎李右衛門同上、文祿元年十一月戦死ノ松永李右衛門ト同人カ、村田三吉經正同上、佐渡太郎五郎信次同上、細山田弥兵衛宗朝同上、山内與五郎義隆同上、文祿元年とあり、山内介七郎同上、或作勘、介山内助十郎同上、待木彌太郎家理同上、木幡主殿秀正同上、園田石見同上、寺田造酒同上、妹尾助左衛門同上、川野萬左衛門通次同上、轟木休右衛門同上、西原賀介同上、田多甚三郎同上、或作大田、持永江左衛門同上、左或作右、文祿元年九月十日ともあり、山内彌拾郎同上、或作七、十長友助左衛門同上、左或右、中原帯刀同上、赤地助右衛門同上、長野助丞同上、山本弥平綱秀同上、山本彌助同上、稲本善右衛門同上、栗山勘解

由同上、日高助左衞門同上、谷山平右衞門同上、富松源藏同上、神田橋民部同上、山路出雲同上、芝刑部左衞門家純同上、文祿元年とあり、土持三九郎清綱同上、新納次郎右衞門久乘同上、或作次右衞門、津曲小左衞門同上、或作津田、有河六右衞門同上、園田三藏同上、曽原助四郎同上、或作曽木、文祿元年三月とあり、山下三右衞門同上、黒木彦右衞門同上、有馬玄蕃同上、島田掃部同上、松山喜作同上、大高佐勘解由同上、或作大田笠、芝休也家堅同上、或作休弥、文祿元年トあり、淵脇彌七郎同上、黒木與右衞門以下數名北郷氏臣、朝鮮戰死、年月詳かならず、此ニ置焉考、近間宮内左衞門・薗田民部左衞門・皃玉神左衞門・小岩屋茂左衞門・大峯源七・松ヶ野喜平次・赤木萬助・薗田治右衞門・丸目又七・八木源三郎・長谷場市助・兼田和泉・山下久藏・戸高壹岐・中間主殿・同市助・夫丸小弥太・助次・加平・孫七郎・源助・千兵衞・仲左衞門・八郎・長助・市之丞・孫兵衞・源七左衞門・星右衞門・善右衞門・助八郎・太郎四郎・八郎五郎・平右衞門・源左衞門・十郎次・仲右衞門・三郎五郎・仲兵衞・金八郎・與左衞門・助右衞門・權左衞門・六郎・助太・源左衞門・市助・新右衞門・弥七・助次郎・助六・彦七・神次・九郎左衞門・助三郎・弥八左衞門・又兵衞・三郎八・源十・早七・六郎次郎・竹兵衞・弥助・藤八・市介・甚藏・三郎次・吉次・九郎兵衞・助四・助九・太郎左衞門・千太・弥太・助四郎・與助・次郎三・弥三郎・才右衞門・孫七・彦助・万八郎・彦六左衞門・又十郎・六藏・又五・千六郎・助三郎・半左衞門・八郎・仙左衞門・金兵衞・六之丞以上皆北郷氏家臣從兵也、相良新吉以下皆朝鮮戰死の列ニ載たり、橋口新次郎・二見細藏・犬童十右衞門・塚脇次郎五郎・同萬七左衞門・東條式部左衞門・脇本源左衞門・鮫島民部左衞門・小牧市弥太左衞門・森本彌三郎或作立本、塚脇和泉・宮野助六・村田飛彈・猿渡源五郎・有馬藤内左衞門・中別府右京・芝雅樂助・立本河内・小牧亦左衞門・岩下藤彌左衞門・持長近藤・横山杢・横山彌左衞門・横山藤兵衞・瀬戸口監物・同新九郎・園田權兵衞・曽左右・竹井三郎太郎・若松藤右衞門・山下權右衞門・植松宮内左衞門・末原六郎左衞門・同弥六左衞門・藤田淡路・同又次郎・中津善右衞門・岩重壹岐・石田志磨・池邊七郎右衞門或右作左、黒木介七・皃玉彦五郎・公田土佐守・森若大藏・河口弥九郎・重村孫八左衞門・鳥井與八左衞門與八郎惟貞と同人欤、鳥井泰藏祖、前田藤市・宮田杢・下村大學・河本吉右衞門・吉井源六兵衞・二見大藏・早崎六右衞門・古江半右衞

門・長田三兵衞・内村源左衞門・緒方拾郎兵衞・古川三右衞門・濱田三郎兵衞・恒吉清丞・奥太郎兵衞・田中與市左衞門・久木本早右衞門・甲斐左衞門・大重次郎四郎・岩切與四郎・同與市兵衞・山下勝吉・伊集院治右衞門・有馬左近兵衞・木原式部・井上左近・迫田太郎助・有村三郎次郎・泊三介・辻助四郎・朝倉弥七・岩下與市・安武左吉・田中孫介（或弥介）、椎屋覺右衞門・小森民部左衞門・濱田右京・萩原主計・小池彌右衞門・三藏坊・木山治右衞門・足山式部・山口藤五郎・鎌田左京（或左吉）、玉水樂藏・岩川弥七・楠川新左衞門・日高八郎・羽生三右衞門・遠藤新太・布施藤兵衞・鎌田竹兵衞・榎本又介・鮫島清左衞門・桑山彌五郎・蓑毛主膳・稲井田二右衞門・丸目伴五郎・寺師孫介・米良三五郎・東郷源四郎（伏見戰死の源四郎と八別人欤）、東郷吉兵衞・東郷與七兵衞・東郷弥六・白坂助六・白坂彦八郎・池田哲賀・家村清八・迫本市兵衞・中馬一作・愛甲源八・橋口源左衞門・河俣孫次郎・川村伴助・上原金介・内山助六・内山金助・村田源左衞門經元・尾崎舎人・皆越兵太・皃玉彌二郎・園田森介・佐々田弓内・厚地宇右衞門・黒木甚兵衞・坂本縄左衞門・島子十郎兵衞・村山源兵衞・牧田軍介・神田十介・神河藤八郎・長野勘解由・井手口半兵衞（半或作万）、片野坂喜兵衞・川別安房・洗切源左衞門・津崎五郎四郎・脇田清九郎・山中金三郎・中馬孫七・川邊新左衞門・淵上彌兵衞・同彌太郎・牧六介・山下喜八・税所少右衞門・假屋主殿・島子記右衞門・樋ノ口彌太郎・吉滿休内久友（霜月十四日朝鮮、戰死とありて年紀なし、年二十歳）、伊地知角内重次・二木權平友貞（或權右衞門ともあり、此乎）、和田豊前・川上源太左衞門久利（川上久國家臣なり）、松崎藏之助（加德嶋にて戰死、年月なし）、安樂大炊助（喜入忠政臣）、久保平次郎安高・肝付弥五助・久保伊豫守行經（安高以下牧司城戰死とあり）、彦太郎・半九郎・新兵衞・千兵衞・源左衞門・兵十郎・助二郎・喜八・源太左衞門・平六・三郎二郎・助右衞門・助太郎・七郎二郎・藤兵衞・十郎二郎・二郎太郎・二助・與三郎・權八・二郎左衞門・孫兵衞・彦六左衞門・孫四郎・八郎五郎・三位坊・杢助・源助・小左衞門・半兵衞・三七・日限坊・彦七・次郎三郎・彦助・三郎五郎・長藏坊・帶刀・彦太郎・次郎兵衞・三郎次郎・左介・孫十郎・小四郎・源太・十介・又三郎・彦八・主税・甚之丞・三郎五郎・今助・五後郎・喜右衞門・與助・藏丞・七郎二郎・彦二郎・弥三郎・弥

八左衞門・源七左衞門・八兵衞・甚三郎・源三郎・七左衞門・源六左衞門・五郎左衞門・助太郎・源三郎・彦太郎・二郎右衞門・與太郎・三郎二郎・次郎三郎・善左衞門・與助・與一兵衞・九郎五郎・源五郎・五郎三郎・助太郎・九郎五郎・助五郎・孫六・二郎三郎・千兵衞・大藏・孫三郎・萬左衞門・彦四郎・三郎次郎・三郎四郎・孫七・新兵衞・彦三郎・次郎左衞門・彦二郎・助二郎・彦五郎・甚六・弥八左衞門・弥七郎・弥太郎・小左衞門・七郎左衞門・三左衞門・藤二郎・半左衞門・金七郎・助三郎・三郎二郎・萬八・新左衞門・弥三郎・吉次郎・神兵衞・藏助・七郎二郎・金助・大覺・又十郎・與三右衞門・三郎五郎・源三郎・六郎二郎・兵八・二郎・權八・作左衞門・三郎・源三郎・二郎・六左衞門・藤太左衞門・權左衞門・甚四郎・新左衞門・源六左衞門・八郎・彌介・對馬・與七郎・二郎太郎・甚九郎・藤右衞門・彌介・半助・喜助・藤左衞門・七郎左衞門・半五郎・甚五郎・孫六・宮兵衞・孫十郎・市左衞門・弥三郎・權七郎・善一郎・源左衞門・藤太・覺助・太兵衞・越之助・孫八・孫十郎・走太兵衞・與五郎・助十郎・小三郎・源太・五郎二郎・與兵衞・助太郎・彦十郎・清右衞門・助三郎・二介・善八・孫次郎・萬八・與六・四郎三郎・走太・次郎九郎・助三郎・助五郎・藤太・源兵衞・又兵衞・新五郎・次郎三郎・九郎二郎・孫十郎・軍介・孫七・市藏彦十郎・新三郎・吉五・又左衞門・助十郎・弥二郎・武藏・孫十郎・平左衞門・利介・三吉・源左衞門・内藏允・二郎五郎・平八・藏之允・源六・孫十郎・源四郎・太郎二郎・源三郎・五郎次郎・彌七・金六・主計・伴介・休八・善作・八郎・五郎・彌七・三七・權左衞門・萬藏・小七・五郎左衞門・文太兵衞・主計・甲斐・九介・清太・對馬・彌九郎・吉五・與左衞門・次郎五郎・源四郎・珍六・七右衞門・太郎五郎・九八・七左衞門・少藏・九郎左衞門・弓八・表右衞門・彌太・金助・彌七左衞門・三吉・清左衞門・市之允・市弥太・孫六・助八・七左衞門・三兵衞・孫左衞門・吉六・藤八・善兵衞・平三郎・主藤兵衞・清右衞門・彦十郎・弥八左衞門・新右衞門・金八・拾右衞門・稲弥太・千左衞門・金兵衞・孫十郎・善左衞門・十郎三郎・弥左衞門・助左衞門・弥助・彦二郎・與七・新三郎・金助・藤作・彦七・助二郎・善左衞門・助左衞門・

三郎二郎・萬六・孫左衞門・二郎五郎・平左衞門・又次郎・又左衞門・九郎・平次郎・河内・六之允・萬介・源太郎・藤左衞門・五郎二郎・弥太郎・彌左衞門・又五郎・甚五郎・彦十郎・源六・助十郎・四郎左衞門・彌十郎・早左衞門・藤二郎・太郎二郎・甚四郎・四八・四郎左衞門・與左衞門・今助・二郎三郎・但馬・與三左衞門・三郎四郎・善介・新左衞門・太兵衞・急四郎・助八・十郎兵衞・九郎兵衞・大左衞門・與七左衞門・千七左衞門・太左衞門・喜左衞門・市兵衞・孫左衞門・弥七郎　以上無姓氏、戰死年月、且何れの役と各詳かならねと、多くは朝鮮戰亡の末にあれは、此に附て考、

350

「義弘公御譜中」

慶長三年戊戌正月朔日、行長率三千兵發船于順天、而救蔚山、秀元・秀秋・長政率三万兵來、爲蔚山之後援、四國軍兵二万餘人亦馳來、屯于蔚山之近邊、楊鎬大恐不及分兵運籌之事、卽論曰、速可班師、既而援兵數万飄旌旗于前山之風、依是楊鎬驚遽、不論先後狼狽逃歸、清正不知之、故不出而追之、翌日援兵見明兵之甚少、皆謂、彼既逃矣、卽與城兵追之、呉惟忠・茅國器忘身而苦戰、故明兵得不悉死矣、然其兵器・馬旗・弓矢・鳥銃弃捐于路頭者、車載斗量不可得尽、楊鎬之汚名傳布於世間也、邢玠聞楊鎬不克拔蔚山而大怒、悉聚諸軍於王城、以謀再擧、且奏楊鎬罪于明帝而罷其官、

351

「義弘公御譜中」

「正文在加治木衆城權右衞門」

なを〳〵此ふミしたゝめ申候うちに、そてんより十里ほとさきに、唐人つきそろふよし申來候、すなわち見きりに人を遣し候あひた、実儀においてハ、まつ彼はうへ打出、はたらき申へきかくこに候、いつれも追〻申へく候、將又へほ木彦兵へ事、早〻上せ申へく候へ共、便舟なとなく候て、爰元ニとうりうさせ申候、此たひも上せ申へく候へ共、又〻此方之やうす申へく候と存、相留申候、いつれもやかて彦兵衞尉を以、此元のやうす申のほせへく候、

追而申こし候、さんぬるとしのしはす廿二日、ひかしおもてうるさむの新しろに、たう人よせきたり候、然ハ古ミやこよりうるさむハ、八日路ほともあるへき由候、其間ハぢんをとりつゝけたるやうに聞え候、左やうに候て、

夜かけにはたらき、二のまるまてせめのほりたる由候、あさの左京のたいぶとの・おほ田ひた守殿なとハ、本丸ニこもられたると申候、加藤との事ハ、せつかいのしろより五六人めしつれ、漸しろにはせこもられ、すなわちろうしやうになりたる由、おなしく廿六日にあひきこえ候て、爰もとの御ふしん奉行かけひ殿をはしめ、御ふしん衆各はせつゝかせられ候間、我らおやこの事も、各御同前につゝき申へき由たひ〳〵申候へ共、爰もとそてんの事ハ、小にし殿番所しゆんてんつなきのしろと申、うけ取のしろかたく御はん申へき由、かけひ殿おほせられ候まゝ、その儀にまかせ候、うるさむおもてあまりこゝろもとなく候間、たひ〳〵つかいをさしこし候つれとも、はる〳〵のあひたにて候へハ、其後とかくのをとつれもなく候、この月のさんぬる四日に、こせんと申所よりきこえ候、うるさむのしろいまになからへたると見え候、されとてきまふせいにてとりまき、あひのかきをゆひまわし候、みかたハやう〳〵せつがいにぢんとられ候へ共、うるさむとせつがいの間に、五百石ふねをもこき入るほとの川をへたて、みちのほとも六里はかり候へハ、たやすくわたりこさるゝ事なりかたく候や、いまたうしろまきなともなき由申候、然ハふるミやこにてうるさむおもて、又此くちへもはたらくへき人數をわけたると、此堺にてとらへたるさるミ共申候、又此さかいにへぐそと申朝せんの大將、むま乗少〻めしつれまかり出候を、おいかけ、めしつれたる者をとらへ候てたつね候へハ、此おもてにもあひはたらくへき由候て、道見に參りたると申候、さためてこゝもとにもてきよせきたるへきと、あひまつていにて候、ことさらなべしま殿ちやわんと申しろをうけ取れ候て、此ほとさいはんにて候つれとも、此たひのたうらいにより、はつか人數三百ほとのこしをき、せつかいのことくはせつゝかれ、いまにいまたもとの竹嶋のしろをも、なか〳〵にもたるへきときこえ候、まことにとなりのしろさへかやうにあけのかるゝていに候へ共、御ふしんさせられ候て、あつけられたる御しろの事にて候へハ、かたくもち申へきかくこに候、此御さう共はや〳〵と申へく候へ共、ほととをく候てくハしくきこえす候故、いまにおしうつり候、然ハ今朝こせんたちはな殿ゟ、うるさむに取かけ候唐人、こと〳〵くきりくつさるゝのよし、てうしん候間申越候、くハしき儀ハ追〻申上せへく候、かしこ、

「朱カキ」
「慶長三年正月」
「右御書ハ、義弘公朝鮮より被遣タル御書なるへし、御名も宛書もなし」

352

「征韓偉略」
一三年戊戌正月五日云々、時諸將守朝鮮諸城者分爲三道、以蔚山爲東路清正居焉、以順天爲西路行長居、以泗川爲中路義弘父子居焉、清正記、征伐記、明史、○按清正記、以中路爲長政者誤、今訂之、行長水師番休、往來如駛、明史、

353

「仝」
一二月、都督陳璘以廣兵、劉綎以川兵、劉(鄧)子龍以浙直兵、先後至玠亦分兵三協、爲水陸四路置太將、中路如梅、東路貴、西路綎、水路璘、各守汛地、相機出兵、朝鮮傳、其置水路者懲島山失也、

354

「朝鮮日々記」
一戌二月欽与存候、新納勘解由殿内衆古仙界之山江鹿駆ニ參、覚悟之外虎ニ行逢申、其虎を射捕、夜入時分ニ御城ニ致持參候、　御兩殿様御前ニ被召寄、御褒美ニ而候、其後大口衆市來孫左衞門殿矢祭被仕候、虎取之人江名を被下、虎兵衞与申候、
一古館・晋州・猿羽見江番手之夏、内々奥方ゟ漢南人大軍打出之由風聞有之候間、爲物見古丸江相良玄蕃殿・勝目兵右衞門殿・押川六兵衞殿・川上六郎兵衞殿、其外一兩人被召置候、晋州江者寺山四郎左衞門殿、其外餘多被召置候、猿羽見江者川上休右衞門殿、外ニ餘多被召置候、新城ゟ晋州・猿羽見道五里程御坐候、古丸江者一里半御坐候、

355

「御文庫四拾八番箱中」「義弘公御譜中ニアリ」
「案文」
當年之御慶珎重多幸々々、仍去極月廿二日、加主拘之蔚山新城ニ唐人相働、籠城ニ及候由、極月廿六日到來候、就夫垣泉州を始泗川御普請衆、各うるさむ表之様ニ被打越候間、拙者も人數一分ニ可罷出之由雖申候、城主之儀者請取之城番堅可相勤之由被仰聞候、され共我々事者親子在之儀候条、一人者各御供仕、東表へ罷出、蔚山籠城之様をも見廻申度候由、垣泉州へ重疊申入候へ共、有間敷儀にて候由承候間、于今泗川ニ然与在城仕候、然者此

五日以前、晋州山さるゝ罷下、親類之者共在郷ニ在之をめしつれ、山中之様ニ迯散可仕企相知候て搦取、様子尋候へハ、慶尚道之内古宮こニ唐人相集、人數分を仕候て、一手者蔚山表之様ニ相越、今一手者此表へ罷出可相働評議之由申候、又昨日晋州表ニ唐人拾騎程相見え候間、晋州ニ食置候番手之者共罷出追懸、則唐人食列たる者をとらへ候て、様子たつね候へハ、晋州表へ道見ニ罷出候由申候、又古宮こにて人數分を仕、惣別兩口ニ可相働企在之由、此者も申候、さやうにも在之事ニ候哉、此間在郷〳〵に有付候百姓共、又山中之様ニ迯散仕候者も少〻御座候、雖然今日迄者、しゐて替る儀も此表には無御座候、兼又鍋賀事者、親子共うるさむ表之様ニ被馳向付而、昌原新城明地ニ罷成、竹嶋邊之儀も成次第可被相拘地磐(ママ)之由、夜前羽左近方より被申越候、固城泗川之事者、順天より〳〵の儀に候条、とにもかくにも 備前中納言様得御意、福右・小攝へ可申談外無之候之条、羽左近方申合、則夜前右之様子順天へ申越候、然者全羅道之内全州南原迄、唐人數万騎打越在之由申候間、何共於此表も定可相働と存計候、蔚山表之儀、早〻御注進可申と存候へ共、遠方故最前之一到來迄にて、其後とかく不聞得候、自是も追〻使者差越申候へ共未罷歸、一途之到來も無之ニ付而、此飛脚延引仕候、蔚山表之儀承究事も無之候へ共、あまり延引ニ罷成候ハヽ、先申入候、定釜山浦より巨細之段者可被聞食候、然共爰元之様子をも爲可申入、彼是飛脚上せ申候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長三年」正月六日　羽兵
義弘

石治少様
人〻御中

356

「御文庫四拾八番箱中」「義久公御譜中正文在加治木衆白尾清右衛門トアリ」

當年之御慶珎重〻〻、仍去極月廿二日、加藤主計頭殿拘之うるさむ新城ニ唐人相働、被及籠城之由、極月廿六日到來候、就夫垣見和泉守殿を始、泗川御普請之御人數、各うるさむ表之様被打越候条、我〻事も人數一分ニ可罷出之由雖申候、城主之儀者、惣別請取之城番丈夫ニ可仕之由、垣見殿被仰聞候、され共我〻儀者親子在之事候条、一人者各致御供、東表之様ニ罷出、蔚山籠城之様子をも見廻申度之旨、垣和州へ重而雖申入候、有間敷儀にて候之由承候間、于今泗川ニ在城候、然者此五日以前、晋州山さるゝ罷下、親類之者共在郷ニ有付候而罷居候を食列、

山中之様可迯散企相知、彼山さるゝをくゝり候て、事之由を相尋候へハ、當國古宮こと申所ニ唐人相集、人數を分候て、一手者蔚山之様ニ相越、今一手者此表之様罷出可相働之由、評儀仕たると申候、又此堺目ニ唐人馬乗共少々相見え候間、堺目ニ召置候者共出合、則唐人食列候さるゝをとらへ候て、様子たつね候へハ、此表之道見ニ江南人より被遣たると申候、又古宮こにて人數分を仕、兩口ニ可相働企之由、此者も申候、さやうにも在之事候欤、此中在郷〳〵ニ有付候百姓共、又山中之様ニ迯散候者も少々在之事ニ候、然共今日迄者此表遮而見來儀者無之候、鍋賀州なとハ親子共ニうるさむ表之様被馳向たる由候、こせん・そてむ兩城之事者、小攝番所順天つなきの儀にて候条、彼方へ可申談外無之候、殊更順天ニハ備前中納言殿・福原右馬助殿なと、今程被成御在城候之間、得御意候處、いかやうの子細候共、不混于他泗川在番肝要之由承候間、弥そてむニ在番候、就中全羅道之内全州南原と申所ニも、唐人打越相集之由聞得候間、何共此表へも定可相働と存候、うるさむ表之儀も早々注進申度候へ共、遠方之故に候哉、最前之一到來迄にて、其後者とかく不相聞得候間、追々自是も使者を遣し候へ共、未罷歸、一途之到來も無之ニ付而、此飛脚も延引候、然処ニ蔚山表ニ罷出候唐人被打果、被得御勝利之由到來候、不始儀ニ候へ共、　大閤様御威光難及凡慮之儀共ニ候、委儀者重而可申候、兼又軍衆兵粮之儀、種々様々収納之儀依申付、諸人よりにくまれ候事以之外ニ候つれ共、念を入候故、縱爰元籠城ニ成候共、此節之儀者兵粮等之氣遣無之候、尚追々可申候、恐々謹言、

正月九日　　義弘（花押）

河上三河（忠智）入道殿

357

「御文庫廿三番箱十四巻中」「写也」

猶以追々御人數被差遣候条、依注進可被成御渡海候間、各申談、無越度様ニ可申付候也、

去朔日注進狀今日到來、加披見候、然ハ唐人・朝鮮者共蔚山へ罷出付而、各懸付、彼表へ去朔日ニ押出候由、被聞召届候、好得坪へ罷出候而、則時可討果事案之中ニ候、就其安藝中納言・増田右衞門尉・因幡衆・大和衆・紀伊國衆・但馬衆・九鬼大隅を始、御人數追々可被差遣候条、得其意、一人も不洩可討果候、猶重而吉左右待覚候也、

正月十一日　御朱印

羽柴安藝宰相（毛利輝元）とのへ
蜂須賀阿波守（家政）とのへ
生駒讃岐守（一正）とのへ
安國寺（恵瓊）
黒田甲斐守（長政）とのへ
毛利壱岐守（吉成）とのへ
加藤左馬助（嘉明）とのへ
脇坂中務少輔（安治）とのへ
早川主馬允（長政）とのへ
山口玄番頭（正弘）とのへ
鍋嶋加賀守（直茂）とのへ
竹中源介（隆重）とのへ

358
「古御文書三番箱三巻中」

已上

新春之御慶不可有盡期候、仍京都御奉行衆之内、被成御歸朝之由候間、爲御見廻頃都へ罷出、昨日金化へ罷歸候、然者大明國一和之儀相果、唐人弐拾万程にて取懸、已小攝事去六日被致敗北、黒田甲斐守殿陣所迄、漸手前八百計にて被引退候由候、無是非次第候、萬一都之御人衆、急ニ可被引取躰ニ罷成候てハ笑止ニ存候、内々御賢慮尤候、其表之儀如何御座候哉、我等事奥陣之つなきとして當所へ被召置儀に候間、氣遣可有御察候、御手前之儀いかやうに被成御分別候哉、定引陳之御用意可在之と存候、左様に候ハヽ、如此表可被引取候哉、連々承及候分者、其表より釜山浦へ直道在之由候、さやうの道筋をも可被引候哉、御存分之通承度候、尤以使節可申入候へ共、急ニ申入候間、用飛脚候、可得御意候、恐惶謹言、

正月十五日　羽柴兵庫頭　義弘（花押）

加藤主計頭（清正）殿
人々御中

359
『嶋津氏文書』
（本文書ハ「旧記雑録後編二」一四五〇号文書ト同文ニツキ省略ス）

360
『仝』

猶以寒天之刻、苦労不及是非候、就其小袖一・道服一被遣之候、可令着用候、猶寺澤志广守可申候也、

今度大明人蔚山へ取懸之由、注進付而、爲後巻雖押出候、敵引退由候、既自此方も、安藝中納言・増田右衛門尉・

因幡・大和・紀伊國衆九鬼父子等、可罷立旨雖被仰付候、右之分候間、不及是非候、然者仕置之城〻普請、弥丈夫ニ申付、兵粮玉薬以下澤山ニ籠置、少も無機遣様可令覚悟候、歸朝之者共ハ、弥敵之様子聞届、其上普請申付候而ゟ可致歸朝旨、被仰遣候条、可成其意候、猶徳善院・増田右衞門尉・長束大藏太輔可申候也、

「朱カキ」
「慶長三年」正月十七日　◯「御朱印」

嶋津(豊久)又七郎とのへ

361

「又七郎豊久譜中」

慶尚道(チヤウシヤウ)蔚山城欲深城隍堅垣壁、加藤主計頭・淺野左京大夫・大田飛彈守及安藝宰相家臣在于此矣、大明太軍鳴鼙鼓來攻蔚山、外郭悉破、僅存本城之声、聞日本諸陣、爲救其危急、諸將赴其地、豊久乗船解纜於泗川、經三日到于蔚山、則敵軍已退散、然而城兵未知之、豊久單騎魁于諸兵、而獲敵首者二員、結附之於鞍輪之際、家臣之歩卒二人馳到從吾、此時被傷於左耳下、而不屑也、加藤左馬頭・黒田甲斐守・鍋島信濃守以下諸將馳到、而斬獲殆八千許也、今度爲魁所以討敵之褒美、得左京大夫・主計頭之感牘也、

362

「正文在島津安藝守久雄」

（本文書ハ三六〇号文書ト同文ニツキ省略ス）

363

「家久公御譜中」

去年見日本大軍之再渡、朝鮮大驚、李昭亦創往年敗頓、即率后妃・王子奔海州(ハイチウ)、故從臣亦皆遽逃于遠境、朝鮮又大亂、告急于大明、且聲言曰、日本軍兵百万分焉爲十三列將入大明、馹馬日馳郵吏足胼(ヒヾス)、因茲明帝以邢玠爲經略、楊鎬爲經理、劉綎・麻貴爲南北大帥、邢玠分其兵爲三協、左・右・中也、十二月、楊鎬・麻貴帥三協兵赴慶州、將攻蔚山、明兵已圍繞蟻附于城壁下、城兵防之不怠、明兵屢攻屢敗、故頗倦焉、是以圍城而遠攻之、文祿三年正月朔日、小西行長率三千兵發船於順天而救蔚山、秀元・秀秋・長政率三万兵來爲蔚山之後援、四國軍兵二万餘人亦馳來、屯于蔚山之近邊、楊鎬大恐不及分兵運籌之事、即諭曰、速可班師、既而援兵數万飄旌旗於前山之風、依是楊鎬驚遽、不論先後狼狽逃歸、清正不知此變、故不出而追之、翌日即四日也、援兵等見明兵之甚少皆謂、彼既逃矣、即與城兵追之、呉惟忠・茅國器忘身而苦戰、故明兵得不悉死矣、　秀吉公聞此事、賜朱印　台書、記左方、

364

「正文有之」

猶以寒天之刻、苦労不及是非候、就其小袖一・道服一被遣之候、可令着用候、猶寺澤志广守可申候也、

今度大明人蔚山へ取懸候由、注進付而、爲後巻雖押出候、敵引退由候、既自此方も安藝中納言・増田右衞門尉・因幡・大和・紀伊國衆九鬼父子等、可罷立旨雖被仰付候、右之分候間、不及是非候、然者仕置之城〻普請、弥丈夫ニ申付、兵粮玉薬以下澤山ニ籠置、少も無機遣様可令覚悟候、歸朝之者共ハ、弥敵之様子聞届、其上普請申付候而〻可致歸朝旨、被仰遣候条、可成其意候、猶徳善院・増田右衞門尉・長束大藏太輔可申候也、

「朱カキ」
「慶長三年」正月十七日　◯（秀吉朱印）

嶋津（家久）又八郎とのへ

365

「義久公御譜中」

「此本在御文書方」

慶長三年正月廿日、　近衞殿御會初にめし出され候時、

鶯入新年語

月も日もをそきみたにはうくひすの
老せぬこゑに春やしるらん

きのふまてこゑせぬ園の鶯も
春たつけふやはつねなるらん

此昨日までの歌、紹巴ハこゑと云、音と云、字いかゝと被仰候、龍山様ハくるしかるましきと被仰候、其故ハ、

今日よりハつきてふらなん我宿の薄をしなミふれる白雪

又秋のゝの草のたもとか花すゝきほに出てまねく袖とみゆらん

かやうに候へハ、歌によるへし、此歌ハくるしかるましきと被仰候、紹巴も後ハ同し被申し、是爲後学書付置也、

「同」

當座契待戀

かねことをたのミ〳〵てまつ夜半の
更行そらや鳥（を）のしらする（そ）

「同」

名所松

花は根にかへりゆきても高砂の
尾の上の松やときはなるらん

是は春の御會にて候、春の氣に入候、弥重のよし紹
巴被仰候、

「此本在御文書力」

ミやこにての花みに詠之、

海山を分こし田舍のたもとをも
はなにへたてぬ都人かな

「仝上」

伏見之内墨滿寺と云寺に、墨染とて名木の櫻あり、其花
みに、

塵の世をよそにそおもふ古寺の
花になしたる墨染のそて

「仝」

建仁寺の藤をみて、一枝所望いたし候へハ、おしみてく
れす、此歌をよみてつかハすときは、則一枝手折てとら
する也、

花もりのゆるさは藤の枝すこし
手折てゆかん我つとのため

366

「御文庫二番箱義久公一軸中」「御譜中正文在國分衆宮里堅介トアリ慶長三年ニ入ル」

樽桶二、去方より到來候間、進献候、憚多候、
乍御報示預候、令拜見候、御上京被相定之由、委細承候、
菟角石治少田割せ之坪付、其存分にて候上、弥可然存候、
始末可然御分別候様、又依躰明日徳川殿其地可有御見舞
之由、内々爲御意得令申候、本ハ有間敷候へ共、先刻又
示來候事、委細麻吉かたより可申入候、其御分別候て、
可被仰遣候、可得御意候、かしこ、

龍伯様人人まいる　幽齋
申給へ

367

「義弘公御譜中」

「寫在國分衆宮之原善右衛門」

謹而奉致言上候、
一當表之儀、去年赤國御働之間ニ、井邑と申所ニて各相
談仕、多分ニ付て、御仕置之城所并御普請人數割等大
方相究、其旨申上候キ、併御城所之儀者、其以後城主
共何も先々罷出、所柄弥見計相究、御普請被懸相調申
候、然者今度蔚山表へ大明・朝鮮之人數罷出、其働見
及申ニ付て、各人數之者共相談仕、多分ニ付而、已來
之御仕置如此相究申度存趣之事、
一蔚山之儀、最前御左右次第ニ可相定と雖致言上候、能

〻吟味仕候へハ、所柄出過、難所川越ニて、以來迄無心元所ニて御座候間、如先〻西生浦を先〻加藤主計頭在番仕候ニ相究申、安藝宰相人數之内五千人殘置、普請申付候事、

一小西在城順天之儀、大河をへたて路次筋難所ニて手苦候て、船付遠干潟に候へハ、自然之時、海陸共ニ加勢難成所ニて御座候之間、川東只今嶋津城泗川へ小西龍移、嶋津者固城へ被移候へと申渡候、南海嶋之儀、順天被取入上者、海陸共ニ被入所与各存知、から嶋瀬戸口之城計丈夫ニ對馬守被相殘尤之由、申遣候、雖然攝津守・對馬守不致同心候、嶋津儀者先手次第ニ可仕之由候、此上者御諚次第ニ相究可申候事、

一順天・蔚山重而御普請之儀、各如申上候、兩城共ニ迚も不入所柄ニ御座候間、如此言上之上ニて、御下知可有之内者、御普請差置、備前之中納言・藤堂佐渡守事、固城之普請申付候事、

一梁山之儀、是又第一城所悪、釜山浦之間別而節所之間、自然之時、人數之出入難成所柄ニ御座候間、如先〻かとかひへ仕替、彼地之儀ハ、當表東西之諸勢〻ちすちと申、殊大河渡口ニ候間、一城無御座候而者不相叶ニ付て、右之分ニ相定、安藝宰相普請申付、黒田甲斐守在番申渡候事、

一毛利壱岐守事、固城在番候へ之由申渡候、何も爲御心持与存、繪圖ニ仕上申候、能〻被成御覧、御下知奉待候、其間之儀相究、城〻御普請弥〻丈夫ニ申付候、殊ニ今度蔚山之城抔之様躰見及候て、猶以御普請肝要ニ存候、然間城持共半役分ハ、御普請相勤尤之由、是又申渡候、此等之趣、宣預(ママ)御披露候、恐〻謹言、

「朱カキ」「慶長三年」正月廿六日

備前中納言(宇喜多秀家)
安藝宰相(毛利輝元)
蜂須加阿波守(家政)
生駒讃岐守(一正)
藤堂佐渡守(高虎)
脇坂中務大夫(安治)
菅三郎兵衛尉
松嶋彦右衛門尉
菅右衛門八(正弘)
山口玄番頭
中河修理大夫(秀成)
池田伊与守(秀雄)

長宗我部(元親)侍従

石田治部少(三成)輔殿
長束大蔵大夫(正家)殿(輔)
増田右衛門尉(長盛)殿
徳善院(玄以)

「此一通、昔年之写ト文意少々吳同アルニ依リ、更ニ写、参照ニ供ス」

368

『仝』

(本文書ハ三六七号文書ト同文ニツキ省略ス)

369

「義弘公御譜中」

「正文有之」

態被仰遣候、

一先手五里三里之間、日々ニ物見を遣、様子見計、其機遣肝要候、今度蔚山へ取懸候刻も、敵之様子不知ニ付而、のせ事之様ニ仕成由候条、毎事機遣不可有油断候、

一來年又動之儀可被仰付候、然者半切之楯數多令用意尤候、敵半弓一儀と相聞候間、手毎ニ楯を持せ候て可然候、

一城々普請弥丈夫ニ申付、可致在番候、猶徳善院・増田右衛門尉・長束大蔵大輔可申候也、

「朱カキ」「慶長三年」正月廿七日 ◯「朱印」

羽柴薩广侍従とのへ
嶋津又八郎とのへ

370

「御文庫一番箱(義弘公)二巻中」「義弘公御譜中正文有之トアリ」

其表之儀付而、被成 御朱印候、先手五里三里之間、日々ニ物見を被出、様子御見計候て、其機遣肝要之由御意候、今度蔚山へ取懸候刻、一圓様子不知付而、令仰天由候、何も不可有御油断候、次來年又御働之儀可被仰付候、半弓之用心ニ、半切之楯數多可有用意旨、被 仰遣候、可被得其意候、將又(扨)誠々御普請、弥丈夫ニ御沙汰候て、御在番尤之旨候、恐惶謹言、

「朱かき」「慶長三年」正月晦日

長束大蔵 正家(花押)
増田右衛門尉 長盛(花押)
徳善院 玄以(花押)

薩广侍従殿
嶋津又八郎殿
人々御中

371

「義弘公御譜中」

慶長三年二月、劉綎・陣璘・張榜・鄧子龍・藍芳威等、率軍皆入朝鮮、又以巡撫万世德爲經理、代楊鎬、是明主之所命也、

372

「仝」(島津氏文書)

幸便之条、令啓候、去年番船以下打續御手柄共之由、流布候間、珎重大慶此事候、抑在國中者、折々雖預懇筆候、上洛以後者依事多、然々以狀申事茂無之、背本意候、當年者可有歸朝様申間、左様ニ候得かしと申事計りニ候、吉事連々可承候、かしこ、

「慶三カ」 二月二日　　(信尹) 三木

羽又八郎殿

373

「御文庫二番箱家久公八巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

追而申候、唐嶋南海さるミ并れうふね、其元ニ有之様ニ其聞候、柳川方ゟもつうず遣候間、案内者可被仰付候、兼又のろし山之儀、ちやくせん嶋双方へ見へ候間、可然存候、けふり數之儀ハ書付させられ、柳川方へ可被遣候、ちやくせん嶋へおかせられ候人へも、可被仰付候、以上、

日本への御使者、早々被差渡候様ニ御用意尤候、小攝手前ゟも柳川權介可差渡之通候、使衆同日ニ出舟候様ニ申談度候間、御手前之日限可示預候、御請取之郡百性等も被召直、去年之物成之躰又御城之儀、普請能出來之旨、彼是石治迄内々被仰送、可然存候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長三年」二月五日　　直盛(花押)「熊内藏允判也」

忠恒様
人々御中

(熊谷) 熊内藏允
直盛

(上書) 忠恒様
人々御中

374

「仝上」「家久公御譜中ニ在リ」

のろし相見へ申ニ付而、預御尋候、約束之山ニ無之候、ちやくせん衆被見違候哉と存儀候、最前申定候山、當城ゟちと遠候間、近山ニ御使者ニ申合候、被入御念示預儀忝候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長三年」一月廿三日　　熊内藏允 直盛(花押)

忠恒様
御報

「廿三日ノ場ニ入ルベシ」

375

「御文庫二番箱義弘公四巻中」「義弘公御譜中正文有之トアリ」

尚以のろし火數之御定通、尤ニ存候、ちやくせん嶋ニおかせられ候人を、此方へ被差越候ハヽ相談、南海とちやくせん嶋と山の所を定可申候、以上、

貴札并のろし御定書拜見仕、火數之様子一段尤ニ存候、小攝・對馬守兩人へも可申談候、將亦石治へ被遣御狀、前後ニ二通請取、拙者書狀と一ニ柳權へ可相渡由任御意候、恐惶謹言、

「朱かき」「慶長三年故」二月十二日　熊内藏允　直盛（花押）

義弘様
忠恒様
御報

376

「御文庫三番箱宝鑑中」「家久公御譜中ニ在リ」

從龍伯便宜之由候之間、令啓候、先日も乍急便一筆令申候、弥其元無吳儀候哉、永ゝ御在陣御苦労令察候、伏見御女房衆無何事候、可御心安候、目出度御歸朝待入存候、節ゝ龍伯參會申候、何様期後音候、已上、

「朱かき」「慶長三年故」二月十四日　「龍山公」（前久）（花押）

竜山

又八郎殿

377

『嶋津氏文書』

一五大尊不動明王繪像　一幅
一古備前二尺五寸太刀　一腰
右、今度於高麗加德島、晝夜尽粉骨、依爲軍兵勝利祈禱、本尊・太刀大田吉兵衞を以令拜領訖、猶碎肝膽可被相勵者也、仍如件、

慶長三年戊二月十五日　惟新　義弘御判

櫻井坊
慶長坊殿

378

「御文庫二番箱義弘公四巻中」

かへす〳〵御いんしんかたしけなく存候、なにさま

ふとさんし、御れい可申候、以上、

御使札殊ニ御樽一か・一折懸御意候、忝存候、此中も御見廻可申入を、ひかし面ニ逗留いたし、乍存無音いたし候、何様与風參、万御礼可申入候、委細御使者へ申入候間、具不申上候、恐惶謹言、

「朱かき」
「慶長三年欠」
二月十六日　　福左太（福島）　正則（花押）

羽兵様
まいる御報

「右一通、義弘公御譜中正文在平松衆黒田善左衛門トアリ」

379

「義弘公御中」

邢玠以李如梅爲中路大將、以麻貴爲東路大將、以劉綎爲西路大將、以陳璘爲水路大將、各分兵守諸城、而防日本兵、

380

「正文御文庫三番箱巻四中」
『嶋津氏文書』

起請文之事

御家御家督之儀、依被仰付　龍伯様　武庫様御同前ニ、至拙者永〻無別心可被抽忠節由、以神載承旨、誠以感悦無極候、弥別而申談、御家相續之儀所希候、久征於無相違者、爲忠恒聊不可有違變候、右之旨於僞者、奉始上梵天帝釋、下堅牢地神、惣日本國中六十餘州大小神祇、▽別薩州鎮守新田八幡大菩薩　開聞正一位　鹿兒嶋擁護諏訪上下　稲荷　戸柱　若宮　春日諸大明神、就中帖佐擁護新正八幡大菩薩　諸大明神　天滿大自在天神御部類眷属等神罰冥罰於身上可罷蒙者也、仍起請如件、△

慶長三季戊戌二月　　忠恒（花押）
右馬頭殿（島津以久）

381

「御文庫四拾八番箱義久公巻中」「家久公御譜中御自筆トアリ」

猶〻このころも、典よりの使者きうニ返事候て、さしかへされ候、子細アルげに聞え候、とかく方〻ニ色〻しゝのほねか入候らん、御用心、又御念可入時分ニ候、殊更武庫御念ヲ御つかい候て、尤ニ存候、見合聞合スル事多之候、面談ならてハ、申分かたく候、何事モ〳〵かさおし計にて候、迷惑ニ候、安三ノ氣相ハせうしにて候、又筆三ツイ、此内一つゐハ京筆、二ツヒハ大坂、墨三ちやう、此内くろきハ別而匂ひ候とて所持候、はくにてたゝ候二ちやうハ、

いつものなり進之候、猶竹内もとりの時分くハしく
可申候、
自身被染筆候一書、別而令祝着候、抑其地無何事由、目
出度候、こゝ元モ今ほと珎儀無之候、幸上洛ハ正月五日
ニ上着にて候、内々ハ十四日ニのほられ候、安三入魂之
儀ニ候之条、何事モ心やすく聞え候、氣合モよきやうニ
見え候ふよしにて候間、何事モ有間敷候、知行かへされ
候事モ、此比ハさたなく候、兼又種子嶋左近か申分ニ付、
御分別之趣尤ニ存候、安三モ最前ハ被思候やうニ申され
候キ、此比ハ打替、先典厩たねかしまのくりかへヲ安三
へ内談と聞え候、この儀ヲ事すめ、其後種左之詫之事い
われ候するをとにて候、然者種子嶋之事、代々忠節家に
て候、似合之在所ニくり替候て遣シ候する欤と存候、安
三ノいハれ分ヲ待候躰ニ候、とかく典よりハ引替ニ候人
ヲをかるゝ事不絶様ニ聞え候、されは安の申さるゝ儀ハ
何事モ成さうなる躰にて候、御分別可入候、又かやうな
る文見たるなとゝ、幸之らくゐのよし承及候、落ちり候
ハぬやうニ、やかて火中〳〵、恐々謹言、
「朱カキ」
「慶長三年」二月廿二日　龍伯（花押）

382

「家久公御譜中」
「正文」

以上

／　龍伯

又八郎殿

従　忠恒様、霜月三日之御書被成下候、正月廿五日謹
致頂載（ママ）候、先以御陳所御無事御入通被仰聞候、扨も奥
入御軍労、併思食まゝノ御勝利、御外聞実儀尤目出度
奉存候、
一竜伯様弥御勇健御座候、其外何茂御無爲御入候事、
一奉始宰相殿、御供衆皆々無吳儀候、殊ニ御供衆辛労由
御諚候、則各々へ申聞せ候、忝之通至拙者申候事、
一石治少様関東へ御越候、就夫　義弘様御書事、伊集院
久左衞門尉方を以、関東へ御持せ候、往返次第、竹内
兵部少輔事様子承、渡海たるへく候、此等趣、宜預御
披露候、恐々謹言、
「朱カキ」
「慶長三年」一二月廿二日　川上三河入道（忠智）
伊勢弥九郎殿（貞昌）　肱枕（花押）

383

「御文庫拾六番箱十三巻中」

天罰起請文之事

一奉對　竜伯様　義弘様　忠恒様、以久事別而無二心可抽奉公候、就中於子〻孫〻、毛頭不存二心様ニ可申聞置事、

一雖爲親子兄弟之間、右對　御三殿様、於存逆心者、爲我等同心申間敷事、

一不寄何篇、如何躰之御隠密等之儀、雖被仰聞候、聊以他言申間敷事、

一世上之物沙汰等ニ付、御心遣可入儀共於承付者、不殘可申上候事、

一當對　御家悪心之旨を拵、到傍輩中、自今以後致誓紙間敷候、勿論此以前も起請取替不申事、

一御代〻乍存御嫌之上、一向ニ罷成間敷事、

一進退ニ付而、被聞召掠儀共於有之者、不被殘御心腹可預御糺明候、然而愚意亦可申上候事、

右条〻、雖爲一事於僞申者、

▽奉始(牟王)上梵天帝釋、下堅牢地神、惣日本國中六十余州大小神祇、別薩州鎮守新田八幡大菩薩　開聞正一位　鹿兒嶋擁護諏訪上下　稲荷　戸柱　若宮　春日諸大明神、就中隅州鎮守正八幡大菩薩　霧嶋山　白鳥山兩六所權現　帖佐擁護新正八幡大菩薩　諸大明神　愛岩大權現大小天狗　天滿大自在天神御部類眷屬等、神罰冥罰於身上可罷蒙者也、仍起請如件、△

慶長三年戊戌三月七日　　右馬頭以久(花押)

圖書頭(忠長)殿

384

『嶋津氏文書』

（本文書ハ三八三号文書ト同文ニツキ省略ス）

385

「御文庫四拾八番箱義久公巻中」「家久公御譜中御自筆トアリ」

猶以去夏之比あつかり候大鷹、一段見事なるたかと申候、然者あつかいあしく候欤、つかいにくきと聞え候、自然當年之若鷹ハ申ニ不及候、去年ノ若大鷹成共候ハヽ、大望ニ候と法賀ニ申度候、何とそ心かけ候へと、可被仰付候、賴入候、

追而申候、年内之兩使者、竹内ハ刀之儀ニ付、隙明候ハぬ間、桑城之介を以、先〻いそが敷御返事可申覚悟にて申付候処ニ、俄ニわつらい候て、さん〳〵の躰に

て候条、したゝめ候書狀、先かの飛脚ニ持せ進之候、
一そもしのうもし、此間連〻不食にて、尓〻ならぬ氣合にて候キ、然所二月廿四日ノ夜ヨリ、俄ニせつしよ有ほとにわつらい候、廿五日六日ハ一大事のやうニ候つれ共、色〻やうしやうヲ加、祈念立願共せい〳〵ヲ申候て、此比ハよく候、御心安かるへく候、
一下の屋敷ニハ、様〻さいなん共出合候て、笑止ニ存候、殊ニ人モ多〻わつらい候、いかさま肱枕之前ヨリ委可申候間、不一二候、此屋敷ニモ其たくひ候て、迷惑いたし候、
一我か刀國廣早〻出來候へ共、今度ハ便尓〻ならす候間、竹内參候する時分、持せ可申候、
一肱枕役ヲあけ候とて、何事モ〳〵すりはづし候する覚悟まてにて候、早竟つめハ御爲ニ罷成間敷候、笑止千万ニ存候、
一こゝ元此比めつらしき事無之候、然共於醍醐ニ御花見の御もよほしにて候、女房衆の出たち被仰付候、小袖一人ニ三ツつゝ、おひモ三筋ツゝ、又ぼしとてかゝまきヲ地ニ付計有ハ、たて筋有ハよこすち、又ハめゆい、かのこ、さてハすりはく、色〻のだて出たち御用意、千三百被仰付候と京にて承候、三所にて出たち替候すると申候、京中の細工隙ヲ不得由申候、見物モ女房ハ見候へ、男ハ三里四法ヲ御のけ候由申候、猶委ハ竹兵渡海之折節可申候事候、恐〻謹言、

「朱カキ」
「慶長三年」三月七日　　竜伯（花押）

又八郎殿
參

386

「阿久根勝目三左衛門藏」

追而御同道之各江、銘以一通御辛労之通可申候へ共、御同前之事之旨、御心得奉賴候、殊ニ次郎兵衛尉煩候ニ、隈本勝右衛門尉殿一段御心被添候之由、承及候、案中ニて能〻御禮ニて可給候、
永〻御在洛、御大儀不申及候、重冬（ママ）時分者、幡（播）摩江御在國之間、無音心外之至候、仍黒木廣顔濟之氣合出合候、貴所留主中成共、伊東平右衛門尉殿談合可被聞之旨雖令申、頻斟酌深重候、笑止迄ニ候、二郎兵衛尉・弥太右衛門尉御内談候て、　武庫様之御耳ニ以内儀申上度候、上意相付候之上者、御納得可被參欤与存候、但自爰元難計候、爲御分別候、恐〻謹言、

387

「慶長三年比カ」
三月七日　　新武入（忠元）爲舟判

貴島弥兵衛尉殿　御宿所

拙齋

「包紙」
貴島弥兵衛尉殿　御宿所　　爲舟

「正文有之」

猶以梁山者不入所候間、かとかい（加徳）へ可引入之由被仰遣候、固城ニハ柳川侍從・久留米侍從・高橋主膳・筑紫上野介在城可仕旨被仰出候、近所ニ候間、可申談候也、

急度被仰遣候、渡海之者共かたゟ、蔚山・梁山・順天可引拂之由申遣候へ共、無同心ニ付而、得御意由申越候、不得御意をも、右三ヶ所可引拂之由申候段、曲事共候、

一先年ゆうけきを以御侘言申上候剋、城〻おほく候てハ、下〻自然退屈も候てハと思召、城數十ヶ所計も被爲引拂、海邊ニ付て手堅被仰付候、其上二手三手ニ一度宛、御人數被差渡、燒働ニりやうたう境目迄も可被仰付と思召、城數すくなく被仰付たる事候、然者今度仕置城〻之儀、見計申付之由言上候、上様不被成御覧所候条、各次第と被思召之処、敵よハく候へハ、何方迄も其分と存、城を取ひろけ候、然處蔚山城普請已下不相調、玉藥未入置刻、大明朝鮮之一揆同前之者共罷出、城を責そこない、敗軍仕候間、追付て悉可討果と思召候處、其段ハのかし遣、剩蔚山・順天・梁山之儀、不得御諚可引拂之段申遣候儀、曲事之由、被仰遣候事、

一兵粮之儀者、日本之都へ相届候ゟも、其方へハたやすく候、過分之御知行被下候間、自分にも其覚悟仕候儀勿論之事候、其上ニ城〻置兵粮・玉藥丈夫ニ被仰付、被入置候条、城一二ヶ所相拘候事者安儀候、普請之儀如存分出來候て、縱敵取懸候共、堅固可相拘と存候ハ、、各かたへ一札を出し、歸朝させ可申候、但各歸朝仕候跡ニ難相拘存候ハ、、其通可申上候、隨其可被仰出候事、

一來年者御人數被差渡、朝鮮都迄も働之儀可被仰付候、得其意、兵粮・玉藥澤山ニ覚悟仕、可在城候也、

（慶長三年）
三月十三日　◯（秀吉朱印）

羽柴薩广侍従とのへ
嶋津又八郎とのへ

388
『嶋津氏文書』
（本文書ハ三八七号文書ト同文ニツキ省略ス）
「此一通、義弘公御譜中正文有之トアリ」

389
「御文庫四拾八番箱中」「義弘公御譜中ニアリ」
何茂之悪筆にて申入候、仍各御歸朝候する砌者、某事當國より直ニ上洛仕度存候、調之儀數ヶ度國元へ申越候、然共萬ゝ事繁時分に候之条、然ゝ調間敷と存候、さやうに候へハ、令迷惑儀に候条、拙者在京料之儀、諸事無由断調可申之旨、役人共へそと被加御詞候て可預候、といひかくいひ不調候てハ、其時に至り迷惑可仕と爰より氣遣不大方候、御むつかしなからたのミたてまつり候、兼又料理者之事申入候処、上井甚五郎罷下候刻、御念比に承候、畏存候、今程料理者無之候て、上使なとの時者不及申、かりそめの客來にも可仕様無之候、無余儀時者、小攝方より雇請候て調候躰に候間、いよいよ無御失念被仰付候て可給候、是又頼存候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長三年故」
三月十七日　羽兵
義弘（花押）
石治少様
人ゝ御中

390
「義久公御譜中」
「加治木之士大村市兵衛ヨリ出ル書中ニ有之」
慶長三年戊戌三月廿日午時、初扣　松平家康卿門戸、于時獻御太刀・馬代及巻物五十端、伊集院右衛門大夫入道幸侃亦從我參扣、獻伽羅壹斤矣、是亦　家康卿可有來臨之旨、去十一日有　近衛殿告、然則先不可不參候如斯、佳興無有休止、既至深更九時、而後赴歸家者也、

391
「仝」
其後　家康卿被寄高駕於私宅、自朝五時至夜四時、而後被催歸駕也、
慶長三年戊戌、在伏見之際、與石田治部少輔俱議、而書私家雜事法度條目、以與家臣等也、

392
『諏方氏文書』
其御方御參上之由承及候之間、令啓達候、以使僧、二三

日以前者愚老同道申、衆中知行方之儀、無御失念奉憑候、
吉田之内冨森九介殿棹口三百石余、嶋田弥五右衞門尉殿「日向竿奉行」「日州竿奉行」
棹口三百石余、此二竿之内一棹までも入間敷存候、御配「文禄三年九月十四日ゟ同四未二月廿九日迄御検地」
當奉頼候、譜之御事ニ、右之二棹之内壱棹御取成奉憑候、
國境召移儀候条、少つゝも用ニ被立候人衆同道申候はて
ハ、何篇難閉候間、偏ニ奉頼候、將又某今度返地ニ上申候
藏野之内、五百五十石程候欤、巨細帳をさせ置候、雖可「入来」
致進覧候、岡松未検地申候、彼地を申候ニ付、眞幸進覧
可申候、非油断候、隨而岡松より京都・高麗ハ夫丸罷立
候、御留候て可給候、軈孫ニて候二郎兵衞尉上洛させ可「慶長元丙申ゟ同四己亥迄四年在洛」
申候条、是又無御失念可被御心添事所仰候、恐惶謹言、

「慶長三年欤」
三月廿二日　　新武
　　爲舟判
上井神五郎殿（里兼）
参人々御中

393

「本田助之丞藏」

帖佐方軍役究目録

一　定軍役分
　三万七千佰四拾三石七斗九舛三合四夕六才
一　奥方
　弐千百八拾三石四斗二舛七合六夕二才
一　醫者分
　佰三拾三石七斗
一　諸職分
　千五百六拾八石八斗七合
一　道具衆分
　五佰拾八石七斗七舛三合
一　中間分
　五佰壱石三斗五舛六合
一　行司分
　佰八石九斗
一　浮所
　弐千五佰八拾七石六斗五舛八合六才
七口
　合七千六佰弐石六斗二舛壱合六夕八才
二口
　合四萬四千七佰四十六石四斗壱舛四合一夕四才
一　北郷持分
　三萬七千三百卅壱石四斗三舛四合二夕八才
二口
　合八萬弐千七拾七石八斗四舛八合四夕二才

已上

慶長三年三月廿二日

394

「御文庫四拾八番箱　義久公巻　中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶以薩隅諸縣之番衆中、各辛勞之由申とをり、御心
得被成候而可給候、ことに三原諸右衞門尉度々あい
らしく音信申候、祝着ニ候よし可被仰聞候、於爰元
御用共候ハヽ、不差置可承候、以上、
兩使被差越候、竹内兵部少輔事者此度渡海仕候間、此者
へ彼是申含候、委可被聞届候、兼又我等所持候刀相州國
廣所望之由承候、國元へ召置候間、即申下召寄候、餘々

くち入候之条、ときうへ仕なをし、今度進之候、御氣ニ入候ハヽ、可爲祝着候、并しりかい二懸進之候、次者宰相との于今在京、一段堅固候、可御心安候、猶巨細者使者可申候、恐〻謹言、

「朱カキ」
「慶長三年」三月廿八日　　龍伯（花押）

又八郎殿

395

『嶋津氏文書』

御軍役其外奉公方ニ付而、役人并當奉行之者、申付儀令難澁、或無沙汰、或由断氣任之族於在之者、則爲當役人、知行食上、事之子細有様ニ可申上、以其上相改、依科之輕重、其嘱可在之者也、

慶長三
卯月二日　　（義弘）（花押）

上井神五郎（重兼）とのへ

長壽軒（盛淳）

「正文三番箱三巻中ニ有リ、義弘ノ文字ナシ、御花押迄也」

「義弘公御譜中ニ在リ」

396

追而申入候、此外ニも何そ有合候ハヽ、御見次可有候、

一かたひら二ツ事、此内一ツハよく候するを、
一ぬのこ二ツ事、此内一ツハ裏表つむきたるへく候、二ツ共長くめし立候而、
一まハし手ぬくい事、
一去年拙者知行納方目録之事、
一てるまの事、

右之条〻、無油断調候て、可被遣候、以上、

四月六日　　隆重判

宿本ニまいる

大河平源太左衛門

かうらいゟ

蒲生

宿元ニまいる

397

「御文庫二番箱家久公八巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

諸城被籠玉薬、先日於固城寺澤殿御指圖御割符由候、藤堂佐渡固城へ被籠置員數在之付而、拙者手前之儀、隨其旨可相加旨、重而志摩殿承之条、只今又玉薬三萬放持せ申候、被成御請取、封儘可被置候、相違在之間敷候、最前弐万放之請取返進候条、前後一同之請取、此者可被下

候、先日御返候玉薬、此方請取不申候き、参着候哉、御手前玉薬澤山御用意付、先度御理之様子、旁丈夫之御嗜此中承、存知之通寺澤殿へも委細申入候、爰元御普請、來廿日時分大略相調、可令歸朝候、呉々御殘多存儀、幾千萬ニ候、猶期來音時候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長三年」卯月九日　長土（長曽我部）　元親（花押）

嶋又八様　人々御中

398

「宮之城上井金左衞門藏」

薩摩船拾端帆　船頭半左衞門

中乗八拾二人　加子十二人

てるま・かくせい三拾四人

合百廿九人令歸朝候間、無吳儀可有御通也、

慶長三年卯月九日　嶋津又八郎御判

船改御奉行中　参

399

「御文庫二番箱家久公八巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶以長土佐・中修理同前ニ可被下候、以上、態以使札申入候、然者今度被成　御朱印、御城御普請出來仕、其城主被請取上者、如此案文一札を取、可致歸朝之旨被仰出候、則長土佐・中修理も被申越由候間、右兩所へ被遣趣同前ニ、御一書可被懸御意候、拙者も明日其同浦江罷越、近々令歸朝間、此者ニ可被下候、右之御一札之儀、無心元思召候ハんかと、則　御朱印写持進入候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長三年」四月十五日　池田孫次郎　▒（花押）

又八郎様　参人々御中

400

「家久公御譜中」

「案文」

一留主居談合中、何篇無用捨、憲法ニ諸式可申付事、

一御公領之内、町濱ニ罷居候者、公役等有様ニ無緩可仕候事、

一船手へ役儀可申付儀、船奉行在所ニありなから申付る事、不可然候、船もとへ自身罷居、高麗へ渡海之船、無贔屓偏頗可入念事、

一鹿兒嶋衆中、如前々御普請等、無懈怠可罷出事、付自

然いたつらなる儀於有之者、爲役人堅可申付候、万一難澁之者あらは、可致言上事、
一代官衆談合中より可申付公役、無油断可入念事、
一濱市・帖佐・鹿兒嶋三方、何事も談合候て可申定事、

慶長三年
「朱カキ」「四月廿」

401

「義弘公御譜中」

慶長三年戊戌之夏五月、警衛朝鮮國泗川新寨之際、有所屬我之旗下之朝鮮人、朝鮮國節度使送自書傳令於彼等、其書記左、

402

「寫有之」

傳令晉州　卞元柳光文趙石宋千乞尹永守河達
朴崔有命令呂鄭秋命鄭得營鄭億明
魯内卩乞鄭守等

汝矣等、處有旨據無遺出來、亦再〻傳令、而傳之者來傳、爲手喻汝矣、徒視而不應、爲卧手喻一一未見回答、故又送傳令爲去手、今去黄允祥、言聽我國人書等、已無遣率來爲去、如中州有褒啓重賞爲事、是昆毋視尋常、火迫刄行爲手矣、若不出來、爲手喻良置、晉州及泗川等賊、幾許留屯、是如從實告目爲弥、汝等當永倉卒之間、勢不得已、陷於賊中、仍此衣食、姑留其居、爲手喻良置、無異於探肩穴、是沙餘良　天兵已爲大到、水陸並進、蕩掃之時、難兎玉石俱焚之速、是去等、近日達兩川、水所阻、時未兵、爲是昆汝等、先幾出來以保其身、豈不樂乎、汝等本非他國之人、實是我國之民、雖在彼陣、心實爲國、則賊之形止、多寡虚實、已詳細通示、若有可擊之勢、則汝等尽心内應、或夜擊、或襲攻、以成奇功、則汝等當受無窮之賞、是昆汝等誰畏而不出耶、道則目前與汝等、橐弓同郷知舊之情、萬無深推之理、是弥本州牧使、是喩良置、不連道令、是昆亦無詰究之端、千萬勿疑爲手矣、再〻如此申諭者、皆出於誠心、是沙餘良　天兵未到之前、斯速出來、由取今去人、一〻言聽、則可知其實、是弥汝等同心賊中、戰馬已十分周旋多數出來、則其功亦大、必蒙其賞爲深、天將欲先出汝等、然後刄事爲計、爲去等、此時不出、則終見死亡、是昆速爲身謀出來爲手矣、　天兵刄事時、則道亦必爲先鋒、雖見汝等之面目、何暇及救耶、汝等更審思之、與其遷延

來ル免ニ池魚之殃一、孰レ若レ早出保ヲ身耶、凡此賊中形勢、已ニ詳探出來、有ニ可レ爲之勢一、則天兵未レ到之前、道亦當與レ汝等合ル力、攻ニ陷賊陣一、則非徒有ヒ光ニ於道一、実是汝等皆受ニ功臣之職一、永傳後孫、是昆時哉時哉、不レ可レ先也、若天兵已到之後、則千萬軍中、何顯レ己功耶、如其不然、則火速出來、與レ我同レ事、汝等所レ知、賊中虚實、山川夷險、道路遠近、已詳細探報、天兵剋レ事之時、與レ汝等合レ勢先鋒、乘レ便指導、則道亦一以爲レ天將前称レ美、汝等之村勇、一以爲レ上ニ達明廷一、俾レ蒙レ重賞爲レ手事、是昆此皆眞實至當之言是喩、況弥金海居李石、奴去壬辰年投ニ入賊中一、賊中之事、已一〻告目爲レ集、以縁ニ由上達一、至ニ於守門一將除授之、則出來、即受レ褒賞如レ旧安居、爲レ去等如レ此事、汝等尚不レ聞耶、大概蔚山失ニ捕清正一之後、　天朝皇上大怒、決レ策親征、已駐ニ遼東一、令下十二諸國軍兵、三百餘萬、大到ニ于本道一、左右全羅上、忠清等道、千里游漫、山野震動、叱咤不レ喩、粮餉億萬、峙如ニ山積、是去等姑待レ草長、休レ軍養レ馬、爲レ有如乎、近來乘レ機剋レ事爲レ手矣、定三大將各率ニ百萬師上、分レ三道左右挾擊、赤地蕩滅勢如ニ雷電霹靂一無レ遺レ噍類、隻輪不レ返、是昆汝等亦未レ聞ニ如レ此天威一耶、道段一道、主將以レ萬、無下容ニ欺先信一之理上、爲レ昆賊中凡事、已一〻告目爲レ手矣、汝等出來之計、預ニ先奇州一、則領ニ入率來道一、以ニ各別帯率一、惟其所レ願、或爲レ軍官、或爲レ戰士、或爲レ牙兵、任レ意從レ事、期ニ於成功一爲レ手事、是昆到レ傳令、即時剋行毋ニ致レ迷悞者一、

「朱カキ」
「慶長三年」戊戌五月初七日

節度使判

403

「仝御譜中」

慶長三年、清正・秀元等諸將以蔚山城經營之不牢緊故、相共修造之、既終事矣、時行長等聞大明百万大兵大起、欲圍順天之風説皆曰、若受大兵之圍、則悔而何及矣、將去順天而保于釜山浦、加藤左馬助嘉明進出言曰、未見敵旗而去此、則武夫之玷辱也、諸將各可任其意、我必殘留於此而已、諸將亦不忍弃嘉明、評議多端事聞于蔚山、清正・秀元即遣僧惠瓊號安樂寺、于順天曰、去順天保釜山者先問　秀吉、而後可決之耶、行長・嘉明共可之、即馳价於秀吉白之、　秀吉怒曰、大明大軍來則來耳、而何可去城而畏避之乎、能相城地而固守之、雖拒大軍而可使無所憂也、是我嚮屢所告諭也、汝等何忘之乎、未聞明兵既在順

天近地、然則清正・行長・義弘・幸長・長政・鍋島信濃守勝茂・毛利壹岐守・筑紫上野介・久留目藤四郎等六万餘兵可守諸城、其餘秀秋・秀元・秀家及四國兵者先暫歸朝、而九月又可渡海矣、時五月也、

404

「正文在垂水邸」

爲端午之祝儀、帷子五之内生絹二到來、喜悦候也、

五月十一日　御墨印「家康公」

嶋津「忠仍、後相模守久信ト云」又四郎とのへ

「按、慶長三年戊戌正月、又四郎忠仍、初爲人質上洛、時年十四歳、蓋此時所賜御書也、後七年壬寅九月、九年申辰二月上洛、可考」

（本文書ハ編年ノ誤リナルベシ）

405

「朝鮮日々記」

一然處ニ、天下奉行ノ御下知ニテ、四國・中國衆ハ慶長三戊戌四月五日ハ、嶋津殿新城泗川ノ普請シテ、驕テ釜山之やうニ歸宅被成候、是も余陳ニハなき嶋津殿ノ覚へかと沙汰を申候、去程ニ辱条、漢南人數万騎付合ノ由、賣山ヨリ申來ル、其より椿条ニ被仰付ル、、足ル役ノ衆谷山二郎右衛門・勝目甚右衛門、舟人ノ召よせ境め也、打廻り油断ナキ様ニ被仰付候て椿条ニ歸り、寺山四郎左衛門殿ニ談合申、五百人ノ二俱ニシテ、俱シ取りニシテ、一番ノ主取入佐助八殿・川村七郎左衛門殿、クルス巣游泥ヨリ礼華諧無海ヲ二日カ程ニ打、

万ノ出合ニテ負々ナレハ、下知思様ニナクシテ、七郎左衛門きひしく被申候、諸人合点被成さる人多シテ、御下知ノ上ハとて、あしやるやう「本マヽ」ニシテ、大事成処ヲ後ト見モセす、二里程ノキタル後より五十程ニテノクヲ、無勢と見て懸クル程ニ、雨ハふる、鉄炮ノ火ハなし、色々ニシテ引ヲ、千計唐人半弓ニテ雨ふるやう射懸ル程ニ、馬ノ上ニテ箭ヲ二ツ三ツ七郎左衛門ニ射ツクルヲそはより見て、馬より落る処ヲ押ヨリテ打取なり、又奈良原大膳ニ箭ヲ射付ケ討んとスル処ヲ、八木少右衛門なと之相しらいにて候へとも、半弓ニて射詰め折角ノ処ヲ、寺山四郎左衛門殿内衆火ヲ才角シテ、鉄炮ヲ仕合打カクル程ニ、敵ツカス、主取りハ打セツ、手負ハ多シ引取ル也、此打廻りモ七郎左衛門也、若キ故ノ仕合ト人々沙汰ヲ申候、二番ノ主取りハ谷山二郎右衛門・勝目甚右衛門、是辱条口之打廻りノ仕合度々ヨリ候故、泗川ノ又小者舟テ町屋釜山浦ヨリ參り集マ

リノ者トモ、椿条ニ付賴ム由申候ヘハ、下々ニハ人衆過分ニ有やうニ聞々付、伊集院源二郎殿長崎名字ノ者ヲ主取ニシテ鉄炮六十丁、北郷作左衞門殿・高城衆中□川ト申人ヲ主取りニシテ鉄炮右同、公儀軍役ニ而ハ無之候へとも、家中ニいたつら者多ク、侘申候間遣申候、境目ニ而下知ニモ付カス氣任之者候ハヽ、椿条之兩人賴申候、其爲ニ主取一人ツヽ付候而、其レニ仰聞せ候ハヽ、後ニハ我〳〵承候而科ヲ可申候と、書狀ニテ承候、去程ニ打立前、椿城ニテ人數ヲ註シ兩人申様ハ、是ハ國中ノ打廻り、辱条ノ近く候ヘハ、見切遠見ニ念ン入レ、心ヲ一ツニシテ懸ケ引キヲ被成ルヽこそ御奉公ニモ成、何ツモ敵キ大衆參ると見レハ、鉄炮衆〳〵と申、心安キ時ハ道具ハ持す　るしとして、少ク得テヨリ後ニハ下知ニも付かす談合もせす、二三十人ツヽ、大事ノ堺目ヲはつすハ、人々ノ狩武者ノ故カト存知候、源二郎殿・作左衞門殿衆ハ、主取りノ有上心遣もなく、此人數ヲ二くミニして方〻を打廻ル由ヲ可申候へとも、下知ヲそむく間敷由人々被申候而、其より打込參るほとに、方角ハ破滿有念木先逢ヲ二日ニ打ル処ニ大川有り、其レヲ渡シ渡さしノ兵儀ヲシテ、キカダヲ組鉄炮の道具を乗せ、川中ニ三間程タケノタタさる処ヲ、川ニたつしタル者申不及、達せぬ人ハ水レンニ引レテ渡ル程ニ、六月廿八日之午尅ヨリ酉尅迄渡シ、其夜ハソコニ陳取、次日ノ明ホノニ打立テ備乱木ニ渡リ、其ヨリ大こ之原ニ打出テ見ルニ、ツマリニ山寺ノ有ルニ陳取り、次日ハ家陳ノ番、主取りノ始テ五六百程、其ノ余　野大藏主取りニして松ニ參処ニ、敵出るを見て引歸り待処ニ、□こ屋　山ヨリ漢南人大勢ニテ向陳ノ取、其内ヨリ馬乗三人參り、日本口ニテ　わうを申候、是を何カニと申ニ、釜山浦ヨリノ走リ者、一人伊勢ノ者、一人ハ嶋原ノ者、一人ハ毛利豊前守ノ者と申、此口ニハ二月より漢南衆數萬騎　程ニ、我〻ハ日本と申せハ、今ニハゆかしくテ、ケ様ニ申候、唐人ハ口ハ聞々シラス、心得ノ爲ニ申候、何ニとしてモ大軍ヨル程ナラハ、責崩シ申候、今日御ひうき被成、心得ノ爲と申候、扨テハ念比也、承事ニ而候、乍去漢南衆付合之由聞得、奥入りニ打立テ、釜山浦ゟ一手、椿条口ヨリ一手ニさたまり、是ハ先手ニ參候、手たてを被成ナラハ、今日責メ可有候道筋ヲ見ン爲ニ參候、明日ニも成ならハ、後者勢付合候ハヽ、漢南衆一人もノハシ申間敷候、先

ニ小西取次ヲ以テ無事ノ曖濟、関白殿ノ御朱印一昨日
參る由承候間、質ヲ取かはし披見申候ハヽ、即此人衆
も引申候、乍去今分ニ而ハ其ヨリ承候事合点不申候、
ケ様ニ儀ヲ永〻申候ヘハ、堺め　手立テヌルクシテ日
ヲ暮シ、懸引手敷候と申候、鉄放百丁程ニ而打懸候ヘ
ハ、衆タマリニ逃込申候、其より敵も味方も何タルコ
トモナシ、引退ク有者ノ申ニ、衆タマリニ鉄放百五六
十丁(ママ)拵シ懸リ射掛ルならば、敵も出足ノやうも見へ申
候と申者有りて、中取リニ二百程ヲキ、鉄炮六十丁程
ニて打懸ケ候ヘハ、馬ニ打乗〳〵責掛ル、味方ハ小勢
ナレハ中取リ迄シサリ、家陣ヨリ夫レヲ見テ味方ノ足
ヲ乱サヽル由、鉄炮三百丁ニ而射詰ル程ニ、敵モ手負
ハ多シ、菟や角やとスル処ヲ、陳ヨリ見キリ、高処ノ
道ヲ八百程ニテ、小登リヲ指シツレテ横入レニ切掛ル、
敵ハ足ウク、味方ハ強テ責掛ル、二手ニ分テ兩口ヨリ切
掛ル程ニ、漢南ハナヒキ立チタル勢ナレハ、足ヲゐスニ「本マヽ」
馬乗りニテアリ、大二ノ原ノ足キヽ、吉シ乗り逃ケ　去
レトモ目ニ立タル馬乗ヲ八騎打取り、一里程追詰メ手
ノ陣ニ引　前夜内ニ引ク談合ニテ候へ共、其夜ハ敵モ
味方モツカレテ手　ナシ、次ノ日ノ辰尅ニ打立テ□
々々トテ、大二ノ原ノ城ヲ一リ參る時、大軍ニテ追掛
ル、其先ニ六七十參るヲ、俄ニ兵儀もならす、しやう
やうハナシ、下シ(ヲト)伏セヲして、谷山二郎右衛門・椎野
大藏・寺山甚右衛門・原尾主水正・和泉少左衛門・勝
目甚右衛門・古江權介此衆談合ヲシテ、草ハフカシ見
ツクル事ハ有間敷候、遠見ハ原尾主水・谷山次郎右衛
門兩人ニ而被成候、右六人ハ伏シテノ主取リニテ、伏
シ草ノ中ヲ唐人十騎計乗り通ル程ニシテ待ツ処ヲ、向(ムカ)
左(サ)ノ衆中寺田大右衛門と云人、伏シなから伏シ草ノ口
ニ二三人入リタルヲ、鉄放ヲ一ツ打ツ、其ヨリ三人ハ
伏シ草ノ中ヲ馬ニテ乗ノヒ申候、余ハ後ノやうニ逃ル
程ニ、伏草もおこし追ツカクル、遠見ノ衆横ニ取切り
候へとも、馬勢ノ中ニテ懸立ラレテマシロウ処、原尾
主水ハソハノ馬ヨリ蹴散サレ、刀ヲ押マケさやも打折
折角ノ処、去とも谷山二郎右衛門ハ唐人一騎馬ノ上ヨ
リ切リ下シ、其レヲキヲイニシテ退ク、伏シテ八十三
人ノ中ニ取籠タラハ、大打ヲしやうする者ヲト云、寺
田大右衛門ノ臆シテむしやうニ成タルコトヲ沙汰シテ
行ニ、大二ヨリ都ノ間ノ大渡り出テ見ルニ、向ヱニハ
舟モ多クアリ、

406

「朝鮮日々記」

一戌四月中旬比欤与存候、敵方より龍海与申唐人、爲和平之使晋州之御番所へ參上仕候間、　御兩殿様晋州へ被成御越、右之使へ御逢被成御振舞共被下候、追付使罷歸候故、　御兩殿様茂如新城被遊御歸館候、其以後敵方ゟ又和平之儀致違變、急度大軍打出之由候間、晋州并猿羽見之番衆、皆々如新城被引入候、

一右之和平之使參上候ニ付、順天之小西攝津守殿江御内談之爲御使、鎌田藏人殿・敷根藤左衞門殿夜船ニ而順天江被爲越候処、順天与泗川之間ニ而船を瀨ニ乘上ケ、即時ニ乘返シ、藏人殿・藤左衞門殿死去被成候、加子・船頭并乘船等者無何事新城へ歸申候、

407

「征韓偉略」

一五月、先是我軍聞明發大兵將圍順天、行長等謂、大兵來圍恐難支、將去順天及蔚山而保於釜山、（蔚山據古簡雜纂、）加藤嘉明獨奮曰、未見敵旗而去非夫也、諸君各任其意、我行吾志、諸將不決事聞蔚山、秀元・清正相議遣使於順天曰、如聞諸將議去順天、予輩謂、嘉明之言似有理、馳使于名護屋取其進止乎、行長等言之秀吉、秀吉果大怒、不聽去順天、（註略ス、）且令曰、清正・行長・義弘・幸長・長政・鍋島勝茂・毛利勝信・筑紫廣澄・久留目秀包等六萬餘人分守諸城、秀秋・秀元・秀家及四國兵暫歸、而至九月再航海、

408

「全」

一三日、秀吉賞行長爲先鋒拔釜山功、賜劍馬、且曰、後日當加賜封邑、又以書稱嘉明議撤順天・蔚山之非、加賜三萬七千石、（註略ス、）宗義智不從去順天・蔚山之議、秀吉賜書賞焉、（宗氏家記、）義弘父子亦不從其儀、曰、但任先鋒意耳、（征韓錄、）

409

嶋津家御宝物ノ内

一御旗一流白

慶長三年戊戌五月　　藤原朝臣義久

410

「山崎郷松下甚五右衞門家藏」

薩州入來院藏野村領地目錄

慶長三五月十二日　　長壽　盛淳

「御文庫四拾八番箱義久公巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

松下甚五郎殿

猶〻貴所歸朝之儀ハ、治少老御心ヲそへられへキ由被仰候間、いかさまきと聞えへキかと存候、又平六さ父子なとハ、有方へ此前ヨリ神文共取かハし候と申候、殊にこのころハ茶之湯之弟子ニ成候て、入魂以之外ニ候、それよりモ其御分別可入候、いちゝ名字の衆なとハ、内〻のひいき候条、是又御用心可有候、又此比大和之國へ奇吳ナル者出來候、遠國はたうより參詣の者數ヲしらす候、參もの木之丸殿ニあらさる前ニ、名字・在所父子の數一〻ニ申候、ちとモちがハす候、妙不思儀と申候、くるいものハ多〻候、かやうニくるふごとくハなく、妙ナル事ハ前後めつら敷と人〻申候、はたち計ノ女房にて候、申ちらすハ　伊勢ノとりいだしと申候、見ハ不仕候、聞タル計にて候、大方玉もの前かと存候、又てうさの屋作ニ付、神木ヲおほくきられ候と申候、行末之儀笑止ニ存候、濱之市ニモ神木きらせ、門ヲたてタル由聞付候条、たゝりなとゝ候てよりハ、何事モ跡タルへく候、知識ノかいモ有間敷と存、かへ木ノ事共かたく申付候、殊更てうさハ大略神木までにて候、家門共ニたち候やうニ聞え候、是モ長壽之わざかと存候、武庫聞候てハ御きかゝりたるへく候、他言アルマシク候、又　治少老より東國馬とて、月毛・栗毛二疋あつかり候、其外方〻ヨリ馬數四五疋設候、此内ニモたゝ一通氣ニ入ノ御さ候、いつれも〳〵さしたる馬にて無之候、いたつら事無之書入候、此一札火中候へく候、又申候、本六右今度上洛仕候、此間治少御前あしく候とて、氣遣仕候キ、此度拙者分別にて申はらし候て、御前ニも罷出候、仕合よく候て、きのふ下向申候、柏原殿申わかれ候、鹿兒嶋にて別而めしつかハれ候ニ目出度候、

先度以自筆承条〻、令披見候、

一爰元今程珎儀無之候、其方無事之由相聞候、目出度候、

一此方へ召仕候者共すくなく候て事闕、御推量之外ニ候、殊更有方贔屓之ものまてにて候、毎事用心難義ニ候、阿多甚さか事、遲參之衆にて候、自是ハ善悪申ましく候、かのものは別義なき者にて候、それよりの分別として歸朝させられ候て、給候へかしと存事ニ候、他言

有ましく候、

一有方者去正月上洛にて候、別儀もなく候、たゝ毎朝茶之湯にて候、それにより朝ハ晩ニのそミ、今日ハ明日ニうつり、万事延引まてニ候へ共、我〻茶之湯不執心にて、口外勿躰なく存、見聞タル計候、此比ハ治少歸宅ニ付候て欤うすく候、又六千石之かくし知行之儀ニ付テ、柏原殿にて事之外しかられ候と申候、其身ハとかくうへさせられす候、かくされ候欤と存候、おかしく候、

一長壽か事、何事モ曖之儀うちまかせ、別而召仕ハれ候やうニ聞え候、御後悔之儀候する、笑止ニ存候、是又他言有間敷候、

一おくの氣合之事、此ころハ又こしけ出合候て、萬事やうしやうにて候、何共さま〳〵わつらい出合候、笑止ニ候、涯分祈念なと無油断候、然共ちと申上候、

一さいしやうとのハ、下之屋敷へわつらい候もの多〻候て、卯月初之ころより加屋のゝことく被越候て、いまた歸宅なく候、一身ハさかしく御入候、御心安かるへく候、

一種子左之事ハ、前〻使へくハしく申候と存候、其外条〻、使者へ委申候、又筆十つゐ（此内大坂筆一つゐ相加候）、墨五ちやう、此内種〻付アリ、此比打はやり候、今焼茶わん一ツ・なつめ一ツ袋アリ、たきもの香箱一ッ進之候、此一紙、則火中可有之候、恐〻謹言、

「朱カキ」
「慶長三年」五月廿日　　龍伯（花押）

又八郎殿

412

『嶋津氏文書』

一算用所へ用所無之仁、出入令停止候、縱雖爲代官、手前算用無之仁者、出入無用之事、

一從算用聞用所有之呼ニ遣候、路次遠近日時をかんかへ、成作病、或号他行遲參、又者日限於相違者、爲過怠千石之代官之高ニ付而、鳥目百疋可出之、千石より内代官も可順之、自然依人於令用捨者、四人之算用聞より、弐百疋可取之事、

一算用出入穿鑿之刻、不寄誰〻、物からかい仕、悪口在之候、縱爲理いふとも、代官可行曲事、然間算用聞申度儘ニ、存分ニて不相届儀在之者、任理之旨、此方へ可訴之事、

一於算用場、食一汁一菜并中酒一反之事、

一萬物奉行相定上者、諸事奉行可隨下知、若違背之輩急度可及曲事之事、

右条々於違犯輩者、四人之爲算用聞可申上、若於見隠者、誓紙之上ニ候条、四人可行曲事者也、仍如件、

慶長三年
五月廿二日　　竜伯（花押）
　　治部少（花押）

「御文庫二番箱中」「義久公御譜中正文在巻本トアリ」

於上方之覚

一従薩广上候米、大坂にて請取奉行可被相定之事、

一右之奉行手前より八木相拂時ハ、算用聞之切手を取可拂候、切手も不取拂候者、算用ニ立間敷事、

付俵ハ二重たハらニ仕候て可上候間、たハら一えのふんハたくわへ可置候、ゆいなわ同前之事、

一大坂にて八木金銀に相拂刻者、算用聞より奉行を遣し、八木之たちね可相定之事、

一八木相拂候金銀、義久かたへ直ニ可上候、如定荷を可付、封切候時同前之事、

一呉服方萬買物之儀、算用聞ヨリ能せんさくいたし、銀子之儀義久へ可申理之事、付作事かた同前之事、

一攝津・播广知行方、免目錄之帳、毎年十一月中ニ可請取事、

一攝播之免目錄之帳上候者、村々物成無相違候哉、百姓前を可相尋事、

一口米ハ壱石ニ付弐升、あけおろしの出目も弐升可在之事、

一扶持方舛相定、幸侃判形可在之事、

臺所方入用之覚

一飯米方日々入用書付之帳、次ノ月頭ニ遂算用、切手を可出事、

一塩噌炭薪油、旧冬如相改たるへく候事、

一少遣方之儀も、右同前之事、

一上方算用聞四人聞定趣、十二ヶ月を四度ニ、三ヶ月限ニ可聞、小拂帳目錄ニ仕立相添、縦拙者隙入不見届候共、直目之上者如此仕立、何時も見可申との時、無相違可上候、たとへ者正月より三月迄之算用にて、四ヶ度ニ候へ共、一ヶ月おいくり候ハねハ、あとの算用きゝかれ間敷候間、極月之算用ハ明正月ニ聞立、次二月迄之算用結そへ可上、閏月も其可爲算用事、

右如此相定候を、何かと候て、帳目錄不作立置候者、誓紙之上言無沙汰爲過怠、各知行之物成五分一を可召上者也、仍如件、

慶長三年
五月廿二日　　竜伯(花押)
　　治部少(花押)

本田与左衛門尉(公親)とのへ
新納孫右衛門尉(義久)とのへ
河上三河守(忠智)入道とのへ
河上左近將監(久國)とのへ

「御文庫二番箱義弘公三巻中」「義弘公御譜中正文有之トアリ」

幸便之条令啓上候、歸朝之剋者、色々得貴意、快悦至極候、

一我等三人事、去二日ニ御目見仕、翌日於朝鮮去年以來之儀、御尋被成候条、具申上候、

一蔚山へ唐人取懸ニ付而、後巻之次第、唐人越河、少々山ニ雖乗揚候、蜂須賀阿波守・黒田甲斐守其日之先手之當番ニ乍有、合戦不仕趣申上候処ニ、瘧病者之由御諚被成、御逆鱗不大形候、

一御手先(ママ)之城共可引入由、各言上仕候儀、言語道断曲事ニ思召旨、　御諚被成候、私通申上候者、不聞召以前ゟ嶋津・小西・對馬守三人之城引入、御爲ニ可成族三人之城主、私躰方へも度々ニ書狀を越申候へ共、不受御諚、爲下御城引入儀不及覚悟趣、三人之城主も返事仕候ニ付而、其以後各失手言上爲仕儀候、即此書狀談合衆并早主・竹源・毛利民書狀ニて御座候とて、懸御目候処、猶以御逆鱗被成、三人之城主共同心不仕儀丈夫ニ思召、事之外　御感被成候、阿波守・甲斐守儀者後巻之合戦を不仕、瘧病者と思召候ニ、剰御先手之城可引入興行人、旁以取分對阿波守曲事ニ思召候、只今進退可被取消儀候へ共、永被加御思案之間、追而様子被仰出迄者可致在國候、甲斐守是も後巻之合戦をへり、瘧病者、殊主居城之所さへ不見定、不顧諸卒之苦労、無詮城共仕捨候儀、曲事不淺雖思召候、先被加御思案之条、進物之儀者不及申、御注進等之一通も進上不可仕候、様子追而可被仰出候、次早川主馬頭・竹中源介・毛利民部太輔事、爲御目付之身相加惣談、御城可引入族、城主方へ遣書狀、同御目付之間へも遣書狀儀、第一之曲者と思召間、召寄御成敗有度雖思召候、是も

御思案被成候間者豊後ニ可有之候、右之様子、彼者共方へ奉行三人彈正相加、可申遣旨被仰出候、

一最前者、筑後・筑前石治へ可被下と被仰出候つるが、石治関東ゟ被罷上候て被仰聞候ハ、右之國可有御扶助と思召候へ共、左候へは金目ニ思召、沢山ニ可被爲置別人無之候、但御國被下度思召候ても、明所無之候へハ、今迄之躰候間、兩國之明候社幸ニて候間、可致拜領かと御たつね被成候、治少被申上様者、　御諚承候へは、拜領仕同前候間、如今迄江州ニ有之而御奉公申度由候、於其分者、不相替沢山ニ有之而、彼兩國御代官可仕　御諚候、至于一兩日中、名嶋へ可被罷下由候、一兩三人事、前後之様子被聞召届、爲御褒美、於豊後新地致拜領候、於仕合者可御心易候、兼又來年御人數被相渡、赤國之筋都河迄働被仰付、蔚山のかたへ打入候様ニとの御有増候、羽左太・石治・増右爲大將被相渡、我等躰も如去年可罷渡旨　御諚候、其外御働之様子、色々　御諚之通候へ共、來年之儀ニ候へは、又様子も可相替候間、先大形右之通候、猶日本之様子追々可申述候、恐惶謹言、

福右馬（福原）

「朱カキ」
「慶長三年ヵ」五月廿六日　　長堯（花押）
垣和泉（垣見）　一直（花押）
熊内藏（熊谷）（花押）

羽兵庫殿
嶋又八郎殿　人々御中

〃

「上カキ」
羽兵庫様　垣泉
嶋又八様　福右
人々御中　熊藏

415

「義弘公御譜中」

慶長三年六月、秀元・秀家等發朝鮮赴伏見謁　秀吉、秀吉察其軍忠之淺深、且審聽其救蔚山之遲滯與欲去順天城之甲乙、難責之而不許謁見、其後召秀元而勞其軍功、又賜感書于加藤嘉明、以褒連年之武功、

416

「下野守久元譜中」

自文祿元年至慶長三年、　義弘主親子在陣朝鮮國、老父

忠長及兄忠倍亦渡楫、以在其國而勞軍務矣、故慶長三年戊戌六月、忠在亦渡于朝鮮、于時十八歳也、同年之季冬、與諸軍偕所以解纜歸朝也、

417

「義久公御譜中」

「正文在之」

しつくいぬり候者、唐人・日本仁共當國ニ在之由候間、早〻申付可差上候、不可有油断候、猶淺野彈正少弼・増田右衞門尉可申候也、

「朱カキ」「慶長三年」六月十六日 ◯「大閤朱印」

嶋津修理大夫(義久)とのへ

418

「義久公御譜中」「御文庫三番箱中ニ在リ」

「正文有之」

ことし慶長三かへりの林鐘廿三日、大中庵主の年廻の追膳の心さしを、東福寺龍吟庵にていさゝかいとなミけり、尊靈和歌に執心淺からさりしをおもひ出て、はかなしことをつゝりて、影前に手向奉るものならし、

法印龍伯

夕たちの雲はきゆともはちす葉に名殘をのこせ玉ゆらの露

419

「御文庫拾七番箱十三巻中」「家久公御譜中ニ在リ納仲左衞門忠雄トアリ」正文在加治木衆新

京都ニて礼物進上候覚

又八様御上洛之時罷上ニ付而之遣方

一銀子三佰廿壱匁但七枚、此外ひた弐貫、　治少様

一銀子廿目但ひた二貫ノ代、　杢頭殿

一銀子五拾四匁但巻物一ッノ代、　幽齋老

一銀子三拾目但ひた三貫代、　民部卿法印

一銀子弐百六拾八匁但六枚、此外ひた一貫、　安宅三郎兵衞殿

一銀子四拾三匁但壱枚、　宗安

一銀子百拾八匁但二枚、此外ひた三貫弐百、　京之宿 頼堅

一銀子百五拾九匁但三枚、此外ひた三貫、　田邊屋又左衞門尉

合壱貫拾三匁、此内八佰目取替分、

慶長三年六月廿五日ニ返弁相濟申候、

一銀子五枚但弐百拾五匁、　三成様

一銀子弐枚但八十六匁、　一鉄炮二丁、此内一ッハ拾匁すあひ代銀三拾目、一ッハ五匁すあひ代銀廿目、弐丁共ニ種子嶋、

柏原彦右衞門尉殿

一銀子壱枚但四拾三匁、　一鉄炮壱丁代銀拾五匁

一銀子壱枚但四拾三匁、
一鳥目弐貫文代銀六匁八分
一御太刀一腰代銀弐匁　一鳥目五貫文代銀拾六匁五分

御家門様

一鳥目弐貫文代銀六匁六分　伊勢郷庵
一鳥目弐貫文代銀六匁六分　道三少二殿
一鳥目弐貫文代銀六匁六分　道正宗虎
一鳥目壱貫文代銀三匁三分　同休甫
一帷弐ッ　代銀十壱匁五分　本阿弥光順
一帷二ッ　代銀十壱匁五分　正阿弥彦十郎殿
一帷二ッ　代銀十一匁五分　後藤徳乗
一鳥目弐貫文代銀六匁六分　大森宗巴
一鳥目三貫文代銀九匁九分　きくや宗可
一鳥目壱貫文代銀三匁三分　井筒屋宗通
一鳥目壱貫文代銀三匁三分　蒔繪屋紹知
一鳥目壱貫文代銀三匁三分　藥屋久徳
一鳥目壱貫文代銀三匁三分　清都寺
一鳥目二貫文代銀六匁六分　澁谷与吉殿
一鳥目二貫文代銀六匁六分　篠屋宗兵衛尉殿

八十嶋助左衛門尉殿

宗庵
大岩新介殿

一鳥目壱貫文代銀三匁三分　新四郎殿
一鳥目一貫文代銀三匁三分　了齋
一鳥目一貫文代銀三匁三分　目藥屋彦二郎殿
一鳥目一貫文代銀三匁四分　志方源兵衛尉殿
一鳥目一貫文代銀三匁四分　同名七郎右衛門尉殿
一鳥目一貫文代銀三匁四分　金川宗立
一鳥目一貫文代銀三匁四分　きし邊屋次郎右衛門殿
一鳥目拾貫文代銀卅三匁　徳岡宗与
一鳥目拾貫文代銀卅三匁　田邊屋又左衛門尉殿

合銀子六佰六拾七匁三分

礼物預候覚

一らうそく百丁　一房しりかい十通　柏原彦右衛門尉殿
一たつな拾通　八十嶋助左衛門尉殿
一帷二ッ・樽一ッもろはく　大森宗巴
一かたひら二ッ　きくや宗可
一かたひら二ッ　郷庵老ゟ
一扇拾本

振舞之覚

一振舞三度　道正宗虎
一振舞二度　同休甫
一振舞壱度　澁谷与吉殿
一振舞壱度　船木惣兵衛尉殿
一振舞壱度　久徳（くすりや）
一振舞壱度　宗通（いつゝや）
一振舞壱度　紹知（まきあや）
一振舞壱度　清都寺
一振舞壱度　宗可（きくや）
一振舞壱度　新四郎
一振舞壱度　了齋
以上

慶長三年
六月廿四日　長壽（花押）

420

「國分宮内沢氏文書」

正宮御假殿貫之切符之事

一貫長さ壱丈四尺、廣四寸、あつさ弐寸、かす三十五丁、
一加屋板長さ六尺五寸、厚さ六分、廣壱尺、數百廿まい、
此内廿枚ハ長さ八尺五寸、
一大床長さ九尺、口五寸、數三ッ、
以上

慶長三年六月廿七日　大工大夫（花押）

421

『本田氏文書』

御物

請取申銀子之事

合而四枚也、但石治少様肥前國へ御下向ニ付、早打差上せ候時之祝物也、
以上

慶長三
六月廿五日　本田六右衛門（正親）判
古後七郎右衛門殿　参

422

「御譜雑抄」

一慶長三年六月、秀元・秀家等發朝鮮赴伏見謁秀吉、

423

「仝」

一朝鮮ニテ斬ル処ノ首級ノ重キヲ以テノ故、劓之（ハナキリ）、刵之（ミミキリ）

而遣于京師、秀吉大喜賞之、其後鼻耳ヲ秀吉公并セテ埋之于洛畔大佛殿邊、號耳塚、其後朝鮮人來貢之時、到塚下誦祭文而吊之、哭泣曰、此輩是輪死報國者也、

424

「仝」

一慶長三年八月十八日、前　關白大政大臣從一位豊臣秀吉薨於伏見城、享年六十三、葬於洛東南邊阿弥陀峯、

425

『川上氏文書』

加増

一作　川上次郎左衞門尉

薩州隈城西手村之内知行方目錄

一　浮免

中田四畝廿四歩（やしきの前）　六斗七舛貳合　白坂周防入道先　市允

上田四畝廿歩（南古川）　七斗四舛六合六夕　同先かほ山　市助

中田壱反廿四歩（山本）　壱石五斗壱升貳合　同先かち　番左衞門尉

中田五畝廿六歩（すけむた）　八斗貳升　同先木場ノ門ノ内　主計助

田方弐反六畦四歩

分米三石七斗五升六夕

上畠九畝拾歩（柿木原）　壱石一斗四升四合　白坂周防入道先　市佑

中畠四畝廿二歩（せと山）　四斗六升六合七夕　同先　三郎四郎

下畠八畝壱歩（はら添一反壱畝六歩内）　六斗四升弐合六夕六才（入來院下添田村之内）　宗的先　彦右衞門尉

畠方弐反二畝壱歩

大豆弐石二斗五升六合六才

都合田畠四段八畝五歩

分米大豆六石六合六夕六才

已上

慶長三年六月吉日　◯（墨印）　上井神五郎里兼

川上次郎左衞門尉殿

（表紙）

義久公
義弘公　慶長三年自七月至十月
家久公

後編　舊記雜錄　巻四十二

426

「古御文書二番箱中」

敬白天罰靈社上巻起請文事

謹請散供、再拜々々、夫惟年号慶長三年戊戌歳、月並者十二箇月、日數者三百五十餘箇日、撰吉日良辰而、致信心請白、大施主等謹奉勸請、掛忝上者梵天帝釋四大天王豹尾　黄幡　歳徳　釋迦善逝　釋提桓因　奉宿劫、四天八天　十二天　二十大天　三十三天　十二神將　七千夜叉（文）　廿八部第六天魔王　聖主　天地之卅六禽（會）　百億須弥百億梵天帝釋　百億鐵圍山　百億閻魔法王　諸天　百億天衆　百億天人　百億天女　百億童子　百億大力夜叉百億悪鬼　百億天上　百億閻浮提中所顯現之大小神祇、上者有頂天、下者到金輪際佛神、皆悉驚白言、堅牢地神八海所接龍王龍衆　十王十躰俱生神　太山府君　司命司祿　冥官冥衆　有情無情　辰星　南斗　北斗星　日曜星破軍星　羅睺星　計都星　巨文星　明星　七夕星　八葉星　本命星　四方四佛　五方五佛　大聖摩利支尊天　太白神　太歳神　八諸神　十二月將神　天葬神　地葬神阿豆知神　天神　地神　海神　木神　火神　金神　水神風神　諸佛諸菩薩　諸善神　東方隆三世明王　南方軍荼利夜叉明王　西方大威徳夜叉明王　北方金剛夜叉明王中央不動明王　大黒尊天　毘沙門天王　大弁財天女　宇賀神　十五童子　三寶荒神　多婆羅天王　武答天神　頗梨采女　蛇毒氣神王　八王子　八万四千六百五十餘神金剛界七百餘尊　胎藏界五百餘尊　金剛藏王　晃蛇帝主大聖金剛童子　普天率土愛染明王　妙見菩薩　過去現在未來三世諸佛　一万八千軍神　二万八千軍神　三万八千軍神　四万八千軍（「本マヽ」）　五万八千軍神　六万八千軍神　七万八千軍神　八万八千軍神　九万八千軍神　十万八千軍神二千八百帥天童子　一万灯明佛　二万灯明佛　三万灯明佛　藥師如來　寶生如來　無量壽佛　微妙身如來　文殊

普賢　觀音　勢至　十六善神　八万四千夜叉神、忝日域
崇廟天照皇太神宮四十末社　内宮　外宮　風宮　諸末社
八幡大菩薩　春日大明神　王城鎮守山王廿一社　根本中
堂本尊　立塔諸堂諸坊之諸本尊薩埵　祇園牛頭天王　松
尾大明神　平野大明神　吉田　立田　熱田大明神　大原(野)
(脱)大明神　稲荷大明神　賀茂下上大明神　貴布祢大明神
北野天滿天神　三輪大明神　住吉大明神　卅番神　愛岩
四所大權現　熊野三所大權現　十二所權現　九十九所權
現　廣田大明神　金峯山權現　吉備宮大明神　對馬天王
羽黒山大權現　葛城大權現　峯々藏王權現　子守勝手大
明神　栂(梅)宮大明神　法花廿八品　三藏法師　鞍馬毘沙門
天　吉祥天女　雨寶童子　関東守護神伊豆箱根兩所權現
三嶋大明神　鹿嶋大明神　富士大權現　白山妙理權現
立山大菩薩　諏方上下大明神　出雲大社大明神　多賀大
明神　御靈八所大明神、殊者氏神、捻者大日本國中六十
六箇國大社、二千小社、五百九十二所大小祇(下上)神等、地藏
菩薩　陁羅尼菩薩　龍樹菩薩　虚空藏菩薩　栴檀香菩薩
大病神　八万四千鬼神　大恩神　歳破神　天蘇神　大疫
神　大歳神　夜氣夜叉神　妙鬼神　六百五十餘神　金山
六十万鬼神　刀八毘沙門天王　父天狗太郎房眷属　九億
四万三千四百九十餘神　善貳師童子　八所大明神　善害
坊　次郎坊　八万四千眷属　飯縄大明神　四十四万一千
眷属　大天魔三万三千　小天狗三万三千眷属　智羅天狗
十二八天狗等、日域中山々峯々嶽々所居住之大天狗　小
天狗等、各作群集而正路之旨照鑑給ヱ、若偽心於在之、
立所受白癩黒癩之重病、八万四千毛吼、四十二之骨節、
日々夜々苦病無止、深厚蒙御罰、弓矢冥加未盡、佛神三
寶雖作祈願、不可叶、於後世者、墮八寒八熱阿鼻無間大
地獄、到未來永劫不可有浮期者也、仍靈社上巻起請文如
件、

慶長三年戊戌七月二日　　三位法印
(前田利家)
加賀大納言殿　　龍伯
(徳川家康)
江戸内苻様

427

「正文在本田助之丞」

高麗御見次長壽調分

かり請取

一銀子五百目但ふんじのまゝ弐包、

一長櫃壱合但御振舞道具種々入、これもふんじのまゝ、

以上

慶長三年　七月四日　　白坂助七郎(花押)

河上益右衛門尉(花押)

本田助丞殿

冨山清右衛門尉殿参

428

「御文庫二番箱義弘公四巻中」「義弘公御譜中ニ在リ」

以上

大閤様御霍乱氣ニ御座候て、此程被成御不食候故、御仕置被　仰付候間、定而其元事々敷可申扱候、何たる雑説申候共、丈夫ニ御覚悟尤候、然者御無事之儀、先度加藤主計於手前可被取扱旨、内々得御諚申入候、其筋目にて相濟候ハ尤候、若相滞候者、各一同ニ被相談、御無事可被相調事肝要候、猶跡ゟ慥之仁可被差越候間、可被得其意候、恐々謹言、

「朱カキ」「慶長三年」七月八日　　増右

長盛(花押)

淺彈

長政(花押)

徳善

玄以(花押)

嶋津兵庫(義弘)頭殿

御陣所「御譜ハ御宿所トアリ」

429

「御文庫四拾八番箱義久公巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶々馬之事、厩立なとハ一たんしつかに候、我等ハ
また乗候而み不申候、源兵衛尉・平七なとへのせ申
候ハたゝおとり候計にて、あゆミあしハ無御坐候、
遠路ハまた乗候てみ申さす候、小路にてハおとりと
をし候、はやミちハ一圓こさなく候、われら所好ニ
ハ不入馬にて候、將又高麗之曖之儀、さしよるへき
由申ちらし候、舟之事由断有へからす候、國元へも
此等之趣かたく申下候、以上、

幸便之条染筆候、仍　大閤様御氣相咲止候、是ニ付可入
御分別候、由断有間敷候、兼又　龍山様より皆河山城守
と哉らん申候者之進上申候御馬、栗毛年七歳と申候、爪
よく一段之こたへ馬之由、口能被仰候而、拙者へ被下候、
然共道も小路も踊候て計あゆミ候ほとに、老躰難成存候、
返進可申欤と存候へ共、いまた召置候、自然ケ様之馬望
に思召候者、飼置可進候、馬形ハみたてなく候、大かた
悪方つよかるへく候、然とも遠路なと一疋ニ而もこたへ、

爪いたますのれ候する馬にて候、大切にて候とて被下候、望におほしめし候者御返事可承候、御望無御坐候ハヽ、其分可承候、とかく御返事まてハ可拘置候、萬吉、恐〻謹言、

「朱カキ」
「慶長三年」七月九日　　龍伯（花押）

（家久）
又八郎殿

「御文庫拾七番箱十三巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

此御小者參候ニ御狀具令披見候、

一治少様より軍衆之儀ニ付、　龍伯様へ兩度被仰候儀、本源右衞門尉方可被申分候条、互ニ不可有御疑心事、

一去年　御出張之軍役之儀、三拾石ニ一人つゝの物數之定、かとくしまにおゐて　武庫様以　御意、三十石ニ一人宛之物數被仰定候、爰許ニハ存間敷由、今度御書面ニ見得申候、定而其分たるへく候条、不及申候、乍去御國元ニ被仰下候儀者、　龍伯様より本田与左殿を以被仰下候、其後以旅庵被仰下候、兩度共ニ御意趣ハ治少様被仰出候茂、百石ニ付人かず三人宛たるへく候、右之物數首尾仕候様にと被仰候、万一百石ニ付三人之談合ニてハ、物數不足之儀茂有へく候条、百石ニ三人宛之物數に候へ者、拾石餘り申候、其十石を三百石より拔被出候へ者三拾石ニて候、これを徒ニなさせられ候てハいかゝのやう候、三拾石ニ一人宛之談合可然由、龍伯様以御分別國元へ被仰下候、此儀者　公儀ニ不知事ニ候、今以不入儀候へとも申事候、具之儀者与左衞門尉殿・旅庵御存之儀候条不及是非候、此儀者かこしま・帖佐・冨之限三方之御留守居衆、各同前ニ爲承儀候条、後日其隱有ましく候事、

一去月拾日比より　上様御氣相出合候へ共、頃被成御快氣無御別儀候、萬一其表ニハ事〻敷可申儀茂有へく候、御心遣入ましく候事、

一其表之様子此比爰許ニ申散候ハ、北目之城共ニ切〻唐人出候而、手強候やうニ申散候、乍去さつま衆御番所ニハ、至而唐人近より候ハぬよし申散候、先〻目出候、頃者御左右無之候之条、萬〻無御心許存候、幸便之時者御傳書奉待候事、

一爰元下〻申散候者、其表和平之御曖最中之由申候、又一説ニ者無理ニ可被引執せ由爲定共申候、　治少様筑前へ御下にて候条、御留守之儀ニて一圓　公儀之儀共不相知候、右兩条於必定者、其元へ可相知候条、不及

申候、とかく船無之候てハ、御引陳ニて候共、可爲咲止候条、追々御國許へ者申下候、御分國中ニ有合候船ハ、一艘茂不殘可被差渡由、追々申下候、定而從御方茂其御注進たるへきと存候事、

一今度　又八様呉服之儀被仰越候、則雖可申付候、御國元より上米曽而無之候、三口より少々上り候も、　大閤様御藏米去毛依不罷上、いつれの御藏米ニて候共、さつまよりの上米ニて候者、御藏米ニなづけられ、可被指出之由、　治少様被仰候て、大坂藏ニ被入置、苻を被付せ候て被召置候条、こなたの御用ニ不罷立候、然間何を申候て茂徒事候、只今成共　大閤様御藏米上着候者、少つゝの御自用者可罷成候、是非共御國元へ被仰越、　大閤様御藏米去毛之儀、不殘罷上候様ニと可被仰越候、左様ニ候者、此中の上御藏米ニて御きる物も可相調候、今分ニ候てハ一圓不罷成候、乍去只今茂上米候者、次第ニ調へく候、　又八様御藏米于今然々不罷登候、咲止迄候、右之趣宜預御取合候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長三年」七月九日　　伊右入　幸侃（花押）

圖書頭殿
御報

431

「御文庫拾七番箱十四巻中」
（本文書ハ二五八号文書ト同文ニノキ省略）

432

「御文庫二番箱義弘公四巻中」「義弘公御譜中ニ在リ」

態可申入處、毛利壱岐早船被相越候条、則令啓候、

一先書ニ如申入候、　上様御霍乱氣ニ御座候つれ共、盛法印御藥にて被成御快氣候、昨今ハ尚以一段と　御驗氣ニ候、不可有御氣遣候、

一先書ニも如申入候、御無事之儀、加主手筋にて相濟候へハ尤候、若不相調候者、小攝何も御在番中一同ニ被仰談、相調候様ニ御才覚尤候、

一上様御煩定而下々事々敷申成、雑説なと申候てハと存、態可申入と存候刻、此早船相越候条、則令啓候、土用明候てより日々御驗氣ニ御座候条、少も御氣遣有間敷候、猶追々可申承候、長大・越州御檢地ニ逗留候、石治少九州へ被相越候間、爲兩三人申入候、恐々謹言、

「朱カキ」「慶長三年」七月十五日　　増右　長盛（花押）

淺彈
長政（花押）
徳善
玄以（花押）

嶋津兵庫頭殿
御陣所

433

『嶋津家文書』

覺

一奉對　秀頼様御奉公之儀、　太閤様御同前、不可存疎略候事、付表裏別心毛頭存間敷事、

一御法度御置目之儀、今迄如被仰付、弥々不可相背事、

一公義御爲存上者、對傍輩私之遺恨を企、不可及存分事、

一傍輩中不可立其徒黨、公事篇喧嘩口論儀自然雖有之、親子兄弟奏者知音たり共、曽て贔屓を不存、如御法度可致覚悟事、

一御暇之儀不申上、爲私下國仕ましき事、

右條々若於相背者、忝靈社起請文之御罰深重ニ可罷蒙者也、

慶長三年七月十五日　三位法印　龍伯御在判

加賀大納言殿（前田利家）

434

「御文庫二番箱（義弘公三巻中）」「義弘公御譜中正文有之トアリ」

江戸内苻様（徳川家康）

態申入候、　上様御煩透と被成御快氣候間、不可有御氣遣候、今度之御煩、土用之時分柄にて、各氣遣仕候間、其元へも下々取々可申扱候間、定而無御心元候ハんと存、態申入候、即以　御朱印被仰出候、猶追々可申入候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長三年欠」
七月十七日

増右
長盛（花押）
石治
三成（花押）
淺彈
長政（花押）
徳善
玄以（花押）

435

「宮之城相良權之丞藏」

薩摩船四枚帆
中乘七人

薩广侍從殿
人々御中

船頭大左衞門尉

加子四人
朝鮮之者貳人
合而拾四人令歸朝候、無吴儀可有御通候、
慶長三年七月十七日　　嶋津又八郎御判
船改御奉行中
参

436
「御文庫廿二番箱八巻中」
芳翰之趣具披覧、殊更護國寺快雄座主・大里大屋子上洛之儀、尤專要〻〻、抑　大閤様去夏以降御不例故、四聰不分明、因茲右之旨趣不能言上、諶笑止之到無是非、雖然石田礼部被遂對談、御進物等到愚宿預置、使節者先以彼命歸國早、蓋隨當邦通信、追而可被勤御礼儀、莅其期者弥無猒却、一廉可被備方物事可爲肝要、猶委曲兩使可有演説者也、將又珎酒一壺・蚕綿二十把・太平布五十端預懇志之段、欣悦不斜、從是茂乍輕少何〻進献之、聊補祝詞而已、不宣恐惶、
「義久公御譜中左之通朱カキアリ」
「慶長三年七月之時分欤
琉球國中山王」

437
「義弘公御譜中」
頃年朝鮮在陣諸將報進其斬獲之數、或人以其首級之重、故劓之耶之而遣于京師、　秀吉大喜賞之、自此之後諸將皆效之、不可勝計也、其獻軍實于　秀吉、必曰鼻若干耳若干、　秀吉并埋之于洛畔大佛殿邊號耳塚、（ハナキリ　ミミキリ）（其後朝鮮人來貢之時、到塚下誦祭文、而弔之哭泣曰、此輩是輸死報國者也、）
慶長三年戊戌孟秋、警衛朝鮮國泗川新寨之際、大明國大軍救來、而爲四分逼於海陸、大將麻貴東慶尚道之向蔚山、當加藤主計頭清正、董一元慶尚道之向望津・泗川、將迫義弘父子、劉綎西全羅道之向順天、當小西攝津守行長、陳璘主水、丁此之時、典吏龍涯與友理贈一封謀書於義弘父子、記左、

438
諭劄
天朝宣諭倭將。尓今侵害朝鮮。棲身於叢林峻嶺。晝夜勞苦。食用不敷。且尓家中。田地都邑。蕩然盡奪。子女又爲所質。而夫妻子母。經年不得一面歡聚。苦不可言。
我今
天朝兵馬多來。水陸夾攻。進無生門。退無歸路。不知何時休息。終必死亡而後已。我知尓等。皆出於威勢所逼。

恐尓内變。陷尓等於死地。不若乗我天兵來攻。放尓一條生路。揚帆渡海。免受刑戮。歸亦有名。豈非明哲見機之上策。故特差役。使尓等知之。如欲休兵息戰。保身保家。可差的當通事來講。如不聽宣諭。或有他圖別議。亦速回報。我有天兵百萬在此。何難於征勦。但念尓無辜。今雖出没擄掠。實出於勢不得已。非其本心。故不忍加誅。特此諭之。

□（朱書）

「此二字朱カキ也」

萬曆貳拾陸年柒月廿五日典吏龍涯與友理書

劉一兄

（本文書ノ句点ハ朱書ナリ）

439

「義弘公御譜中」

慶長三年七月劉綎屯于水原欲攻順天、綎謂、誘行長而執之、卽遣吳宗道于順天曰、前年行長專好和議、故事將成矣、以清正邪謀故、　秀吉大怒、又起兵革、大明軍兵遠來于朝鮮、暴師既有日矣、望鄕之思常介于心、日本諸將亦如此而已、窮兵黷武之警戒、豈可不思之乎、我與行長相逢復修前盟而班師、則兩國之慶在此耳、行長初疑之、宗道辭辨尤懇、且劉綎單騎馳出而迎行長、於此行長迷焉約地而定會期、時劉綎陣中有日本人、卽來于順天、以綎謀告行長、行長大驚不與綎相會、依是綎亦空歸、監軍陳效責綎以其謀拙而易泄也、綎深愧之、

440

「左衞門督歳久譜中」

「正文在小根占玄了　慶長三年也」

心岳良空七廻にあたれり、追膳のために一首をつらね、影前に手向奉る、

法印龍伯

うつし繪に写し置てもたましゐハ

かへらぬ道や夢のうきはし

441

「御文庫二番箱義弘公四巻中」「義弘公御譜中ニ在リ」

尚以不及申候へ共、右之通御分別賴申候、以上、

今朝以使者申入候、只今亥ノ刻罷歸候、申入様子從攝州も未被申入由候、拙者事ハ　御朱印之旨も　治少得御意續、其上名護屋以來別而得貴意辻候間、不殘心底申入候ッ、無申及候へ共、何方ヨリも無御入魂間、爲拙者申入候儀、勿論無御他言様ニ尤候、又順天へも大明人相動候刻、志广なとも依時宜可罷越様□被申候儀も、拙者申

入候通何れへも無御口外様頼入存候、攝州へも右之様子被仰入事御無用候、雖不及申候、諸事無御隔心申入事候間、申談候通相もれ候ハぬ様ニ可預御分別候、恐惶、

「朱カキ」「慶長三年」七月廿八日　羽左近（親成カ）□（花押）

羽兵様
嶋又八様　人々御中

442

「御文庫二番箱（義弘二巻中）」「義弘公御譜中正文有之トアリ」

態申入候、今度大事ニ御霍乱御煩被成候、各氣遣可仕と被思食、被成御快氣之旨　御朱印被成遣候、今日申刻、至釜山浦參申候条、則持進之候、從上方之御使、當城留置候条、御請被相調、此者ニ可給候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長三年歟」八月七日　寺志广正成（花押）

薩广侍從殿　人々御中

443

「義久公御譜中」「御文庫三番箱中ニ在リ」

「正文有之」

大佛油蠣唐人儀、國役被成御免除候之条、可得其意候、猶以居屋敷等令扶助、別而懸目、堪忍仕候様ニ可申付候也、

「朱カキ」（天正十七年）「慶長三年」八月九日　◯「御朱印」

嶋津修理大夫入道とのへ

444

「義久公御譜中」「御文庫三番箱中ニアリ」

「正文在泊津蓮慶坊」

大佛油蠣早速造立之段、神妙思食候、然者御員物之儀雖被仰付、猶以爲御褒美、國役被成御免除候、并居屋敷被加御扶助候、可得其意候也、

八月九日　◯「大閤朱印」

陳哥

445

「正文在泊津善四郎」

大仏油蠣早速造立之段、神妙思食候、然者御員物儀雖被仰付候、尚以爲御褒美、國役被成御免除、并居屋敷等被加御扶助候之条、可得其意候也、

八月九日　◯「御朱印」

「本マヽ」茜六

446

「正文有之」

今度油囊之儀、唐人被召上成就、一段御氣色珎重候、被成御朱印候、猶相心得可申上旨候、恐惶謹言、

八月十九日　　大藏卿法印宗久（花押）

嶋津修理大夫入道殿　参人々御中

447

「御文庫二番箱義弘公四巻中」「義弘公御譜中ニ在リ」

御使札拜見申候、如仰　大閤様御本服之旨、德善院・増右・淺彈ゟ書狀、以後被成　御朱印候条、則持進之候、定參着可申候、將又最前書物持給候人、自身晋州まて被來候付、小攝へ被仰遣候由尤候、様子被聞届候者可被申越候条、趣承届候て、尚可申談候、恐々謹言、

「朱カキ」「慶長三年」　八月十一日　　寺志广　正成（花押）

「御譜中ニアリ」　薩广侍從殿

嶋津又八郎殿　御報

448

「義久公御譜中」

慶長三年、　關白豊臣秀吉公罹病痾漸將向危急之際、令江戸内大臣家康卿掌天下之成敗、而爲幼君秀頼主輔佐矣、時人有言曰、宛如周公之冢宰然、未知得社稷榮於後來、如泰山安於今日乎、　殿下疾病、請貴僧高僧於南山北嶺、禱爾于上下神祇、招諸醫師於四方、未有怠于藥餌針灸、然而共以不驗、同年八月十八日薨、葬于東山也、依　秀吉薨御、天下哀痛之際、諸侯僉以在于畿内、龍伯亦同在洛者也、

449

「義弘公御譜中」

慶長三年八月、麻貴率頗貴・牛伯英等、陣于温井向蔚山、然依清正在城恐、而不敢攻之、清正亦不出城、故兩軍相持、

島津兵庫頭義弘・同又八郎忠恒（後改家久）、率一万兵、築泗川近邊之諸壘、而固守焉、以新築爲居城、新築之爲地也、三面者海也、一面者陸也、望津・永春（サルハミ）・古館（フルクハン）泗川古館也、三城聳于其前、鎭海（チンハイ）・固城（コセン）兩城乞（ゴツクリ）于其右、昆陽一城隔江在于其左、構倉廩于東陽、而多蓄粮粟、又置鋭兵於泗川、古館也、而後屢義弘帥師剽掠陜川（ハウナン）・宜寧（クリヨン）・咸陽・高靈等郡邑也、

慶長三年八月十八日、前　關白大政大臣從一位豊臣秀吉

薨於伏見城、享年六十三、遺言曰、我卽世、則先姑秘之、淺野長政・石田三成速赴筑紫、使朝鮮在陣諸將悉歸本朝、退兵而可也、若其退兵之不容易、則　得川殿及利家其深謀遠慮、而莫使十万軍兵爲外土之枯骨也、日本兵在朝鮮者十餘万人、故云然、言畢而瞑、　葬於洛東南邊阿彌陀峯、藏甲冑兵器于棺中、木食興山上人監經始之事、築墓其巔構祠其麓、廟社旣築寄附烟戸、而後以卜部某後號萩原、爲神主、其外禰宜等皆有焉、其後於妙法院每　秀吉之月忌、必聚諸宗僧徒而設齊(齋)、天台・眞言・禪律・淨土・法華・一向・時宗等也、以聖護院門跡道澄爲大佛殿住持、改院號曰照高、淺野長政・石田三成・增田長盛等各斷髮、國俗承主恩者、遭其喪剃髮、後長其髮、

450

『嶋津家文書』

敬白　天罰靈社上巻起請文前書之事

一朝鮮表御無事之儀、加藤主計頭手筋ニて可相濟欤、小西攝津守手筋ニて可相濟欤、兩人申分承届、何之道にも日本之御爲可然手筋ニて相究候樣に可申渡候、聊以依怙贔屓なく、双方へ申届、兩人内、自然私曲之被申分候者、可達上聞候、各迄も見隱不聞隱、歸朝之刻可申達候事、

一何れも在番之頭々談合之刻、御爲をも不被存、抜懸之存分被申族於在之者、有樣に可申上候事、

一於此方被仰聞趣、朝鮮在番衆中へ是又有樣に可申渡候事、

右条々、若私曲僞在之者、忝も此起請文御罰深厚可罷蒙者也、仍前書如件、

慶長三年八月廿二日　　徳永法印(寿昌)
宮木長次郎(豊盛)

「此一通、御文庫二番箱義弘三巻中ニ有リ」

「此一通、正文御文庫二番箱義弘公巻中ニあり」

「義弘公御譜中ニ在リ」

451

『全』「此一通前同断写あり」

(本文書ハ四六三号文書ト同文ニノキ省略ス)

「義弘公御譜中ニ在リ」

452

『全』

(本文書ハ四六二号文書ト同文ニツキ省略ス)

「義弘公御譜中ニ在リ」

453

「寫」

御無事一着之間、釜山浦在番之事、

一組　加藤主計頭（清正）
鍋嶋加賀守（直茂）
毛利壱岐守（吉成）
柳川侍従（立花親成）
高橋主膳（直次）

牢人衆定番

一組　小西摂津守（行長）
嶋津兵庫頭（義弘）
黒田甲斐守（長政）

牢人衆定番

以上、右番替、但一番之様子口上、

對馬豊崎在番　久留目侍従（小早川秀包）
筑紫上野介（廣門）
寺澤志广守（正成）人數貳百

一城〻何れも釜山浦へ於引取者、置兵粮・玉薬・鉄炮以下、釜山浦へ相届、藏を立可入置事、

番手ニ不相構歸朝衆
伊東民部太輔（祐兵）
秋月三郎（種長）
高橋九郎（元種）
嶋津又七郎（豊久）
相良宮内太輔（頼房）

此五人、諸人より打詰候間、歸朝仕、可致御目見候也、

慶長三年八月廿五日　御朱印在

454

『仝』

其表爲見廻、徳永式部卿法印・宮木長次兩人被差遣候、長〻在番辛労之至候、仍道服袷被遣之候、猶奉行衆・年寄共方より可申候也、

「慶長三年」八月廿五日　◯「御朱印」
羽柴薩摩侍従（義弘）とのへ

455

『仝』

（本文書ハ四五六号文書ト同文ニツキ省略ス）

「以上數通、義弘公御譜中ニ在リ」

456

「又七郎豊久譜中」

「正文在島津安藝守久雄」

其表爲見廻、徳永式部卿法印・宮木長次両人被指遣候、長〻在番之事苦労之至候、仍道服袷被遣之候、猶奉行衆・年寄共方より可申候也、

「朱カキ」
「慶長三年」八月廿五日　◯「御朱印」

嶋津又七郎とのへ

457

「義弘公御譜中」

「寫」

御無事一着之間、釜山浦在番之事、

一組　小西攝津守
　　嶋津兵庫頭
　　牢人衆定番
　　加藤主計頭
一組　毛利壱岐守
　　同一手之衆
　　柳川侍從
　　高橋主膳
　　牢人衆定番
一組　黒田甲斐守
　　鍋嶋加賀守
　　牢人衆定番

以上、右番替、但一番之様子口上、

一城〻何れも釜山浦へ於引取者、置兵粮・玉薬・鉄炮以下釜山浦へ相届、藏を立可入置事、

一對馬豊崎在番　久留目侍從
　　筑紫上野介
　　寺澤志广守人數弐百人

以上

慶長參年八月廿五日　御朱印在

458

「御文庫二番箱義弘公三巻中」「義弘公御譜中ニ在リ」

其表爲御見廻、徳永法印・宮木長次方被指遣候、就其御無事之儀、最前より被仰出候ニ付て、只今猶以様子被仰含被遣候、各相談之上を以、一着候様ニ御分別尤存候、於様子ハ、両人口上ニ被相含、其上覚書を以被相越候、將亦　上様御煩此一両日弥被成御快氣候、可御心安候、恐〻謹言、

「朱カキ」
「慶長三年」八月廿五日　　増右　長盛（花押）

459

「家久公御譜中」

「正文在巻本」

嶋津兵庫頭殿
人〻御中

其表爲見廻、徳永式部卿法印・宮木長次兩人被指越候、長〻在番辛労之至候、仍道服袷被遣之候、猶奉行衆・年寄共かたより可申候也、

「朱カキ」「慶長三年」八月廿五日 ◯「御朱印」

嶋津又八郎とのへ

460

右八月廿五日朱印　御内書、後聞非眞、其故末記之也、慶長三年戊戌八月十八日、　前關白大政大臣從一位豊臣秀吉薨於伏見城、享年六十三、遺言曰、我即世、則先姑秘之、淺野長政・石田三成速赴筑紫、使朝鮮在陣諸將悉歸本朝、退兵而可也、若其退兵之不容易、則得川殿及利家、其深謀遠慮、而莫使十万軍兵爲外土之枯骨也、（日本兵在）朝鮮者十餘万人、故云然、言畢而瞑、（ナヒシ）由是謀焉、又五奉行之書亦有不眞者、以之察焉、

461

「御文庫二番箱家久公三巻中」「家久公御譜中ニ在リ」「正文在巻本トアリ」

其表爲御見廻、徳永式部卿法印・宮木長次被差遣候、并御道服・御袷被爲拜領候、長〻御在番御苦労、不及是非候、仍　大閤様御煩弥被成御快氣候間、可御心安候、猶右兩人可被申候、恐〻謹言、

「朱カキ」「慶長三年」八月廿五日

長大
正家（花押）
増右
長盛（花押）
石治少
三成（花押）
淺彈少
長政（花押）
徳善
玄以（花押）

嶋津又八郎殿
御陣所

462

「御文庫二番箱義弘公三巻中」

内儀之覚

一王子出候ハヽ、諸城不殘可引取事、

一御調物ニ究候者、朝鮮官人一所務之間、對馬迄可渡置候付てハ、是又諸城可引取事、

一右官人相越候儀不成候者、一所務之間、釜山浦一城可殘置候事、
右之外、慥之究於在之者、其扱人之覚悟ニて、可被相究之候也、

八月廿五日　長大　正家　石治　三成　増右　長盛　淺彈　長政　徳善　玄以

徳永式部卿(寿昌)法印
宮木長次(豊盛)殿

463

「御文庫二番箱義弘公三巻中」

進公覚

一八木　一虎皮
一豹皮　一藥種
一清蚕　一王子之事

以上

八月廿五日　長大　正家　石治　三成　増右　長盛　淺彈　長政　徳善　玄以

徳永式部卿法印
宮木長次殿

464

「御文庫四拾八番箱義久公巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚以爰元判形之善悪を能見知仁候之間、貴所之判を見せ申候へは、よき御判にて候と保(褒)美申候、目出度候、以上、

其後者無音所存之外ニ候、其元之様子爲可承、態用使書候、殊更此初秋之比者、義弘御煩氣出合候由其聞得候、無心元存事に候、此節者定可爲御快氣存候、猶以委曲之儀者彼者口柄被聞召、萬端御納得之儀可爲肝要候、恐々謹言、

「朱かき」
「慶長三年」八月廿八日　竜伯(花押)

又八郎殿

465

『嶋津氏文書』

（本文書ハ一〇五号文書ト同文ニツキ省略ス）

466

「御文庫二番箱中　義弘公・家久公七通之中」「義弘公御譜中ニ在リ」

以上

態以飛脚令申候、

一御無事之儀、最前加藤主計手前ニて可仕之旨、被　仰出候、雖然加主手前難調ニ付てハ、何之手前ニて成共、可被相濟之旨候条、急度相調候様ニ御才覚肝要候、不可有由断候事、

一御無事之様子、朝鮮王子相越候へハ尤候、不相越候共、御調物にて可被相究候、日本御外聞迄候間、御調物多少之段者不入事候間、各相談候て、可然様ニ可被相究候事、

一冬中ニ此方へ被得　御意儀もはか行間敷候間、不及御伺、可被相濟候、御無事と被　仰出候上者、御調物にても、王子にても、如相調可被相究候事、

一各迎舟之儀、　大閤様被仰付候新艘百艘、其外諸浦之舟弐百艘、都合三百艘追々被差遣候事、

一内府・輝元・秀家至于轉(博)多下向候而、各歸朝之儀可申付之由候処、人數不入之由被申止候間、先遠慮候、然間安藝宰相・淺野彈正少弼・石田治部少輔兩三人被遣之候、其方様子ニより渡海候て成共、可被相談之旨候、猶追々可令申候、恐々謹言、

「朱カキ」「慶長三年」九月五日　　輝元（花押）

秀家（花押）

利家（花押）

家康（花押）

羽柴兵庫頭殿

同又八郎殿

467

『嶋津氏文書』

（本文書ハ四六六号文書ト同文ニツキ省略ス）

468

「家久公御譜中」

「正文在島津安藝守久雄」

猶々武庫御煩之様子、天山々々、無御心元存候、御養生專一候、

遙久不能書信御床敷候、抑其表永々御在陳御苦労無是非候、然者此刻悉歸朝之由候間、早々可懸御目与令祝着候、

諸事相積事共可申承候、扨者武庫御煩之由、龍伯より承候、千萬〻〻、無御心元候、永〻敷在陳故、御草臥故与存候、定此節ハ可爲御本服候、目出度、軈而御歸朝候而、相積事共可申承候、馬鷹多御所持之由候、御羨敷候、猶諸事期面謁候、恐〻謹言、

「朱カキ」
「慶長三年」九月五日　（前久）（花押）

又八郎殿　竜山

469

「御文庫拾七番箱十三巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

乍恐申上候、仍　義弘様去夏以來御所労氣ニ御座候哉、若殿様被入御精、諸方之佛神江御祝願御申、殊醫者從方〻被召寄、御療治等之儀も無御油断之由、八月晦日帖佐ゟ早打上洛候而、爰元衆上下初而承心遣深重候、則從龍伯様伊勢太神宮江御名代御參候、多賀大社江御代參、愛宕山江御馬御拜進候、其外御誠精之御祈念様〻ニ御座候、從　宰相様も愛宕山・多賀大社等へ御小袖御進献候、大佛之　照門様・泊瀬之中性院へも御祈念之儀御頼候、宰相様御供衆中も相應之御祈禱被仕候、然處今月五日山田弥九郎爲御使歸朝候而、御氣相之様子共具令承知、尚以　照門様へ御祈念之儀、御頼御申之由承、公私感入申候、勿論　御門跡様御祈禱之儀、被成御領掌、去六日御護摩御開闢候之条、千秋万歳候、又御者を友賢ニとらせ申候ニも御當所能御座候之由申候条、今度之御冠落、早速可爲御平愈と申事ニ候、先〻爰元様子爲可申上、早打差返申候、如　御門跡様、御祈念御成就之御護札等持申候而、使者進上可申候、兼又其地御開陳之時分ニ候、毎事堅固可被仰付候、數年被成御軍労、無吳儀御歸朝御名誉申上も愚ニ候、佳事追〻可申上候、此等之趣可然之様可預御披露候、恐〻謹言、

「朱かき」
「慶長三年欠」九月九日　川上三河入道肱枕（花押）

伊勢弥九郎（貞昌）殿

470

「御文庫四拾八番箱義久公巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

以上

七月廿五日之御書面并山田弥九郎口上、具承候、先以義弘煩氣出合之由承驚入候、就夫　照門様御祈念成就、千秋万歳候、伊勢・御多賀へも代僧差上祈禱申候、定可爲

快氣候、兼又其表度々之勝利、目出度候、石治少老十月二日ニ此地打立なされ候間、急度其元之御曖相濟可爲歸朝候、船彼是油断有ましく候、歸帆候者、直ニ可爲歸國之由、治少老ゟ被仰候、畢竟父子之御談合肝要ニ候、將又宰相殿爰元之逗留不入儀候間、暇之儀可申存、御仕合等相計候へ共、難成候て于今延引候、乍去急度御侘可申覚悟候、猶期後喜之時候、恐々謹言、

「朱かき」「慶長三年」九月十三日　　龍伯（花押）

又八郎殿

471

「御文庫二番箱義弘公三巻中」

（本文書ハ三〇四号文書ト同文ニツキ省略ス）

472

「御文庫拾七番箱十四巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

猶々御煩之儀、其後如何御座候哉、御養性專用ニ奉存計候、爰元之様子者萬相聞可申候間、具ニ不申上候、

以山田弥九郎預尊書忝拜見仕候、其表無吴儀被仰付由弥重奉存候、先々　武庫様御煩由被仰聞、無御心元奉存候、就其　照門様へ御祈念之儀被仰入候、則一七日被遊護广、別而被成御祈念御札・御守、只今被參候、御本服之段、安中ニ奉存候、銀子七枚被成御進上候、則御使へ御對面之刻、披露仕候、種々御斟酌候へ共、達而申上候、其元皆々御引陣ニ相定申由、近比目出度存候、御歸朝之刻、爲御迎龍越可申入候、此旨能々可被仰入候、恐々謹言、

「朱カキ」「慶長三年」九月十四日　　友枕齋如貴（花押）

伊勢弥九郎殿

473

「家久公御譜中」

「正文在島津安藝守久雄」

七月廿四日之芳染、當月六日相達、具披閲欣然之至候、長々其表御在陣之處、無事弥重候、定漸可爲御歸朝候間、猶以目出候、將又武庫聊御煩敷故、御祈禱之儀承候、無御心許存計候、依之即從六日令始行結願候間、巻數守札撫物等進之候、弥不可存疎意候、又御自分之御祈禱之守札同前候、可有御頂戴候、委曲從友枕齋可有演説候間、令省略候、穴賢々々、

「朱カキ」「慶長三年」九月十四日　　（花押）

嶋津又八郎殿

474

「上包」
嶋津又八郎殿　　如雪

「家久公御譜中」
「正文在島津安藝守久雄」

追而申候、入峯之儀承候、内〻其覚悟候之處、當所堂供養之儀付而、可令延引之由仰候故、無其儀候、峯中御祈禱之儀者具申付候、供養も八月廿二日令成就候、他事追而可得芳意候、かしこ、

「朱カキ」「慶長三年欠」九月十四日　　（花押）

嶋津又八郎殿

475

嶋津又八郎殿　　如雪

「御文三番箱義弘公三巻中」
（本文書ハ三一二号文書ト同文ニツキ省略ス）

476

「御文庫四拾八番箱義久公巻中」「家久公御譜中ニ御自筆トアリ」

猶申候、大峯之先達か遣書ニ、此方へ越られ候、義弘氣合之由聞れ候て、當年ノ護摩一段仕合よく候ほとに、やかて可爲平愈と被申候、目出度候、又先度治少へ參候時、其方父子共ニすくニ先國元のやうニ歸朝モ申上候する、こなたの分別次第と被仰候、武庫へ談合なされ、そこもと仕合よきやうに、御分別干要候、又さいしやうとの御いとまの事ハ、幸侃にて申上候へハ、拙者へ御面談にて御談合可有之と被仰候、いかさまきと聞えへく候、

追而申候、爰元之儀一段之静謐ニ候、奇特不思儀なる金言妙句ヲ仰をかれ、御置目きひしく候条、少シモ無御心元事有間敷候、

一熊野うら・豊後うらへハ一揆とも出候由申候つれ共、させる事無之やうニ聞候、

一度〻如申候、上もし御藏入八木七千石可爲上着ヲ、今月今日まて七百石ならてのほらさる由相聞え候、さて〳〵甚五郎何とて是ほと油断いたし候欠、笑止千万、曲事共中〳〵可申やう無之候、治もし事外ノ悪心にて候、今度筑前ニて歸朝之折節對面共候ハヽ、定而かやうの儀可出合候、兼而其覚悟肝要ニ候、武庫へ直ニ申度候へ共、氣合あしき時分いかゝと存令遠慮、貴所まて令申候、機嫌ヲはからい御申可有之候、

一さがら新右衛門尉御奉公之儀被仰付候、比上洛仕候、

目出度候、三番替之つもりの事、是ハ此節龍下候者、又あまり永つめ仕候者、かやうなる所ニ用舍可有之候間、此方にて取かへ可申候、彼是何様歸朝之節、くハしく御談合可申候、万吉、恐々謹言、

「朱カキ」
「慶長三年」九月拾六日　　竜伯（花押）

477

又八郎殿　　龍伯

「御文庫四拾八番箱中」「義久公御譜中正文有之トアリ」

「ロ切ル」
廻昨日人を遣候へハ、番船依をしもとり申候、彼者申候ハ、順天へハてつほう萬事なり申よし申候、番船も次第ニ此方之やうに參候由、晋州境之敵も今朝古館あたりの道筋見申躰候、明日可相働由申候間、定可懸來候哉、相待申事□

去月廿八日之尊書今月廿一日到來、具令拜見候、被仰聞条々、慥承届候、先々其元御無事之由、目出度奉存候、仍長壽今度神文之儀、此方へも長壽所より案文共遣候て、神文仕たる様子申候つる間、さりとてハ不届儀、曲事甚重之旨深々申遣候、然者惣別御家中□（之儀カ）、下々別而申合、神文なと可取替儀可爲停止与、御法度可被仰出候哉、於此儀者、新被仰出にか□座候、御代々被□度ニ候、別而御奉公可仕由、被申たる仁なと候つれ共、菟角傍輩中申組儀ハ無御所好由候て、被仰留たる儀共御座候、如此無余儀就御奉公申上候をさへ無御同心候間、其外之儀ニおゐてハ不及是非候、御意之旨又八郎へも談合申候、早々被仰出尤候、將又御条書中ニ御藏米依不調、從治少上井甚五郎被召上之由、いかゝ相濟可申候哉、氣遣ニ存候、いつれも御条書之御返事細々雖可申上候、番船間ちかく參候間、一刻も早々此船出船させ申候条、追而可申上候、恐惶敬白、

九月廿二日　　兵庫頭
「宛キレテナシ」　　義弘（花押）

478

「義弘公御譜中」

忠恒主之旗下有寺山四郎左衞門尉久兼者、警衞于望津營、茲歳季夏下旬之比、大明・朝鮮軍衆漸漸進來、隔一大江屯晋州城、久兼能有敵兵之窺知衆寡強弱、而孟秋之上旬、使輕鋭士潜經山路伏河畔、會炎氣之難堪、殆迄午時敵之

人馬待入河水去炎熱之佳期、久兼吹貝各同時發鐵炮、殺人馬爲河流者不可勝言、又燒火於山谷、俾敵人多兵之疑充滿乎山中、其外諸般運奇謀送數月者也、

大明中路大將董一元自星州經高靈、九月十九日、陸晋州來陣焉、然而憚義弘之驍勇且其城壘之緊密、而不欲攻之、

479

「御文庫二番箱（義弘公二巻中）」「義弘公御譜中ニ在リ」

以上

態以使者申入候、隨而順天面へ唐人相働候由其聞候、無御心元候、此面へも去廿一日ニ、人數七八万罷出候、雖然及數度討果候之故、城際ニ陳取候事不成、廿町程引退、對陳候行と相見候、此外替儀も無御座候間、御機遣有間敷候、其面之様子具ニ可示預候、委曲口上ニ申含候条、不能詳候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長三年」九月廿七日　加主計清正（花押）

羽兵庫殿

嶋又八殿　御陣所

480

「家久公御譜中」

慶長三年九月、董一元在晋州、屢運謀策欲攻新寨、時茅國器兵士見一女出新寨、卽以捕之、其女出片楮以示之、其詞曰、此婦將度異域、吾憐而贖之放還故土、天兵弗害、末曰、知吾姓者令公之後埋兒之父、問吾名者有或之口無才之按、卽攜其女而行、茅國器見之贊畫而不解焉、有諸葛繡者、解曰、此郭國安也、以語參謀史世用、世用躍然曰、郭國安華人也、往與共在日本、誓自効（イタサント）於天朝、今在于此而欲使我兵破新寨乎、卽使朝鮮商賈三人持史世用之牘往望津而逢國安、且約曰、今月二十日、可燒望津營中之粮粟、其時渡河而進攻耳、約期既定矣、茅國器率兵涉河、日本兵出拒之、時望津城火、日本兵先歸救火、國器乘勝攻入望津而放火、麻貴亦遣兵破永春壘（ナルヘミ）、守兵等皆退而入于新寨矣、故明兵得駐江南焉、

董一元使茅國科持金帛、到新寨説義弘以和親之事、郭國安亦贊其畫（ハカリコト）、然義弘遂不從、不受金帛而還之、由是決一戰矣、

舊館（泗川古壘）、壘者遠義弘（ナル）・忠恒居城新寨者一里餘程、俾川上六郎兵衞尉忠實（故島津修右衞門彰久之臣也）、爲警衞將、且代入諸士於其壘、共三百餘兵也、然而明兵屯近地者衆多、若來攻責則思難支、予之父子謂守將曰、以九月廿八日達士卒於退

入新寨之旨、守兵等亦隨父子之言、丁欲退去之時、曉天董一元聚兵將襲泗川、驍將李寧恃勇先衆而進到城下、城兵擊殺之、由是後軍明兵辟易、遅明董一元率大軍來攻泗川、城兵恐其被圍騎歩三百許出城奮戰、驍將盧得功忽中鳥銃而斃、城兵乘勝、然一元軍兵既攻入城中而揚火、故不得拒而城兵敗、於茲乎相良玄番・勝目兵右衞門以下殆百五十人許遂戰死、其餘向新寨逃去、忠實殿焉、大明多兵追忠實欲屠殺、而飛雨箭者宛如降雨、以故忠實所受甲冑之矢凡三十六、雖然不怠其殿全師退去、此敗未知新寨之前、鳥丸六右衞門尉只一人持鐵炮出新寨、欲得禽類充俊鷹之飼、及窺度山野之時、不計大明大軍競前見欲討殺忠實之大變、則竄路頭藪下、而向將屠殺忠實之魁將發鐵炮、其將中鉛丸落馬前、押川六兵衞尉忽然進其場、突入于衆敵中切得其首、而二人共歸入新寨、在新寨之兵士五六百騎、將往援泗川、義弘固留之曰、弃泗川兵雖不忍之、然大軍乘勢若逼新寨、則我軍大敗乎、各守其營而勿敢出焉、伊勢兵部少輔貞昌單騎躍馬、而進會泗川兵之退來、忠實亦幸而免死相共入新寨矣、既而明兵燒東陽之糧庫、進圍新寨密也、忠恒曰、欲擊走于明兵、　義弘公叱曰、不知敵兵之多少、則必勿挑戰矣、且不開城門、不樹旌旗、不發羽箭鐵炮、宛如無人、少焉日已將晡、慮時之不是也、明兵徒以退去、忠恒以下恨不與一元相戰者甚多矣、

481

「御文庫二番箱家久公八巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

夜前其表敵差寄候通預御注進候、無御心元存、自是も申入候之処ニ、只〻御注進之趣先以引取之由候、殊大明人數多被討取之由、御粉骨故早〻引退候哉と存候、御吉左右追〻奉待候、此方少も相替儀無之候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長三年」　九月廿八日　羽左近　親成（花押）

嶋又八様　御報

482

「家久公御譜中」

九月廿九日、明兵一騎進持榜木者於馬前、敵鉦疾前來于新寨城門外、殆去三四町許樹置榜木、即歸去矣、使顯娃主水・白濵七助到其地取榜木、其文曰、明日十月朔旦可攻新寨、預諭其故於寨將、其勿徬徨云云、

483

「御文庫四拾八番箱義久公巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

長〻御辛労之儀無申計候、仍其表急度可爲引陳候、萬〻

目出存候、就其石田殿筑前表へ下向ニ而候、何事も彼方へ被得御意候而肝要候、然者貴所之事直ニ歸國させられ候するも可然候、兎角治少老之御在地まて被差越、彼御下知次第分別尤ニ候、將亦圖書頭を始各辛労之由、寄々可被仰渡候、猶巨細武庫へ進候書面ニ申候間、先々閣筆候、恐々謹言、

「朱カキ」
「慶長三年」九月廿九日　　龍伯（花押）

又八郎殿

484

「義弘公御譜中」

慶長三年九月、董一元在晋州、屢運謀策欲攻新寨、一元躬往宣府募家丁、未至裨將茅國器請以身當和、日有斬獲、乃作檄諭之、以攜其黨、黨有離心、乃俟一元至、將致大擧、倭臨江固守、勢若長蛇、國器曰、觀其形勢以望津爲首、首碎則立破矣、然而晋江容易不可飛渡、只當以計得之而已、時國器兵士有邏騎者、忽得一婦自倭營來、懷中出一紙以示之、其詞曰、此婦將度異域、吾甚憐之、捐貲以贖之放還故土、本朝兵將恤其窮困勿加殺害、是則救蟻之德也、末曰、知吾姓者令公之後埋兒之父、問吾名者有或之口無才之按、即攜其女而行、茅國器見而不解之、有諸葛纛者、解之曰、此郭國安也、以語參謀史世用、世用躍然曰、郭國安華人也、以往與共在日本、誓致忠於本朝、今在倭營而欲使我兵破新寨乎、仍知義弘之在新寨主望津營者國安也、即使朝鮮商賈三人持史世用之牘往望津、而逢國安且約曰、九月二十日、可燒望津營中之粮粟、臨其時渡晋江而可進攻耳、約期既定矣、茅國器率兵涉河、日本兵出拒之、時望津城火、日本兵先歸救火、國器乘勝攻入望津、而放火遂大勝奪其營、城主衆兵退入於新寨、是日麻貴亦率多兵進襲破永春（サルヘミ）、焚其營壘積聚、營主歩卒退去、是亦入于新寨也、

九月廿一日、曉天西攻昆陽月下挑戰、日本兵士所斬馘（コクスル）雖頗多、而師之多寡不儔、故委昆陽去矣、三營既破、以故明兵得駐江南焉、

董一元使茅國科持金帛、到新寨説義弘以和親之事、郭國安亦贊其畫、然義弘遂不從、不受金帛而還之、由是決一戰矣、

舊館泗川古壘壘者遠義弘父子居城新寨者一里餘程、俾島津守右衞門彰久之臣川上六郎兵衞尉忠實爲警衞將、且代入諸士於其壘共三百餘兵也、然而明兵屯近地者衆多、若來攻、則思難支而義弘父子謂守將曰、以九月廿八日達士卒於退

入新寨之旨、守兵等隨父子之言將退去、時曉天董一元聚兵將襲泗川、驍將李寧恃勇先衆而進到城下、城兵擊殺之、由是大明後軍辟易、遲明董一元率大軍進攻泗川、城兵恐其被圍騎歩三百許出城奮戰、驍將慮得功忽中鳥銃而斃、城兵乘勝、然一元軍兵既攻入城中而揚火、故不得拒而城兵敗、相良玄番・勝目兵右衞門以下殆乎戰死百五十人計也、其餘向新寨逃去、忠實殿焉、大明多兵追忠實、欲屠殺飛羽箭者宛如降雨、以故忠實所受甲冑之矢凡三十六、雖然不怠其殿全師退去、此敗未知新寨之前、有鳥丸六右衞門尉者、自持鐵炮只一人、出新寨欲得禽類充俊鷹之飼、丁窺行山野之時、不計大明大軍競前見欲討殺忠實之大變、則竄路頭藪下、而向將討忠實之魁將發鐵炮、其將中鉛丸落馬前、押川六兵衞尉忽然進其場入衆敵中切得其首、而二人共歸入新寨、在新寨之兵士五六百騎、將往授(ママ)泗川、義弘固留之曰、弃泗川兵雖曰不忍之、然大軍乘勢若入新寨、則我軍大敗乎、各守其營而勿敢出焉、義弘之臣伊勢兵部少輔貞昌單騎躍馬、而進會泗川兵之退來、忠實亦幸而免死、相共入新寨矣、既而明兵燒東陽之糧庫進圍新寨、島津又八郎忠恒欲擊走于明兵、義弘叱曰、不知敵兵之多少、則必勿挑戰矣、且不開城門不樹旌旗、不發羽箭鐵炮、宛似無人、少焉天日傾西山慮時刻之不是也、明兵徒以退去也、忠恒主等恨不與一元相戰、

慶長三年九月廿九日、明將議取新寨、即義弘所居也、國器曰、倭雖敗而士尚衆(ヨヽン)、併歸大營、其守必力(ツトメン)、攻之不下而援兵四集往事可鑒、不若先攻固城、倭方挫未敢出救、固城拔則新寨援絶、此長策也、董一元狃(ナフンナ)于屢勝掀髯(クヅカシナ)曰、疾雷不掩耳、寨將不戰而下矣、

即日俾明兵一騎進持榜木者於馬前、敲鉦疾前來于新寨城門外、殆去三四町許樹置榜木即歸去矣、義弘遣顯娃主水・白濱七助到其地取榜木、其文曰、明日十月朔旦可攻新寨、預諭其故寨將、其勿徬徨云云、

485

『盛香集』

寺山四郎左衞門久兼高麗ニおひて漢南人數千萬寄來りし時、普州の川を隔て望津ニ出陣し、纔三百計の人數ニて勢の多少も敵ニ見せす、六月廿日比より對陣し、種〻計略して敵を度〻なやましける故、恐れて川を渡し、九月廿日の命ありて久兼望津の陣を拂、新齋ニまひて社敵川をわたしけると、古き文にも見得たり、此對陣の内ニ、久兼か家來神宮矢兵衞といふもの鉄炮の上手有、川を隔

てうつに、此神宮か鉄炮はかり外希にて、皆當なり、唐人大ひにおそれけるとなり、晋州の川は日州高岡の川程あるといへり云々、

「征韓偉略」

一慶長三年九月

廿三日、麻貴率頗貴・牛伯英等駐劄温井与蔚山、攻清正不克、遂鑒前失惟深溝高壘堅壁不出、遣使議和、爲緩兵計、平壌錄、二十三日及不克、二字、據古簡雜纂・長政書、義弘所筑(ママ)城號之泗川城、其列砦者四、永春・望津・晋州・故館、明人稱故館爲舊寨、征韓錄、望津之寨尤爲天險、北倚晋江、東築永春、西築昆陽、三寨鼎立爲椅角、皆峙于新寨之前、新寨三面環海、一面通陸義弘居之、董一元與茅國器進兵高靈・晋州、晋州前有大江、江之南爲望津、平壌錄、義弘兵寺山久兼率兵二百臨江固守、征韓錄、國器謂、我營自望津至新寨勢如長蛇、望津其首也、碎首其餘如破竹矣、一日茅兵出哨、見一婦自我營出、持一紙書以謎語記姓名、知明人郭國安者在我營、竊遣人約期日、令火望津營、二十日、國器發兵將渡江、我衆出營臨江、望津寨中如期火起、炎焰蔽天、茅兵乘勢渡遂陷望津二寨、一元遣兵襲破永春、二十一日、破昆陽、三營既破、明兵駐於江南矣、平壌錄、先是義弘令望津・永春・昆陽守寨兵皆退新寨、欲誘明兵令渡河鑒之近地、明人不悟渡河而陷三營、征韓錄、義弘兵欲出戰、義弘曰、彼多兵也、不可容易戰、俟彼來攻一舉決勝敗、一元使茅國科詣新寨説義弘以和親、義弘不從、二十八日、明兵襲泗川舊館、征伐記・秀吉譜、舊館義弘兵川上忠實・相良賴豊等以兵三百守之、義弘既令忠實等退新寨、忠實將發、一元兵適來攻、征韓錄、敵將李寧稱驍勇挺衆而進、我兵擊殺焉、二十九日、我兵出刈禾稻、明兵俄至、驍將盧得功以騎兵衝突中銃斃、我兵力戰而寡兵不支走新寨、平壌錄、戰死百五十餘人、征韓錄、新寨兵將救泗川、義弘曰、棄泗川兵固不忍也、然大軍尾敗兵而入城、城不可保、各守其營勿敢出、然義弘臣伊勢貞昌馳馬護敗兵而入新寨、征伐記・秀吉譜・島津家記曰、二十七日敵兵襲古丸、我兵苦戰得入營、古丸指舊館也、義弘謂諸臣曰、彼火望津欲乘騷擾而挫我、似得謀矣、然如其涉河當據永春・昆陽而爲營、數遣輕兵于新寨、佻戰以察我虚實而後決戰、謀不出于此、燒永春・昆陽、失其所據野次暴露、其無智亦甚矣、必其來戰是送死也、征韓錄、明人果遣使于新寨曰、明日朔董・茅二將率十萬騎兵將攻新寨、以使告知、島津家記、○按本書記二將名曰、孟

老父那等文那董老爺茅老斧之誤也、今訂之、寬永系圖作盤老爺亦董之誤也、○征伐記曰、此日明兵進圍新寨蓋誤矣、是月明主下石星于獄論死、明史、十月朔、一元遣茅國器・彭信古・郝三瞍・師道立・馬呈文・藍芳威來圍新寨、平壤錄、義弘・忠恒登櫓指揮兵士發銃矢、義弘亦親發銃、東門互以銃矢爭、北門敵競進而城兵纔二千、義弘謂、寡兵遂難永保城、下令曰、殺出以決勝敗于一時、將開門忽有赤白二狐、自城頭走入酣戰場、義弘自櫓上見曰、此戰勝之祥也、城兵爲之彌競、後見一狐被傷死城外、一狐不知所之、義弘瘞之、令僧誦經弔云、島津家記、戰自卯至巳、明兵用木槓打破城門一扇、而信古兵皆京城亡賴不善火器、木槓破藥發半天俱黑、明兵自驚乱、義弘父子乘機一時殺出、彭兵先走、平壤錄、忠恒追擊明兵三騎、自敗兵中回轡觝忠恒、忠恒斬其一下馬將獲其級、二人窺間直進、忠恒兵平田宗位・床並佐助驅逐二人、忠恒馬走敵中、宗位獲馬而乘忠恒、忠恒復逐敵、征韓錄、郝師騎兵方環城而射、見信古敗亦走、平壤錄、國器・邦榮察我兵空城逐北謂、乘虛陷城、其兵一萬許旋旆將再攻城、島津忠長悟之防敵兵、手下兵纔不盈百、忠長令曰、我兵逐北無相援者、而地濱大海以寡敵衆、是我死所也、皆令下馬短兵相接苦戰、明兵恃衆競進圍之數重、寺山久兼謂、敵陣後必有步擔・隷卒擾之以試、竊分兵俄發矢銃、輿隷驚前軍廻顧、忠長乘機奮戰敵遂退、我兵益競追擊、征韓錄、藍芳威欲斷後不能、一元術盡衆皆潰、彭兵三千止存五六十、芳兵亦損六七百、其餘死傷不可勝紀、國器走至望津謂、我兵復據望津前功盡矣、欲收散兵以復守望津、一元曰、此地狐立、倭兵來攻何以禦之、不如還星州、以圖再擧、於是無一留者、盡日奔回忍餒扶傷、天寒日暮晝伏夜行奔走一二百里、器聲震野、平壤錄、此日義弘・忠恒追擊明兵自午至申、斬首三萬八千七百餘、投望津河水而死、義弘・忠恒手親所斬殺許多、薩兵死者市來清十郎・瀨戸口彌七二人而已、先是蔚山・順天與明兵相持、此日明兵進圍城聞泗川敗、皆解圍逃去、二日義弘命擊城畔地二十間、埋斬首築塚爲京觀、島津家記、以其所劓盛十大樽贈於名護屋、自此明・朝鮮彌畏石曼子兵威、明音呼島津國訓爲石曼子矣、秀吉譜○九州記曰、明人懼稱鬼島津、此日義弘發使于名護屋報戰捷、利家・景勝與東照宮議而答書賞其大功、且令諸將退釜山而班師于本邦、島津家記・古簡雜纂、明主斬馬呈文・郝三瞍、落信古等職奪一元官、董一元傳、先是陳璘提督水軍與一元・貴綎分道進、副將陳鑾及鄧子龍・馬文煥・季金・張良相等屬焉、兵萬三千餘、

戰艦數百分布忠清・全羅・慶尚諸海口、陳璘傳、明兵之向順天也、明水軍至海口、義弘與寺澤正成議、發水師襲之、敵軍敗去、我兵追擊燒其後去船二艘、島津家記・忠恒與薩州留守書、諸將皆遣使賀義弘戰勝、島津家記、秀吉之薨也遺言曰、我死後姑秘喪、淺野長政・石田三成速赴筑紫、令鮮地諸將還本邦、如班師不易　德川殿及利家深謀遠慮、莫使十萬兵士爲外土枯骨、　東照宮令長政・三成赴筑前覇家臺督歸師事、秀吉譜・征伐記・寛永系圖○毛利家記曰、秀元與長政等共赴覇家臺蓋誤矣、遣德永壽昌渡海蜜訃諸將傳遺令班師、藤堂家記、八日、德永壽昌至泗川傳遺命、令翌月十五日諸將皆會於釜山旋師、又至順天告之行長、時義弘戰捷後明人大懼、十三日、國器遣參謀史龍涯與友理及譯人張昂于新寨議和、行長・正成亦相會和議成矣、十七日、以國器弟國科爲質送于泗川、征韓錄○征伐記曰、國科等八人、○島津家記曰、朝鮮遣謁負於義弘爲質、及明年和議成送還朝鮮質、按謁負蓋謂濱之訛、謂濱國科之號也、而國科之還詳載之續編、劉綎亦請和于行長、行長許之、綎以劉天爵爲質、於是諸將相約以翌月十日爲旋師期、晦義弘・義智・宗茂・行長連署檄諸將曰、順天・南海・泗川・固城四所期日而當會唐島、先鋒船當以順次發、征韓錄、而明懲泗川敗不敢出師、時泗川之勝未達本邦、征伐記、京畿訃傳、西征師太危、明軍益大至歸路既絶、藤堂家記、東照宮憂之將親航海、遽徵東國兵、利家適寢疾聞之曰、德川殿輕動內難必作、我當與疾如肥卧董軍事、衆推藤堂高虎勝其任、　東照宮俞之、令高虎遄赴朝鮮護諸將還、高虎屆覇家臺、聽義弘大破明兵無復後顧之憂諸將得振旅遂還、征伐記・藤堂家記・黑田家記、張昂明南京人也、幼喪母繼母惡昂欲害之、昂遁來本邦居薩摩顯娃郡氏原、土民憐而撫育焉、天正十六年繼母歿而赴來、於是又還南京、以其久居本邦爲譯者、称孫次郎、寺澤正成問昂曰、泗川勝敗明人評之如何、昂曰、我聞國器所言、其説曰、我敗于新寨、其失有五矣、島津令寡兵據望津險、吾誤謂、兵多、自六月末至九月相持、遂令新寨修營堅固、其失一也、予謂、先拔固城泗川自潰、而一元不從予言、攻泗川而敗、其失二也、戰泗川也令陳璘乘其虛以舟師燒城、而璘失期不至、其失三也、予又謂、彼軍無大砲、而彼以大砲擊破、且燒藥櫃出我不意、其失四也、及彼虛城以逐我兵、予欲乘機搗其虛、而爲島津忠長所支吾、其失五也、嚙臍何及矣、征韓錄、十一月諸將云々、

487

『椛山紹劔自記』

一慶長三年戊戌春之比ゟ、太閤様御小惱之由ニ而、御慰

なとも兎角ニ御沙汰候、春夏ニ至て御養性と有けれ共、七月十七日御卒、此前稜ニ諸侍召寄候而、天下泰平を思召候とて、御遺物各拜領候、本朝之事ハ如此也、高麗ニ而以數万之軍勢、漢南衆薩广陣所へ押懸早、武庫様のかれさる処と思召ける故、御氣等も不被懸候也、能比ニ打出、嶋津兵庫頭比來ハ聞つらん、今日ハ目にも見よ、高麗漢南衆といへとも防戰ハ同事なるへし、人衆之多少ニ者不入とて懸出給而、敵を打事三萬八千七百餘也、首を切懸渡し委敷注し候へハ、打捨等ニ到てハ六七萬とそ申ける、吳國本朝之褒美無比類事也、軈而高麗之事ハ不及申、漢南迄も御手に可參之由候得共、日本御談合何程候哉、軈者引陳と候而和平之役也、然處ニ船本ニ番兵來而防戰有、敵大船也、日本之船ハ少き故、自由ニ乱れ合たる軍なれは、敵可叶とも見へさりけりが、おこの高名せめにハしかしとや思召けん、無事故ふさんかい江御着候、是又御名誉前代未聞之由沙汰無極也、如此嶋津殿御名誉と承候事ハ、敵大船數万艘ニ而責懸候時、今ハ不及力防矢覧、とく〳〵御退候へと椛山權左衞門也防矢仕候与、大音聲ニ而暇乞して敵船江押向、敵も此船を目ニ掛戰隙ニ、御船延行候つゝ、さは仕勝事なれ共、大船ゟなけ火を以船をやきそこなふ間、無了簡武庫様御船遙ニ成ぬ、今ハ能比と思て戰を指置候而、なんはいと云島ハ對馬陳所也、此戰之隙ニ對馬殿ハ陳を打捨候而、外海之様被逃候也、此陳所へ押付候而取のほり候、暫此陳を可持せ也、敵も此陳を取巻取籠責可被議定有けるなり、様〻談合すると見得たり、程經てミれ共人やなかりけん、山〳〵江籠居らんとて、五三日猶豫しける處ニ、身分ハ五百ニ及しを壱人も不落のりける社神変なれ、彼權左衞門ハ國危き時分、龍伯様御上洛之時御供申御奉公申候、其時北条御責之時分　又一様御供申度之御奉公今ニ不初事也、然共養子親大野殿之上意を被背候時分、就夫先高麗入之時陰ニ罷居候處を、又市様召出し召列候、然ハ名護や御出船之時も船數少しとて、久高か船と候而壱岐・對馬・釜山浦迄渡海申候、如此候而奥陳ニ武庫様御坐候ニ奉追付、御父子御寄合之刻御面談ニ御約束候、一萬斛被下候而召仕候する也、然處ニ　又一様ニ後れ奉り、侘人之分にて、立寄木の本ハ頼かけなく紅葉ちりけりと云る様ニ成行、髪をおろし浮世をゐとひ、諸國修行ニも出はやと思立由也、然處ニ　龍伯様

ゟ召出し召仕へしと候、于今到てハ迷惑なから罷出候處ニ　又市様被仰置候とて、聽而御料所よし百引と云在所被下候、是等も今不望敷候へ共不及力、又御奉公ニ罷出候、儅ハ少之知行なれ共　古殿様ゟ被下候一万石と存候するとて、具足笠不及申、人衆之仕立刀二ッ金を取て九作也、隨分調候而今ハ分限之成とて、頓而高麗へ參候、自元狹としからぬ分別なれハ、分限振廻也、如此候而　武庫様中比御歸朝之時御供申、直ニ京へ御出仕なれハ、京都ニ而屋形作之下知被仰付候、武庫様御下向之時分御供ニ而候、然ハ又　武庫高麗江御渡海候之間、又御供ニ而片時も離れ不奉、漢南人寄せ來候時も一口請取申候、然ハ大軍を打亡ニ而引陳之時、番船ニ懸合候而　武庫様を退申、防矢仕候而對馬陳江立籠候、敵船此陳所をまほり日本衆も五百人計也、烽を燒聞取野外伏置渡しけるを見てや、敵船も懸のき碇を卸ス、　武庫様を退申つ、今ハ我ゝものかりて見ハやと五百人之衆談合候而、夜更て此はんはいの島五六里計有所ニ行、小船老ッを見付而、本陳ちやくせん嶋崎江五人三人ッゝ乘せてくり運、五百之人數手負迄もくり渡し、後ニ久高渡り申候事、諸人賴母敷事ニ被思候、其内ニ色め悪き人も有ける也、理や、扨彼ちやくせん之島より小船をふさんかいへ遣候、其間一兩日彼島へ留候人衆之心中不及是非候、若ニ防矢仕候人衆之事ハ定而相果候半与、釜山浦之人衆も如本朝引取もや候覧なと、侘あへる人も有けんかし、久高も余りの才覚にや、暫シの兵粮ハ有へし、此島ハ馬牛有所なれハ心安し、是ニて堪忍申候而、儅又朝鮮國中へ懸出打隨候ハゝ、本朝へ注進仕、定而迎取之船も參候半、又高麗麗(ママ)入も可有なとゝ申候而、少も氣色おとらす有けるこそ、心武き事とハ諸人申合□□□□□ける、夫而已ならす五百人之衆各ゝ心武シ、思切けるも理弐也、武庫様御父子を退申、防矢射る程之者共不省身も尤也、就中久高ハ娚之太郎三郎を同心也、名字之者ニ孫左衞門・早崎甚右衞門・同名与助・河添李允・毛利木兵衞・別府藤兵衞・三之丞なとゝ言にさかしき者共遠廻り、都合悴者五十人計思切事無比類、如此候而迎船を待付候而、一人も不殘釜山浦へ漕付、各ゝ生れて來と　武庫様被仰候、懸御目對馬・壱岐嶋迄御供申、夫ゟ國へ下り申候、彼大郎三郎ハ古規久之子、雖若輩久高同道ニ而　武庫様御上洛之時御供申、豊前小倉なとゝ云所

ニ而越年、是を初にて永〻在京中也、小姓奉公にて有ける、　武庫國ニ御下、高麗へ御渡し候へハ供申御側はなれす、　武庫様乗馬之名人ニ而候へハ、上意を得て太郎三郎も馬を心得乗ける故ニ、京都にて賀茂之祭ニけいば有、諸大名馬を出し候也、　島津殿馬二ッ、悪き馬也とて社人是を乗らす、時過候而左様ニ候ハ、、此馬我〻乗て見候半とて、一ッを太郎三郎、一ッをハ矢野と云人乗、先静ニ乗、後ニハ社人共へ競馬之まねをして、後に成先ニ成二騎回進退ニ候へハ、京関東之人衆自由自在之見物、日本一なとゝ皆〻申相なり、其後高麗ニ而ハ分捕餘多仕候、其上敵大亡之時、百五六十騎ニ而後殿して退候を、太郎三郎馬ニ而行方を懸切候而谷底へ追落し候、一人も不殘打留候事、一身武き心ニ而候へとも、馬自由ならすハ難成振舞也、此引陳之時も首之骨ニ手負けれとも、物ともせす働き歸朝申候、　武庫様も太郎三郎一手ニ而敵を懸分候而百餘人打取候、名誉無比類と度〻被仰候、　上様御父子者直ニ御上洛候、引陳之時防矢射候人衆皆〻道具船共打捨候之間、國元之様ニ罷歸候也、如此候而　武庫様者於京都御褒美無比類也、御ひろい様ゟ爲御礼正宗之御腰之物御拜領、金三千枚之刀と申候、又高城・出水・薩州之跡分御知行也、各〻京ニ而御越年也、

488

「義弘公御譜中」

慶長三年十月朔日、癸丑、昨日明將使一价榜木於樹我營外、不違其文、明國大將董一元、裨將孟老爺・茅國器率二十万精兵、待曉天立羽旄鳴鼙鼓、殆迄巳時逼新塞來、義弘廻還城中謂諸將士卒曰、早卒勿發鳥銃、待敵兵之進寄城壁下、而後宜致百發百中之功、時敵兵漸前進城隍外柵之邊、丁此之時、各發大鐵炮之際、有一白狐之出東門外入敵軍中、義弘父子見之、則敬信合手以爲、氏神稲荷大明神助父子已進先登乎、且復赤狐二疋出自水手有發向大軍中、自義弘父子至諸將士卒、僉以見之、各共合掌思得神助、豫無不喜悦者、少焉起火災於敵軍中、宛如疾雷、蓋木槓破而火燒其藥、黒烟霧靉、明兵迷騒、義弘父子見其變忽開城門指揮、諸將士卒爭先突出急擊之、明兵敗走、太刀初者即白狐所出顕之地也、後聞之、時廿八歳也、斬敵者江田吉右衛門尉、忠恒主率兵擊彭信古之三千兵、強敵數百之中兩三輩横干戈有向來忠恒主者、斬戮其中一人、忽然下馬捕獲其首、此時忠恒主受干戈傷於肩、乘馬亦雖有傷疵之受不深、而驚馳入于敵軍中、平田新左

衞門尉宗位從忠恒主先捕其首持歩卒、次追乘馬於敵軍中無恙牽來駕忠恒主、主手自斬首數人、從兵亦爭先各大破之、縱横翦屠三千兵悉死、其幸免者僅五六十餘也、郝三瞍・師道立亦同敗崩、國器・邦榮見之謂、城中無人、卽督一万衆、皆赤衣、均進向城振武威接干戈、由是所向之騎歩有曳兵走者、唯島津圖書頭忠長奮出、向強敵切齒接兵刃得當敵首、然而多兵增威進來、欲斬戮忠長者甚以急也、丁此之時、忠長踞座不動、黑田加兵衞尉者亦隔小流有其傍矣、野添帶刀長・本田與兵衞尉馳進其場增少勢、匪啻合力、殺敵兵者多矣、義弘遠臨其戰場不忍見忠長之將向戰死、使旗下之騎歩數百往其場救危急、又樺山權左衞門尉久高・新納新八郎久元忠長二男、寺山四郎左衞門尉久兼・新納彌太右衞門尉忠增・同姓勘解由久宣・川上源三郎久首・同姓久右衞門尉久智等追敗走之敵軍、而登北嶺望南方、則見忠長從兵少寡而對大軍苦戰難遁之有危急、各思救之、而地之相去者殆七八町許、未謀得以何道可救焉之際、寺山久兼曰、我之歩卒等速進大軍之後陣、發鐵炮於彼此可殺荷負從卒、爲指揮汗馬之勞、由茲從卒周章騷動捨肩荷物、顚沛欲以逃去、後陣已敗、則前陣何得挑戰乎、續以敗崩、是亦依久兼之奇策也、明兵千騎許遂以敗死、以故諸軍亦皆敗走、藍芳威已逃北、唯董一元勵諸將欲施軍而復攻之、中軍徐世卿於望津留戰、義弘之兵執之殺焉、至是大破、我之諸將士卒乘勝追亡逐北迄于晉州河畔五六里程、伏屍者宛如砂礫、今日義弘父子親斬敵首者數級也、騎歩共以雖曰渡晉州大川欲鏖敗走明兵、而天日已傾西山、以故義弘叱之止焉、今日我之軍上鳶飛戾天者無有際限、敵之軍上亦數萬小烏亂飛宛如黑雲、而不得見雲上也、自他鳶烏如此者未知其故、蓋可得勝利兆乎、全我師歸新寨之路有廣野之備美景、遠新寨二三町、義弘留馬謂諸將曰、於此地爲勝吐氣者可乎否、老將等答曰、不有如此地矣、丁此之時謂忠恒主曰、予可役勝吐氣、吾子其爲大將宜座牀机、固辭及再三矣、於茲島津圖書頭忠長・伊集院下野入道抱節等告忠恒主曰、不有他將之受援兵、只得當家以一勢今日之有大利、予曹思是雖曰異國本朝豈有可比倫者乎哉、早止固辭隨義弘命云尒、由此言既應諾焉、義弘著黑絲威鎧向南方座牀机、川上四郎兵衞尉忠兄持冑蹲踞左方、川上久右衞門尉久智持長刀脱鞘、蹲踞右方、大將忠恒主著紫威大實有龍蒔繪、甲冑向東方座牀机蓋傘、樺山權左衞門尉久高後任美濃守、入道稱玄屑、持寶刀蹲踞左方、太刀不到其場、以故如斯也、川上源三郎久首後任因幡守、稱久國、入道稱商山也、持團子蹲踞右方、軍衆悉以向東蹲踞大

將之後、時忠恒主所斬獲數級之中二級與義弘所斬戮數級之中一級、共三級備于此焉、忠恒主最初所斬獲之一級、與忠恒主戰傷主之肩者首也、平田新左衞門尉宗位後任安房介稱宗衡、持來、而去予置三間許左方、義弘先拔利劔執逆手、下切崎持右脇向劔於後、六足反倍、右足始焉、後向劔崎於首印焉、首引導畢後、右廻歸又座牀机、於茲忠兄著冑於義弘、此冑稱小和泉、有鍬形、先是義弘再渡于朝鮮國之時、殿下秀吉公賜之、時有台言曰、度々得勝利、佳例異他物、既著帶於六具向南方合掌而唱文、其後久智捧長刀、執之身刷七足反倍、左足始焉、又唱文而發於角商宮三々九聲、軍衆和焉者三聲、而其事終矣、於茲揚左扇子賀大勝利、而後歸入于新寨者也、

義弘問諸將曰、今日我之騎歩戰死者若干乎、答曰、市來清十郎麑島之士、瀨戸口彌七帖佐之士、只兩輩耳、

今朝所走入于大敵中之赤狐一疋、中半弓矢數多死于戰場、埋之於新寨北岡、能吊之能祭之、念是氏神稻荷代當家之急難助予之曹乎哉、異國不知、於本朝者未聞如此之有奇類者也、

慶長三年十月二日、使諸將士卒所昨日斬戮之聚敵首、細密算之、則凡三万八千七百十七級也、此外斬棄草萊與没溺河水者不知其數、所聚之首悉劓之盛十大樽獻于日本、自是之後明兵・朝鮮兵彌畏石曼子之兵威、石曼子者明國薩島津也、

慶長三年十月二日、達昨日大利於日本　龍伯公、其注文之案記左、

489

慶長三年十月一日、於朝鮮國泗川表討捕首注文之事、

首壹萬百八　麑島方衆討捕也、

首九千五百二十　帖佐方衆討捕也、

首八千三百八十三　富隈方衆討捕也、

首六千五百六十　伊集院源次郎手討捕、

首四千百四十六　北鄕作左衞門手討捕、

合三万八千七百十七

此外切捨者不知其數、

490

「家久公御譜中」

慶長三年十月朔日、癸丑、明國大將董一元、裨將孟老爺・茅國器率二十万精兵待曉天立羽旄鳴鼙鼓、殆迄巳時逼新寨、達令於諸將士卒曰、早卒勿發鳥銃、以敵兵之進寄城壁下爲佳期、而後宜致百發百中之功、敵兵漸以前進城隍外柵之邊、當此之時、各發大鐵炮之際、有一白狐之出東門外入敵軍中、我父子見之、敬信合掌以爲、氏神稻荷大明神助父子已進先登乎、餘人無見之者、又赤狐二疋出自

水手有發向大軍中、自我父子至諸將士卒見之、各共合掌思得神助、豫莫不喜悦者、少焉起火災於大敵軍中、宛如疾雷、蓋木槇破、而火燒其藥、黑烟鬖鬖明兵迷騷、吾父子見其變忽開城門指揮、諸將士卒爭先突出急擊之、明兵敗走、太刀初者即白狐所出現之地也、後聞之、斬敵者江田吉右衞門尉、時廿八歳、忠恒率兵擊彭信古之三千兵、強敵數百之中兩三輩横干戈有向來者、斬戮其中一人、忽然下馬切獲其首、此時受干戈傷於肩、乘馬亦雖有傷疵之受不深、而驚馳入於敵軍中、平田新左衞門尉宗位從我進來、先捕其首持歩卒、次追乘馬於敵軍中無恙率來駕吾、吾又手自斬首數人、從兵爭先各大破之、縱横翦屠三千兵悉死、其幸免者僅五六十餘也、郝三瞍・師道立亦同敗崩、國器・邦榮見之謂、城中無人、即督一万衆皆赤衣、均進向城振武威接干戈、由是向其地之騎歩有曳兵走者、唯島津圖書頭忠長奮出、向強敵切歯接兵刃得當敵首、然而多兵增威進來欲斬戮忠長者甚以急也、丁此之時、忠長踞座不動、黑田加兵衞尉者亦隔小流有其傍矣、野添帯刀長・本田治右衞門尉馳進其場増少勢、匪啻合力、殺敵兵者多矣、　義弘公遠臨其戰場不忍見忠長之將向戰死、使旗下騎歩數百往其場救危急、又樺山權左衞門尉久高・新納新八郎久元忠長二男、寺山四郎左衞門尉久兼・新納弥太右衞門尉忠増・同姓勘解由久宣・川上源三郎久首・同姓久右衞門尉久智等追敗走之敵軍、而登北嶺望南方、則見忠長從兵少寡而對大軍苦戰難遁之有危急、各思救之、而地之相去者殆七八町許、未謀得以何道可救之之際、寺山久兼曰、我之歩卒等速進大軍之後陣、發鐵炮於彼此可殺荷負從卒、爲指揮汗馬之勞、由茲從卒周章騷動捨肩荷物顚沛欲以逃去、後陣已敗、則前陣何得挑戰乎、續以敗崩、是亦依久兼之奇策也、明兵千騎許遂以敗死、以故諸軍亦皆敗走、藍芳威已逃北、唯董一元勵諸將欲旋軍(カヘシテ)而復攻之、中軍徐世卿於望津留戰、執之殺焉、至是大破、我之諸將士卒乘勝追亡逐北迄于晉州河畔、五六里程伏屍者宛如砂礫也、今日父子親斬敵首者數級、騎歩共以雖曰渡晉州大川欲鑒敗走明兵、而天日已傾西山、以故　義弘公叱之止焉、今日我之軍上鳶飛戾天者無有限量、敵之軍上亦數萬小烏亂飛宛如黒雲、而不得見雲上、自他鳶烏群聚如此者未知其故如何、以私智慮之曰、蓋天所以示勝敗兩兆於自他乎、全我之師歸新寨之路頭有廣野之備美景、遠新寨二三町、　義弘公留馬曰、爲勝吐氣於此地何如、老將等答曰、是也、時義弘公曰、予可役勝吐氣、吾子其爲大將宜座牀机、忠恒固辭及數度矣、於茲老將等曰、今日大利思是雖曰異國本

朝、豈有可比倫者乎哉、早止固辭可隨　義弘公命、由此言
既應諾著甲冑、紫威大實有龍蒔繪、向東方座牀机蓋傘、樺山權左衞
門尉久高持寶刀蹲踞左方、太刀不到其場、以故如斯、川上源三郎久首（トモ）
持團子蹲踞右方、今日父子所斬獲數級之中共三級備于此
焉、忠恒最初斬戮之一級者、平田新左衞門尉宗位持進置
于　義弘公前、　義弘公下牀机向南方六足反倍首引導、
畢後座机上、帶於六具向南方合掌唱文執長刀爲身刷（ツクロヒヲ）七足
反倍、發於角商宮三々九聲、軍衆和焉者三聲、而其事既
終矣、於茲揚左扇子賀大勝利、而後歸入于新寨矣、今日
旗下兵市來清十郎只一人戰死也、
今朝走入于大軍中赤狐二疋之中一疋、中半弓矢數多死于
戰場、埋之於新寨北岡、能吊之能祭之、念是氏神稻荷代
當家之急難、助予之曹者乎、異國未知、於本朝者無聞如
此有奇類也、
十月二日、使諸將士卒所昨日斬戮之聚敵首、算之於細密、
則凡三万八千七百十七級也、此外斬棄草萊與没溺河水者
不知其數、所聚之首悉梟（ハネツツテ）之、盛十大樽獻于日本也、
慶長三年十月二日、達昨日大利於日本　龍伯公、其注文
之案記左、
「首注文ハ前ノ義弘公御譜ニ同文故略ス」

491

「圖書頭忠長譜中」

慶長三年戊戌六月、新八郎忠在渡于朝鮮來、故忠倍七月
歸本朝矣、其後大明之大軍救朝鮮之危急來、有典吏龍涯
與友者、贈書於我陣泗川曰、　天朝宣諭倭將、尓今侵害
朝鮮、棲身於叢林峻嶺、晝夜勞苦食用不敷云々、又曰、
乘我天兵來攻、放尓一條生路、揚帆渡海免刑戮云々、又
曰、我有天兵百萬在此、何難於征勦云々、　義弘主誦其
書曰、兵家之利鈍勝敗敢不可期、豈男子不戰而屈其威武
乎、決勝負於兵馬場而後可止、价使聞其言得答書而歸去
矣、九月十九日、大明之兵二十萬騎屯于晉州城、是時有
我兵之守舊館城者、同廿八日之曙天、大明之兵襲之、其
戰如雷電之疾、我軍已敗、相良玄番助・勝目兵右衞門尉
已下百有餘人戰死、而其餘遁入泗川新城、而後大軍來圍、
雖然潛運奇籌堅閉城門、無一人之爲發向者、故至日將晡
之時、敵軍悉引退矣、十月朔日之曙、再竪羽旄鳴鼙鼓來
環我之泗川城、於是　義弘主　忠恒主開城門陳干戈、則
忠在亦隨之以擊其軍、敵軍已敗焉、欲乘勝以追北、則亦
還向相戰者不可當、是以我之騎步棄冑曳兵退散走去者多
矣、丁此之時、忠長奮出向敵、兵刃既接、疾視鬪戰、則
斬首強敵一人、然而不退倍威進來、而欲倒伏於忠長之勢

甚矣、忠長踞坐敢不動焉、黒田加兵衛尉亦在其傍、于時野添帯刀長・本田與兵衛尉二騎連來合力討殺魁兵數人、於茲　義弘主不忍見忠長等之將向戰死、而遣旗下之兵數百騎救之、時寺山四郎左衛門尉指揮汗馬之功甲於衆兵、以大明之師又敗、追亡逐北乘勝奔到于晋州川、去泗川者殆五六里、其間伏尸宛如棊石之亂也、總計敵首、則三萬八千七百餘員、而殺棄于草莽者不知其數矣、吁嗟血如川流、屍曙(ママ)沙礫、時耶命耶危急險難之秋也、此日忠長戰功匪啻　義弘主・忠恒主所以能知、兒童走卒亦無不加佳言者也、

492

「守右衛門尉彰久譜中末紙」

慶長三年戊戌六月下旬、大明及朝鮮大軍進屯晋州城、時義弘主欲決大捷於一舉、召數砦守兵盡入新寨、故舊館守兵亦九月二十七日、天未明潛兵出城、敵察之尾擊、忠實爲殿大苦戰、退敵遂參于新寨、味方戰死者百五十人所中忠實之甲冑矢三十六、使醫抜鏃吸血、　主亦手自撫其痍且賜妙藥而厭勞感功、加之賜寶刀、左右皆嘆羨之、

「彰久文祿四年七月五日病死、家老川上六郎兵衛忠實師旅ヲ率テ在陣セシコト前文ニ見ヘタリ、參照スヘシ」

493

「川上久辰譜中」

「朱カキ」「川上因幡守久國自作之文也」

慶長元年征赤國後屯泗川之新塞、同三年大明大將盤老爺・董一元、裨將孟老爺・國器率百萬之衆責泗川之寨、我寨既幾壞(チカシヤブル、ニ)、于時我衆僅七千餘也、　義弘主・忠恒主勵勇氣自爲先鋒、進馬入敵軍、士卒一心相翦屠、因茲敵軍敗績、國器進紅巾之兵十餘萬競來、然島津氏秘書監忠長以小勢支之而使打鐵炮、依之敵軍踉蹌(クヒラウ)、　義弘主爲救忠長雖倚備、近臣皆追敵散亂曾以無衆、久辰見之趨進至將前、義弘主曰、昔久朗於菱刈爲　兩君委命、今又久辰在、此可謂宿因也、寺山四郎左衛門久兼曰、在後陳雜兵先可破之、使歩兵打鐵炮、後軍忽敗北、依之國器衆皆敗績矣、逐北追迯獲首者三万八千七百餘級、於于爰國器請成(クイウヲギ)、以其弟渭濵爲質納我寨、

494

「寺山四郎左衛門久兼譜中」

朝鮮國征伐之時、爲　太守之供奉守晋州之城之際、大明大軍丁寄來時抽軍功者也、

慶長三年戊戌十月一日、大明大軍竪羽旄鳴兵鼓來、攻我之　太守父子所警衛之營泗川新寨、　太守父子開城門提

三尺、直進入數十萬軍中、軍一時潰、雖然一將不與衆軍敗向來、島津圖書頭忠長對之挑戰、死生存亡之際、久兼指揮衆兵横令攻討所向來之後軍、由是前軍亦敗、悉所以斬戮也、慶長十六年辛亥十月晦日死去、年四十五、法號卽安淨心居士、

495 「樺山權左衞門久高譜中」

慶長三年戊戌十月朔日、大明數十万之軍衆鳴鼙鼓來、我太守之所營圍泗川新城、我軍盡筋力爲防禦者不緩、是以敵軍忽敗、而伏數万之尸於廣野、時江南之強敵其長殆有及六尺者、向于久高競戰、且發勇力前寄已既引組、久高蒙疵故力不足、而負爲下矣、迄危急之時、郎從田實三之丞提鎧來衝當敵之顏、因茲久高勇氣發起、而斬獲敵首者也、

496 「平山氏系圖對馬守久清譜中」

我之　太守父子在于朝鮮國泗川新城、慶長三年戊戌十月朔日、數十万騎寄來圍新城矣、太守父子開城門指揮、以衝入太敵崩之、宛如湯雪、此時久清亦斬敵首者五級、慶長三年十二月、日本諸將悉歸陣焉云々、

497 「家久公御譜中」

「寫有之」

（本文書ハ五三七号文書ト同文ニツキ省略ス）

「朱カキ」
「慶長三年」十月四日　　忠恒

留主居衆

「此御書既ニ昔年ノ写ト同案ナレトモ、宛書ノ異同アレハ更ニ写置也」

498 「御譜雜抄」

（本文ハ四八二号記事ト同文ニツキ省略ス）

499 「仝」

（本文ハ四八八号記事ノ一部ト同文ニツキ省略ス）

500 「仝」

（本文ハ四八八号記事ノ一部ト同文ニツキ省略ス）

501 「仝」

（本文ハ四九〇号記事ノ一部ト同文ニツキ省略ス）

502 「仝」

（本文書ハ四八九号文書ト同文ニツキ省略ス）

503

「御文庫拾七番箱十四巻中」

慶長三年十月一日、於泗川表討捕首注文之事、

首八千四拾五　鹿兒嶋方之衆討捕之、

首七千五百七拾七　帖佐方之衆討捕之、

首六千六百七拾貳　冨隈方之衆討捕之、

首五千貳百廿貳　伊集院源次郎手討捕之、

首三千三百壱　北郷作左衞門尉手討捕之、

合而參万八百十七、此外切捨不數知、

「此一書、首數減少スト雖參考ノ爲載置也」

504

「北郷三久譜中」

慶長三年戊戌十月朔日、大明之將董一元・茅國器二十萬之兵繞攻於泗川新寨城甚急也、　義弘公　忠恒公自指揮兵大戰、鏖明兵數萬一擧、得首級三萬八千七百十七員矣、三久在其列、得首四千百四十六級、證書寫左記之、此日三久與明兵組落兩馬之間殆死、時　忠恒公馳馬來自斬明兵、　故三久脱虎口、乃與　忠恒公追明兵討之、居多得其名譽、

505

（本文書ハ四八九号文書ト同文ニツキ省略ス）

506

「樺山太郎三郎忠征子規久譜中」

慶長三年戊戌十月朔日、大明之大軍堅羽旄鳴鼙鼓來、我太守之所居圍泗川新城、敵軍漸敗、而伏數万之尸於原野、時一百五六十騎爲敗軍之殿、忠征走馬遮前途追落于深谷、一人之無遁去者、不得御馬之術者豈如此乎、

507

「古御文書三番箱中義久公二ノ巻」「義久公御譜中正文有之トアリ」

御願狀

一伊勢兩太神宮　御代參兩人之事

一熊野三所大權現　御代參詣之事

右意趣者、高麗國御陳中一大事ヒ相聞者也、至此時奉憑伊勢・熊野兩太神宮之擁護、凝無二丹誠企願力處也、依此御一念怨敵退散、陣中平安、御歸國早速一一大慶故也、

仍立願狀如件、

慶長三年戊戌初冬吉日　大檀主白敬

508

「古御文書三番箱中」「義久公御譜中正文有之トアリ」

奉祈念立願事

右於高麗當陣無吳儀、嶋津兵庫頭并息又八郎於歸朝者、御本地供一千座可勤修者也、仍願書如件、

慶長三年且冬十三日　　嶋津修理大夫入道（花押）

敬白

509

「義弘公御譜中」

「正文在加治木衆池田右近」

猶〻申入候、てき三万人之くひそろい申候、其外切すてかすしれす候、付者治介殿もてき七人打取候間、即四郎兵衞殿　上様へ言上被成候、一段之御意に而候、爲心得申入候、又〻此由源五殿へも心得可有候、又ハ伊福小内記殿・町田仲左殿・岩下藤七殿・家村杢殿・石川新右衞門殿、其外若衆中へ御心得たのミ入候、

態令啓上候、仍者打立申時分御念比之段申ニ無計候、隨而者此度紅南人八十万騎程かけ候處ニ、　御上様御打勝被成、三國之覚不過之候欤と御意に而候、然處ニ　武庫様てき五人御打被成候、又若殿様四人御打被成候、御馬もてきニかけ入、かんなん之様に參候、拙子事も御兩殿御供申候間、一段御意忝なく候、爲御存知之如此候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長三年」十月六日　　竹内宮内左実吉（花押）

池田六左衞門尉殿　參人〻御中

510

『雜抄』

（本文書ハ五〇九号文書ト同文ニツキ省略ス）

十月二日　　竹内宮内左実吉

池田六左衞門殿　參人〻御中

511

「旧記抄」

一慶長三年十月朔日癸丑、明兵二十萬新塞攻寄、　義弘城中ニ御下知、城壁下迄不進寄内者一發茂勿放發、其時一白狐東門外ニ出而入敵軍中、　御父子様合掌敬信、氏神稲荷之御神護と被思召、時又水手より赤狐二疋出而大軍中ニ馳入を見而、將卒喜踊、折柄敵軍失火、藥烟如疾雷、即開城門御討出被得大利、勝吐氣被爲執行、赤狐一疋中半弓死于戰場、埋於新塞被吊祭云〻、

512

「在加治木池田右近」

（本文書ハ五〇九号文書ト同文ニツキ省略ス）

513

「佐多民部左衛門覚書」

一順天・泗川の瀬戸口へ兵船ヲ相揃候所ニ、翌朝大明之兵船仕懸候、防戦之事以之外ニて敵船も焼亡、又きり崩ふね共ニ雖有之、數万艘ニて更無勝利、味方之舟も數万焼亡ニて、ちやくせんと申嶋へ椛山權左衛門殿を始、數人衆追上候へとも、遮而敵船ニ無勝利、味かた心易引逃事、釜山浦へ東西當手相揃候而、如日本御歸陳候、嶋津殿御舟、惣而跡にて候事、

514

「仝」

一同三年戊戌九月廿七日、大明人・朝鮮人晋州表より泗川軍衆指懸防戦候、厥時相良玄番戦死ス、

515

「仝」

一其後大明人加藤殿陳へ相懸候へ共、手桶無之候、それより小西攝津守殿陳おひはらひ、すてに小島ニおひ上めいわくにて御坐候ヲ、嶋津様ゟ御かせひ被成候事、

516

「仝」

一同年十月、猛勢相催御城ニ取懸ニて城を取返、たてをつきしとミ鉄炮をそろへ御城ニ打懸候、然ハ大手の口より石火矢をあまたうたせ候へ共、敵ほろひことの外いろめき候、其時御城御打出　御兩殿江軍兵働切崩、敵餘多うちとり、晋州川を限ニ追詰、悉く川ニ溺もあり、またハうちとらるゝも有之候、然ハ川之むかへに丸尾有、その尾の上に大將ハたまり居候ニ、嶋津様の御備の一本杉を敵中ニさしとり候へハ、其時敵ハ敗北して逃行を、晋州迄追詰候へハ、藏を作置、かてを入御坐候を悉ク焼亡候へハ、日もはや入かた罷成候間、先御城の様ニいつれも御歸り被成候、然ハ敵の打くひをそそへ候へハ、御手柄ニて三萬八千七百餘騎計捕、其くひ塚を三拾間計ニ御つかせ、その上ニ松うへ置被成候、

517

「仝」

一其後大明之兩軍大將孟老那・盤老那ゟ太夫參望龍濱と云者を爲使者度々懸引有之、依之和儀之、

518

『旧記抄』

（本文書ハ五三七号文書ト同文ニツキ省略ス）

十月十日　「イニ十二日トモ有之」　忠恒

本田六右衛門殿

鎌田出雲殿

比志島紀伊殿

山田越前殿　「此七人之名書ハ別本ニ有之、写載置也」

新納武藏殿

平田太郎左衛門殿

町田出羽入道殿

「此御狀ハ、廿二日之御狀と御同案也、如何」

519

「義弘公御譜中」

慶長三年十月十三日、大明軍中使稱龍涯與友理者遣我新寨、談乎和諸要事之際、寺澤志摩守正成・小西攝津守行長訪予之父子、遠來乎此地矣、是亦如渡之得船似暗之得燈、令兩輩對談龍涯、所以粗致和平之約也、

520

「家久公御譜中」

慶長三年十月十三日、大明軍中使稱龍涯與友理者遣我新寨、談乎和諸要事之際、寺澤志摩守正成・小西攝津守行長訪予之父子遠來乎此地、父子大悦曰、如渡之得舟似暗之見燈、令兩輩對談龍涯、所以粗致和平契約也、

龍涯與友理不違和平之前約、攜來于茅國器之弟茅渭濱、而稱賀授父子、父子受之所以附與于寺澤志摩守正成也、

521

「正文在本田助丞」「義弘公御譜中ニ在リ　糺合ス」

猶〻銀子參枚持せ申候、あまりかすかに御座候得共補空書計候、以上、

其地へ御下向之由、遠路御大儀之至、度〻御苦労無申事候、爲御見廻使者上せ申候事、

一此表之儀先札ニ申入候樣、今度取懸候大明人討果、不慮ニ得大利候、其後者曽而敵不見來候、當分此堺氣遣無御座候事、

一順天取巻候番船へ一行可仕之由、固城南海衆寺志广守殿令相談、去十日卯刻押掛候之処、九日之夜番船令敗北、されとも殘船抑下手之衆燒申候、勿論順天陸地之敵も引退候事、

一蔚山表へ罷出候敵も引退候、早竟今度又八郎手柄を仕、數萬騎討果候、其故を以諸口之敵も引退候、此段者定其隱御座有間敷候、雖然田舍者之儀候条、手前之粉骨

522

もうつもれ可申欤と存計候、併貴老可被聞食置候事、
一此比竜伯所より申越候、萬一引陣之儀於有之者、又八郎も拙者も先歸國仕候て、相甘可申之由、貴老ゟ被仰聞候由承届候、又八郎事者數年在陣仕、國元見廻も不仕候間、歸國候ても可然候ハん欤、我等儀ハ貴老へ御用之儀共御座候条、今度者自是直罷上可得貴意と存候事、
一此度於致上洛者、いつもの人數にて可罷上候哉、又いかほとかさめ候て召つれ可申候ハんや、御指南次第可致分別候事、
一昨日此口へれうがい(龍涯)と申候唐人罷出、御無事之儀申談度之由申候、折節寺志・小攝被致越合候て龍涯へ被成對談候、於様子者寺志・小攝ゟ可被申上候、併口上ニ大方申含候間、可被聞食候間、追々可得御意候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長三年」十月十四日　羽兵　義弘(花押)

石治少様
人々御中

「義久公御譜中」

523

御家門様より發句之事うけ給候、度々斟酌仕候へ共、しいて承候間、如此慶長三年十月十四日御興行、

「正文有之」

於近衛殿興行之連歌

初何

散うせぬもみちハつゝく砌かな　龍伯
しくれ〳〵し軒の松風　杉
明渡る高根の雲に月落て　紹巴
田面のすゑハはつ鴈のこゑ　春
はるかなる湊入江の秋の水　廣橋大納言
しほひの跡ハしるき川上　昌叱
なひきふす芦まに殘る夕附る　左兵衛佐
人かへるなり一むらのミち　宗岩
駒(うま)やたゝこなたかなたにいはふらん　玄仍
明るかり場の野へのすゑ〳〵　景敏
ふる雪もミるか内より晴わたり　如水
窓にむかひの山のまちかさ　久正
古寺の鐘のひゝきに暮初て　兼雄
往來もまれになる難波かた　龍伯

かけかふる人やなからのはし柱　杉
春日もいれはみちたとるなり　紹巴
重なれる雲に霞に雨そゝき　春
尾上のかせの長閑なる音　廣橋大納言
小泊瀬やはなの匂ひに明離れ　昌叱
あかなく月になれ〳〵てけり　左兵衛佐
長夜もかたれハさらにおもほえす　宗岩
ちきりし秋にめくりあふ中　玄仍
二小萩さく宿ハ恨る人とひて　景敏
野へとなりぬる庭のさひしさ　如水
池ハたゝそれと計の埋水　久正
雪そ氷の上にかさなる　杉
ふきと吹夜はの嵐の音絶て　龍伯
しはしまとろむ夢のみしかき　春
敷捨し人さハかしき旅まくら　紹巴
急き出るや遠き澤ミち　昌叱
ゆるされて関の戸さしや越ぬらん　廣橋大納言
行かひしけき九重のうち　宗岩
袖の香もあやしき程にふれ〳〵て　左兵衛佐
たれにちきれる今朝の衣〳〵　景敏

難面を待夜なからの月もうし　玄仍
ふけてや露の置まよふらん　龍伯
二ノウすゝみこしはた寒く成はしゐして　杉
そらやいつしか秋のはつ風　紹巴
一葉ちる木陰分行暮ふかミ　如水
小舟さし捨歸るさの袖　久正
釣人のさほ取あへぬ雨見えて　昌叱
瀨〻にくたくるなみの川音　玄仍
あやうきハ岩根つたひの道ならし　春
雲につゝけるかつらきのミね　廣橋大納言
待〻しけふや今年の花さかり　龍伯
さくらかさしてよむ和歌　左兵衛佐
永日も酒の席のともなひに　景敏
月にことさらすめる爪音　宗岩
行袖もおほゐの方ハ霧晴て　紹巴
むかしの秋をおもひ出けり　春
三おとろふる千種の花をうつしゑに　廣橋大納言
野分にかへもかたふけるかけ　昌叱
里〳〵の小家のかすの顯れて　如水
朝けゆふけの烟たえせぬ　紹巴

ちりそふも日のさす方ハ薄雪に　玄仍
そよき出たる園の竹のは　杉
むら鳥の宿り求る聲ハして　左兵衞佐
山ハあたりにミえぬ野の原　春
今宵又いかに結はん草枕　久正
したふもはかな古郷の夢　景敏
おもひねやあらましかハの月の友　昌叱
身をさへ秋のなからへハうし　龍伯
かけ初し露の情のたかひきて　杉
わすれもはてぬ涙なにそも　玄仍
形見今あたなる人のから衣　紹巴
たれをやもめのよすかともせん　昌叱
おもふその夫さへたゝ絶〻に　宗岩
世をいとひつゝ引こもる山　如水
住馴し明石の岡ハ名殘あれや　玄仍
里をはるかにへたて行跡　杉
袖ハたゝ鐘聞あへすおき出て　景敏
おり〳〵月におこなひのこゑ　久正
露のまもにこらし物よ我こゝろ　春
ひやゝかになるいさゝ井の水　龍伯

岩かきをくゝる雫の音添て　昌叱
槇の葉分のはなくつる色　紹巴
春雨の後ハ霧ふる山深ミ　杉
雉子の聲ハいつくなるらん　廣橋大納言
四空にしもあかる雲雀の囀て　如水
野はゆく〳〵も草高き道　左兵衞佐
夏ハたゝ水のなかれのすゑほそミ　紹巴
立すゝむへきかたもわかれす　宗岩
西になる軒の入日ハさやかにて　春
色も鳥羽田の里の秋風　昌叱
衣擣こゑ遠からす聞えきぬ　玄仍
覚て身にしむ曉の夢　杉
限もなき月をくもらす涙にて　龍伯
うき手枕に忍ふ古しへ　景敏
老の春なくさめかほの郭公　昌叱
うくひすの音のかすかなる暮　廣橋大納言
野を遠ミいく重霞の籠ぬらん　久正
ゆく袖見えぬ山きはの里　紹巴
花ハミな落盡したる夏木立　杉
みは葉かくれになれる梅かえ　昌叱

五月雨にかこふ砌もふり終て　左兵衛佐

さかひも水に分れさりけり

春

舟ハたゝ深田のあせに引なやミ　紹巴

しつハ物うき心なるらし　龍伯

たゝしきをあふける國の司にて　景敏

神わさをしもあらたむる時　如水

龍伯九　景敏八　杉十句　如水七　紹巴十一

久正六　春九句　兼雄一　廣橋大納言七

昌叱十一　左兵衛佐七　宗岩六　玄仍八△

524

「義久公御譜中」

慶長三年十月十四日、又東山龍山公にて春日大明神を句の上に置て當座あり、

525

「正文有之」

朝鶯

か

春日山みねの朝日もやハらくる　信尹

光につるゝうくひすのこゑ

花

す

すたれまきみきりの花に馴〳〵て　龍山

いまより千代の春やちきらむ

夕立

か

かけふかく茂る木の間の夕立に　龍玄

なひきそひたる草むらの露

納涼

た

たちならふ松の木かけはをのつから　久正

をとせぬかせもすゝしかりけり

鹿

い

いろ〳〵の千種の花のひろき野を　龍伯

分やはつくす秋のさをしか

月

み

みるまゝにひかりもそひて山のはに　龍山

猶すみのほる秋の夜の月

霜

山の端に月もいまはたさよふけて　龍玄

霜をきわたす板はしの末

冬月

う

薄雪のうへにみる〳〵色そへて　久正

月さしうつる庭の面かな

神祇

し

しきしまの道たへぬこそ住よしの
神のちかひのしるしなるらめ　　龍伯

祝

むつましき神と君とのすなほなる
御代こそふかきさかえなるらめ　　龍山

「正文有之」

神祇（しもじ）

しきしまの道たえぬこそ住吉の
神のちかひのしるしなるらめ

526

「御文庫二番箱家久公三巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

幸便条一書令啓候、仍大明之人數順天・蔚山至兩所取（詰）誥申旨候、扨〻無御心元儀候、御機遣段察存候、徳長・宮長次被罷渡候間、何とそ御談合可相極と存候、蒐角無御越度御歸朝候へかしと存候、尚其表相替儀候者、定而近日御注進可有之と存候、隨其様子、從此方御行之様子可有之かと存候、急申入候間不能一二候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長三年」十月十五日　　加左馬助　茂勝（花押）

嶋又八様
人〻御中

527

「御文庫二番箱義弘公四巻中」「義弘公御譜中ニ在リ」

幸便之条令啓候、

一蔚山・順天表大明人罷出由風聞候ニ付而、日本諸浦警固船大あたけ（安宅）・小あたけ用意候て、先中國・四國并九鬼大隅・堀内・脇坂なと可被指渡ニ相究、右之衆御普請被相除、船用意候事、

一最前も如申入候、石治・淺彈至博多早下向被申候、船以下も被差下候、其方一左右次第ニ可有渡海候、

一大明人定而久敷ハ在陳仕候事成間敷候、若在陣仕候者、順風次第右ニ如申、舟手其外中國・四國・淡路爲先勢可有渡海候間、可被討果事眼前候、様子追〻可預御注進候、

一其表より注進狀慥不來候へ共、前かとの注進ニ可罷出様ニ相聞候付て、如此陣觸候て、追〻御人數被差下候、

一あたけかこい舟之注文、別紙ニ爲御披見進之候、

一ちやわんの城之儀、竹嶋へ一所ニ被打入候て可然由、各相談候間、其御心得候て其表へ大明人取懸候ハすハ、早〻竹嶋へ一所ニ被打入可然候、

一そてん・こせんの事不入所候間、から嶋へ被引取順天

一着之間、唐嶋ニ一城被相拵可有在城旨候、可有其御

心得候、

一此方出羽奥州ニ至まて一段と静謐候、國〻衆何も在伏見候、諸事入魂候間不可有御氣遣候、恐〻謹言、

「朱カキ」
「慶長三年」十月十六日　　増右
長盛（花押）

薩广侍從殿
人〻御中

528

「義弘公御譜中」

龍涯與友理不違和平之前約、攜來茅國器之弟茅渭濱、而以稱質授我、受之所以附與于寺澤志摩守正成也、

529

「家久公御譜中」

「正文在島津安藝守久雄」

好便之条一筆申候、其以來依不知便風、無音背本意存候、先日者武庫御煩、頓被得驗氣之由其聞候間、尤珎重候、御孝行至遠路早速御心遣候段感入存計、抑此比從大唐加勢數万騎取出候由風聞、御氣遣之段不及申候、乍去早速引退無事御歸朝之段所希候、將又大峯祈念之卷數守進入候、万吉、期面上之時計候、猶期後喜候也、

「朱カキ」
「慶長三年」十月十六日　　（昭高院如雪）（花押）

嶋津又八郎殿

530

『雜抄』

好便之条用一書候、仍其元無何事御坐候哉、此方も御同前ニ候、次者爰元無衣しやうニ而候間、何共迷惑至極候、御引陳も近〻と申候へ共、ふさんかいの御逗留もや候覧、又引陳共候共、つむきのきる物、又木綿ぬのこ一ッ御仕立候て御遣可有候、隨而當陳ニ江南仁數万騎打出候へ共、軈而時刻を不移追くつし被打取候、揃首合四万八千と申候、切捨合而八万餘と江南仁之方より申來候、かゝる目を驚かす儀無之候、將又令申候、今度者皆〻銀子多く被取せ候へ共、我〻主從之事ハ敵ハ餘多切候へ共、銀子ハ少も不取候、又先日般若寺の御同宿之歸朝之時、てるま一人かくせい一人彼御坊江賴存候而遣申候、相届候哉承度候、又種子嶋六兵衞殿御歸朝、藤介かかくせい壱人あつらへ申候而遣し候か届候哉、是も承度候、相届候ハ、、吉松の兄の所へそくさいに御遣し候へと申候、爲御心得之候、藤介事も江南仁罷出候時分者、足いたゞ候て迷惑申候、未無尓〻候、又市之允申候、女子一人めし置候、萬事御心を被添候而可給候、又〻清左衞門・源五左衞門

尉兩人ニ其元御奉公涯分精ニ入候て肝要候、又岩根之老名へも右同前ニ候、此書狀孫九郎ニ御狩ニ御登候而御逗留候間、市允前より孫九郎殿へ御文と候而令遣候、恐惶謹言、

【慶長三年】拾月十六日　　白孫九郎

531

「御文庫二番箱家久公八巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚以八月以來豊州者在國仕故、其元之御左右も不承、以役狀も不申達、弥無音相積心外迄御座候、頓而御歸朝之節万々可得御意候、以上、

其表唐人罷出様ニ承無御心元存、以使札令申候、先度爲御使徳永・宮木被相渡候、其元無吳儀御歸朝奉待計候、兼亦石治・淺彈頃筑前へ可有下着之由候、定而彼御兩人ゟ　上方之様子可被仰達之間、不能懇書候、其以後頓而以使札も御見廻可申達處ニ何かと取紛、無其儀無音中々書中ニ難申分候、蒐角御歸朝之節、以面上事可申達候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長三年」十月十八日　　恒和泉　一直（花押）

嶋又八様
人々中

532

「御文庫拾七番箱十四巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

九月廿八日之御狀一昨夜丑之刻に令拜見候、和平之御談合相破、江南仁數万騎執懸候哉、御心遣不及是非候、然處ニ傍輩中各より之注進之狀到來候之趣者、去昨日泗川之御城へ指寄候之処ニ、　若殿様御手柄ヲ以被切崩、大勢被打果之由候、扨々寄特之御仕合連々御信心之故、乍案中目出度奉存計候、定而近日中ニ可爲御歸朝候之間、萬以貴面可申述候、尚巨細者有河仲右衞門尉へ申含候条、可然様ニ御披露所仰候、恐惶謹言、

「朱カキ」「慶長三年」十月十八日　　比志嶋紀伊守　國貞（花押）
本田六右衞門　正親（花押）

（忠長）圖書頭殿

533

『安樂氏文書』

其後者不申通候、然ハ今度泗川御城江唐人廿万程ニて相應仕寄を仕、本口へ十丈計（諸）石火矢なと被構候、その御城ゟ切出被成候、左候へハ塩入之御横入ことくニ御切出被成候間、追崩〳〵及四方被打取候、誠ニ前代未聞、三國之御覚を爲被成由、諸陳ゟも御悦ニ而候、去十一日ニ

志摩守殿・梁河殿御着ニて追打被成候、死骸者御見舞以之外御褒美ニ而候、夫ゟ唐人方ゟ以書狀無事之儀申來候、依夫かけ引衆中ニ而、然者今月廿八日質人可出由相定、都之様ニ罷越候ハ、相閉候哉、于今不知候、自然無事之調うハ、年々明暮ニも歸朝可申候、其砌可申承候、恐惶謹言、

尚々晋州を限ニ被打せ候、横一里竪四里ハ自つらき切ふせ被成候、誠ニ何ニもたとへかたく候、諸人も日本ニて豊後衆くつれ、せんこら〳〵「本々」くつれ、たから嶋原ニ而も是程成事、似たる事もなきよし物沙汰候、一人ニて三十人、又廿人、又一人二人不切人ハ無之候、扨又人々小者共、しろかねの百目弐百目、又十匁廿匁ツ、不取者もなく候、乍去我々ハ一分も取不申候、夫ニ而ハ百匁弐百匁取申たる由、与所ゟ承候へともかくし申候間、さすかにおし取ハ不被仕、人足ニおとり不へんの躰ニて、おの〳〵の懸御目度候事、御すいもし可被成候、此旨寺主馬様・宮式部(ヨメズ)▨・新山市兵・新傳右・杢田留いつれへも御心得可有之候、扨又辻助兵思之外死去候間、ヶ様成事ニ付ても迷惑御察有之候、以上、

高麗泗川ゟ

長崎六郎右衛門名乗

慶長三年戊戌十月十八日

大隅濱之市ニ而

安樂大炊助殿人々御中

534

『雜抄』

慶長三年十月十八日

懐舊之連歌

もろく散色やなけ木の下紅葉　宗親

月影さむくのこる朝露　久正

「外數行略ス」

宗親十四　綱家九　久正廿五　家詮九

豊信十　忠増十一　友知九　住次一

長倍十一

535

「御文庫二番箱家久公八巻中」「家久公御譜中ニ在リ」

尚々番船等も不罷出候故、遠見ニ付置候者も、其左右不申來候、若自今以後左様之儀も見え候ハ、、弥可申入候、以上、

被入御念、急度御使者于今不初之儀、更々御懇意難謝尽候、然者此十七日之夜、從順天扱之唐人罷出候由申來候ニ付て、西堂も下野も一昨日如順天罷出候、別而相替儀も無之候、自然珎敷事も候ハヽ、急度注進可申入候、少も疑事有間敷与令存候、委曲御使者へ申入候条、令省略候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長三年」
十月廿日　　羽柴對馬
　　吉智(花押)

嶋又八様人々御中
　　参

536

『雑抄』

尚々納戸衆奉公油断有ましく候、其外定衆宮仕衆少茂無聊尓様ニ可有之候、旅庵已上鎌田兵部なと涯分可申候、萬一氣任せ之人者後日聞しらへ、歸朝之時分萬可申付候、已上、

（以下ハ五三七号文書ト同文ニツキ省略ス）

537

「御文庫四拾八番箱中」

急度申遣候、此國之儀從大明國大軍打出、蔚山・順天・泗川右三道ニ相分、人數別而當所へハ大勢相賦依押寄、連々如覚悟候、晋州表へ召置候番手之衆も如本城引入候處、此境ニ差向將軍和睦入眼之旨頻依令懇望、小西攝津守殿・寺澤志摩守殿遂相談、日本与大明後代無嘲様にと和平之入魂候処、從敵方令違變、右之沙汰有之間ニ繰寄猛勢、去月廿七日古館へ爲物見少々召置候人數を取籠、雖欲討果候、各碎手切通、無異儀當城へ引籠候、乍去少々越度共候て、其侭敵も引退ニ付而、其涯不及行、最前和睦之約諾令表裡、剰人數少々被討捕、其欝憤難散處、去昨日巳刻數十万騎押寄、當城相囲企鋒楯候事、從大國之催ニ候間、(夥カ)儀可有推量候、然間長々於及籠城者、諸卒労弥防戦可難成と令議定、不計善悪遂安否之合戦、切崩數万騎討捕、得不慮之勝利、於三國發名誉候事不可勝計候、　武庫様御事者不始于今儀候、我等初而之事ニ此等之仕合、併非所人力成候、抑當家之儀者代々信心專候処、近年神社及毀破候条、神力佛力も無頼、連々雖訟之、龍伯様　武庫様被摔(「本マヽ、砕カ」)御信心之旨不被成御忘失、往古之勤故にや、惣別當國平生不相見白狐・赤狐戦場へ走出、奇特不思議各成感力、是軍兵得勇、猛勢易討果候事、偏神力且諸卒之粉骨難述筆舌次第候、寺社中連々被抽懇祈方へ可被申渡候、如此於手前得大利候故、順天・蔚山取巻

敵も悉引退候、順天事者此中海陸取巻候間、番船爲可討果、南海・固城衆寺志以相談調兵船押懸候處、番船も早敗軍候て一二艘後行候を燒捨候、當時者いつかたも静謐之躰候、因茲在高麗從諸大名預使者播面目候、近日又從敵方差出使官、無事之儀申候間、猶以小攝・寺志令談合、具申含右之使返進候、無別儀於相濟者、定頓可爲歸朝候、今少之儀候間、留主居衆以熟談、弥無緩様分別簡要候、謹言、

十月廿二日　　忠恒（花押）

本田六右衞門尉（正親）殿
鎌田出雲守（政近）殿
比志嶋紀伊守（国貞）殿
山田越前（利安）入道殿
新納武藏（忠元）入道殿
平田太郎左衞門尉（増宗）殿
町田出羽（久笹）入道殿

538

「御文庫四拾八番箱（義久公）巻中」「義久公御譜中案文有之トアリ」

猶々御見次之儀ハ可有之やうニモ不聞候、御分別干要候、此一紙則火中可有之候、

追而令申候、先日高麗陳所へ唐人相働由其聞候、就其所ノ様子たち聞申候、御見次ともきり〳〵と有之、さらにも不聞候、然者無事之儀御いそき候する欤、とかくさしよせ御才覚尤之時分ニ候、誠ニ不似合之儀ニ候へ共申入候、恐々謹言、

十月廿七日　　竜伯（「御判ナシ」）

石治少老

539

「義弘公御譜中」

覚

一東目之衆引取候以後、各申談日限相定、順天・南海・泗川・固城四ヶ所唐嶋迄可引取事、

一順天・泗川兩口申拵、御無事之儀兩方共相澄儀候へハ、一段可然候、一方ニ相究事候者、一日成共はやきかたニ人質請取可相澄事、いつれの道ニも引取刻ハ、先手より次第〳〵ニ可引取事、

付泗川・固城之舟順天へ差遣可引取候、泗川之舟ハ南海迄、固城之舟ハ唐嶋瀬戸迄送届可申事、

以上

「朱カキ」「慶長三年」十月晦日　　小西摂津守（行長）（花押）

（立花宗茂）
羽柴左近（花押）
（宗義智）
羽柴對馬守（花押）
（義弘）
羽柴兵庫頭（花押）